

1. 創世記1章と進化論 創世記1：1－5

聖書を初めて読む多くの人にとって、創世記1章の神による天地創造は、今日の学校教育で教えられている進化論と矛盾していると感じるのではないのでしょうか。では創世記1章は歴史的事実ではなく神話であり、進化論が歴史的事実なののでしょうか。ここでは3つの宇宙と生物と人間の始まりについての説明を見てみましょう。

①進化論

進化論の土台には無神論があります。そこで創造主なる神がいないという前提で、世界と生命の存在を説明します。進化論では、宇宙の存在については、ビッグバンによる大爆発によって宇宙が誕生したと説明します。また生物の存在については、すべての生物は単純な原始生物から高等生物に、そして最後に最も高等な生物である人間に、突然変異と自然淘汰(生物は厳しい自然環境に適したものだけが生き残る)によって進化したと考えます。そして進化は「偶然」の積み重ねの中で起こったと説明します。進化論はダーウインの「種の起源」の著書によって発表されました。しかし今日、多くの科学者からも進化論の説明には様々な無理があることが指摘されています。例えば、進化論は単純な種から高等な種に進化していったと教えていますが、生物学上は一つの種を超えて別の種を生み出すことはできません。また化石には進化の過程を示す中間種は全く発見されていません。また偶然の積み重ねによる高等生物への進化は、確率的に限りなくゼロに近いものなのです。

②有神論的進化論

有神論的進化論は、創造論と進化論の折衷案です。神の存在を認めつつ、神は世界を創造する手段として進化のプロセスを用いられたと説明します。この説明は自由主義神学の立場に立つ人たちによって受け入れられてきました。この立場では、創世記1章から11章を歴史的事実として捉えず、比喩的に解釈します。また科学と聖書を同等の立場において、両者にできるだけ矛盾のないような説明を試みます。しかしその結果、聖書の教えとは随分違う説明をしています。例えば、有神論的進化論では、進化によって最終的に「神のかたち」としての人間になってきたと考えるため、神がご自身のかたちとして創造した最初の人アダムとエバの存在を否定します。

③創造論

創造論は、聖書が教えるとおりに、創造主なる神が、宇宙と地球とその中に住むすべての生物と、神のかたちとしての最初の人アダムとエバを創造されたと信じます。「信じる」と言ったのには理由があります。実は進化論が科学的であり、創造論が非科学的であるわけではありません。進化論の土台となる無神論は、神はいないと信じているであり、その立場に立って説明しているにすぎません。同様に、創造論も神はいると信じているので、神のことばである聖書の教えを受け入れ信じているのです。しかし、創造論は決して妄信ではありません。その説明は論理的にも納得のいくものなのです。例えば、この世界が秩序正しい自然法則に則って存在していることを覚える時に、進化論が教える偶然の産物とは考えにくいのです。むしろ宇宙も自然も生物も人間も、神が秩序正しく創造したと考える方が理にかなっています。また、もし人間が進化の過程をたどって偶然存在しているのであれば、人間の生きる意味も目的も見出すことはできません。しかし、神が生きる意味と目的をもって人を創造してくださったのであれば、私たちの人生には確かな意味があるのです。創造論は、聖書は誤りのない神のことばと信じる福音主義神学に立つ人たち(福音派)によって受け入れられています。

2. 6日の天地創造の意味 創世記1：24－31

①学校の教科書で教えられている地球と宇宙の年齢

今日の学校の教科書では、地球の年齢は約46億年、宇宙の年齢は約137億年と記されています。一方で、創世記1章の6日間の天地創造の1日を24時間と考えれば、地球と宇宙の年齢は6千年から1万年程ではないかと言われます。もしそうであれば、クリスチャンでない人から、聖書が示す年齢と科学が示す年齢は矛盾するのではないかとの意見が出ることは当然のことでしょう。私たちは聖書をどのように理解すればよいのでしょうか。

②聖書の6日間の天地創造の意味

1) 創世記1：27と2：15－22の比較

創世記1：27では、第6日の最後に人間を男と女に創造されたことが記されています。「神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」一方で創世記2：15－22を見れば、神はアダムを創造された後、第6日が終わる数時間前に女のエバを創造されたのではないことがわかります。神はアダムをエデンの園に置き、そこを耕させ、守らせしめました。またあらゆる動物と空の鳥をアダムのもとに連れて来て、アダムに名をつけさせしめました。しかし、アダムにはふさわしい助けでは見つからなかったため、ついに神はアダムを眠らせ、彼のあばら骨からエバを創造されたのでした。この男女の創造を見ても、天地創造の1日が、24時間の1日ではないことがわかります。

2) 聖書の「日」の意味

旧約聖書はヘブル語で書かれており、「日」と訳されている言葉はヘブル語では「ヨーム」です。ヨームにはいくつかの意味があります。①昼(1:5) ②24時間の1日③長い期間「期間」「代」「世」「時代」「とき」(2:4)ですから、6日間の天地創造の記事を144時間(24時間×6日)の6日間と理解することが、必ずしも唯一の聖書的解釈ではないことがわかります。

3) 聖書の天地創造の意味

聖書解釈において大切なことは、ただ聖書を表面的に読むことではなく、どのような目的で書かれているのかを理解することです。創世記1章の天地創造の記事においては、神が144時間で世界を創造されたことを伝えるために書かれたのではないことを理解する必要があります。創世記1章の記事が書かれた目的は、天地を創造された神がおられること、その神は無からすべてのものを創造されたこと、神が世界とその中のすべての生き物を非常に良いものとして造られたこと、そして神のかたちとして人間を創造されたこと、この神に従って生きることが人間にとって大切なことです。そのことを理解する時に、1日24時間を6日間の創造に当てはめることが唯一の正しい聖書解釈であると考えないことがわかります。

4) 天地創造の長期説の理解

聖書信仰に立つ人達も、6日間の創造については幾つかの解釈に分かれます。その中で「長期説」が一番創世記の記事に沿った解釈ではないかと考えます。長期説では「日」を長い期間を表す言葉と解釈します。そして、神は「1日」という段階ごとに様々なものを創造されたと考えます。一つの段階は、次の段階に進むための環境を整える準備となります。第1日には神は光を創造し、闇と区別されました。第2日には大空と海、第3日には地と植物を創造されました。第4日には太陽と月、星、第5日には鳥と魚、そして第6日には動物と人間を創造されました。創世記は天地創造の年代を伝えるために書かれた書物ではありません。そうではなく、宇宙も地球もすべての生物もそして人間も、神によって創造されたことと、この神を信じ、神に従って生きることの幸いを教えているのです。

4. アダムとエバは救われたか 創世記 3 : 11 - 21

アダムとエバは、神の命令に背き、善悪の知識の木の実を食べて、罪を犯しました。神はその後、アダムとエバの罪を赦し、二人は救われたのでしょうか。答えは、二人は神によって赦され、救われました。アダムとエバは最初に罪を犯した人であるとともに、最初に救われた人でもありました。では二人の救いをどのように確認することができるのでしょうか。3:11-21 はアダムとエバの悔い改めから始まります。神から善悪の知識の木の実を食べたのかと問われると、二人は言い訳をしながらも神に対して食べたことを認めます。この時の彼らの悔い改めは、決して明確なものとは言えないかもしれませんが、それでも神の前に自分たちの罪を認めたのです。神は二人に対して、罪に対する神のさばきを伝えると同時に、その前に罪人に対する神の救いの計画を示されるのです。

3:15 は「原福音」と呼ばれる、救い主による救いの最初の啓示です。「彼(女の子孫として来られる救い主)はおまえ(蛇にふんするサタン)の頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」即ち、やがて来られる救い主に対してサタンは抵抗するが、救い主はサタン勝利して救いを成し遂げることが預言されています。さらに、罪に対する神のさばきが語られた後、3 : 21 で神は皮の衣を作って、アダムとエバに着せられました。「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。」そのために神は動物を犠牲にし、動物の血が初めて流されたのです。

これは、3:15 の神の救いの計画がどのように実現するかを、アダムとエバに実際に示され、二人に適用された出来事でした。すなわち神が人間の罪を赦すためには、罪のない身代わりのいけにえの血が流される必要があることを表しています。このことは、やがて旧約聖書の動物のいけにえの規程につながり、さらに救い主イエスの血による罪の贖いの完成へとつながったのです。神はこの血による贖いをまずアダムとエバに与えられたので、二人の罪は赦されて救われたのです。このことを理解することによって、次の 4 章のカインとアベルのささげ物に対する問いに答えることができます。

4. なぜアベルのささげ物だけが神に受け入れられたのか 創世記 4 : 3 - 5

アダムとエバは、動物の皮の衣を神から着せられたことによって、血による罪の贖いという神の救いの方法を理解しました。そして、このことによって、自分たちの罪の大きさとともに神の救いの恵みに対する感謝を覚えたことでしょう。そして、この神の救いの方法を当然二人の息子たちに伝えたとはいえません。この 3 章に記されている神の救いの啓示とアダムとエバへの救いの適用という文脈から、4 章の出来事をとらえることが大切です。

「しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを主へのささげ物として持ってきた。」(4:3) カインは両親から教えられた血による贖いという神の救いの方法を信じず、自分の考えで大地の実りをささげ物として神の前に持ってきました。カインのささげ物は、彼の自己中心の態度と間違ったささげ物の内容のゆえに、神に受け入れられなかったのです。一方、アベルは両親から教えられたとおりに、神へのささげ物として、動物のいけにえである自分の羊の中から肥えたものを神の前に持ってきました。そして、そのいけにえは神に受け入れられたのです。「アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持ってきた。主はアベルとそのささげ物に目を留められた。」(4:4)

ヘブル 11:4 には次のように記されています。「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。神は彼のささげ物を良いささげ物だと証ししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって今もなお語っています。」聖書は創世記から黙示録まで、キリストの十字架の血による贖いを啓示する書物なのです。

5. なぜ最初の人間は長生きなのか 創世記 5 : 1 - 5

創世記 5 章の系図には、アダムをはじめとする最初の人間が、今日では考えられないような長生きをしたことが記されています。アダムは 930 年、セツは 912 年、エノシュは 905 年生きました。この年数をどのように理解すればよいのでしょうか。聖書学者の理解は主に 2 つに分かれています。

①実際にこの年数を生きた

ノアの洪水までは、地球の環境は良い状態だったので、人間は長生きすることができたと考えます。そして、ノアの洪水の後、地球の環境は悪くなり、それに伴って人間の寿命も徐々に短くなったと理解します。ノアの洪水の結果、創世記 6:3 で「人の齢は 120 年にしよう」と神が定められたとおりになり、詩篇 90:10 では「私たちの齢は 70 年。健やかであっても 80 年。」となりました。現在の最高齢の記録は 1997 年に死亡したフランス人の 122 歳だそうです。

②アダムからノアまでの期間が長い期間であることを表す表現方法

創世記 5 章の長寿とアダムからノアまでが 10 人となっている表現は、古代オリエントの文学様式を用いた長い期間を表す表現と理解します。すなわちアダムからノアまでの期間が非常に長いことを 10 人の長寿の系図によって表したのです。11 章のセムからアブラムまでの系図も同じ 10 人によって構成されているので、この期間も長かったことを伝えていると考えます。そして、徐々に寿命が短くなっていくことによって、アブラハムから始まる歴史として確認できる時代につながります。どちらの説を取ったとしても、聖書を誤りのない神のことばとして読むことができます。

6. 創世記 6 章の神の子らとネフィリムとはだれのことか 創世記 6 : 1 - 4

旧約聖書では、「神の子」は「御使い」と「神を信じる者」のどちらかの意味で用いられています。例えば、ヨブ記 1 : 6 では神の子は御使いの意味です。「ある日、神の子らがやってきて、主の前に立った。サタンもやってきて、彼らの中にいた。」一方、ホセア 1 : 10 では神の子は神を信じる者として用いられています。「彼らは『生ける神の子ら』と言われる。」ですから、創世記 6:2 の神の子らは神を信じている人たちを意味していると理解できます。それは、イエスがマタイ 22:30 で「復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。」と言われたことと一致します。

ところが、人の悪が増大する時代になると、信者であっても神のみこころを第一とするよりも、外見的な美しさや自分の好みで結婚するようになり、その結果、神が意図された結婚や家庭が崩壊していく様子を 6 章は表しています。

では、ネフィリムとはどのような人のことでしょうか。6:4 では「彼らは昔からの勇士であり、名のある者たちであった。」とあります。また民数記 13:33 では「私たちは、そこでネフィリムを、ネフィリムの末裔のアナク人を見た。私たちの目には自分たちがバッタのように見えたし、彼らの目にもそう見えただろう。」とあります。このことからわかることは、ネフィリムとは体格の大きな勇士のことだとわかります。現在、平均身長が最も高い国のオランダでは男性の平均身長は 184 cm、女性は 171 cm だそうです。またスーダン南部のディンガ族は、村によっては男性平均身長が 195 cm を超えるそうです。ネフィリムの平均身長は何センチだったのでしょうか。

また 6:4 は、神の子らと人の娘たちの間に生まれた子供が、ネフィリムと言っているのではありません。さらに、ネフィリムもノアの洪水で滅んだので、民数記 13:33 のネフィリムの末裔のアナク人が、創世記 6:4 のネフィリムに直接つながる子孫でもありません。体格の大きな勇士のことをネフィリムと旧約聖書では呼んでいるのです。

7. ノアの洪水は全世界をおおう洪水だったか 創世記 7 : 1 1 - 2 0

主は、地上に人の悪が増大していく中で、洪水によって悪を行う人間を滅ぼすことにしました。そして、主の心にかなうノアに箱舟を造るように命じ、ノアの家族 8 人と動物が箱舟に入って、洪水から救われるようにされました。箱舟は長さ 300 キュビト 132m、幅 50 キュビト 22m、高さ 30 キュビト 13.2m で、羊だと 12 万 5 千頭を載せる容積があります。また、箱舟の長さ、幅、高さの比率 30:5:3 は、現在の船舶にも使われている安全性を保つ船の比率です。ノアは主が言われたとおりに箱舟を作り、ノアの家族とあらゆる種類の動物が入った後、主は箱舟の戸を閉じ、洪水が起こり、水が地上から引くまで約一年間かかりました。地上が完全に乾いたとき、神はノアに箱舟から出て来るように命じ、こうしてノアの家族 8 人から新たな人類の歴史が始まりました。このノアの洪水については、地球規模の洪水か地域限定の洪水かの 2 つの解釈があります。

1. 地球規模の洪水

この解釈では、地球規模の洪水であったことを示す主な理由をいくつか記します。

①ノアの洪水前の地球の環境は今とは異なっており、地球規模の洪水が起こり得る環境にあった。創世記 1 : 7 の「大空の下にある水」はやがて海になった水である一方、「大空にある水」は地球をおおう水蒸気の層と考えられる。2:6 では「豊かな水が地から湧き上がり、大地の前面を潤していた」とあり、雨が降ったことは記されていない。そして 7:11 で「その日に、大いなる淵の源がごとごとく裂け、天の水門が開かれた」ことによって、地球をおおっていた水蒸気の層が一気に雨となって地上に降り、地球規模の大洪水が起こったと考えられる。

②洪水から救われるためには箱舟が必要であった。もし、地域限定の洪水であれば、別の高い地域に逃れることによって洪水から守られる。しかし、聖書は高い山をおおう洪水であったため、箱舟に入らなかったすべての動物や人は死に絶えたと記している。

③世界中に大洪水伝説があり、ノアの子孫が世界中に広がっていく中で伝わったものと考えられる。

④地層は長い年月を経て形成されたと考えられていたが、火山の爆発などでは短時間で地層が形成されていることが近年わかり、洪水によって一気に厚い地層が形成されたと考えることができる。

⑤化石についても従来は長い年月を経て作られていったと考えられていた。しかし近年は化石ができるためには生物が死んだあと、すぐに土砂に埋もれ、酸素や微生物から遮断される必要があることがわかってきた。洪水によって一気に化石ができたと考えられる。

2. 地域限定の洪水

地域限定の洪水と解釈する立場は、メソポタミア地域に限定した洪水だったと理解します。その理由として次のことが挙げられます。

①ノアの洪水の聖書の描写は、洪水を経験したノアの視界に映る状況を記していると考えられる。だから 7:19 の「天の下にある高い山々もすべておおわれた」を必ずしも「全世界のすべての山々」と理解する必要はなく、ノアが知る範囲の高い山々と理解することができる。

②ノアの時代は、人々は比較的狭い地域に集まって生活をしていたと考えられる。人間が地の全面に散らされていくのは、バベルの塔の出来事の後なので、ノアの洪水も当時の人々が生活している範囲に限定して起こったと考えられる。

聖書信仰の立場ではどちらの解釈を取ったとしても、聖書が教えるとおりに、ノアの洪水によって、当時の人々は罪に対する神のさばきを受けて滅び、箱舟に乗ったノアの家族 8 人だけが救われたことを信じます。ノアの洪水は神のさばきを表し、箱舟はイエスの十字架の救いを表しているのです。

8. バベルの塔とことばの混乱 創世記 11 : 1－9

①10 : 5、20、31 と 11 : 1 の関係

10 : 5、20、31 ではヤフェテ、ハム、セムの系図は、「その氏族、その言語、その地、国民ごと」の系図であり、様々な言語が使われていたことが記されています。一方、11 : 1 では「さて、全地は一つの話しことば、一つの共通の言葉であったとあります。」では、どちらが正しいのでしょうか。答えはどちらも正しいです。10 章の系図はノアの息子たちからアブラハムの前の時代までを含んでいます。一方で、11 章のバベルの塔の出来事は、10 章の系図の間に起こったことを記しています。

具体的には、10 : 8－10 の地上で最初の勇士となったニムロデの時代にバベルの塔の出来事が起こったのではないかと考えられています。彼の王国はバベルやシンアルの地にあったと記されているからです。11:2 には「人々が東の方へ移動した時、彼らはシンアルの地に平地を見つけて、そこに住んだ。」とあります。シンアルとはシュメールのことで、メソポタミア南部(現在のイラク)、後にバビロニア帝国とその首都バビロンがあった場所です。ノアの洪水の後、この地に人々が移動してきた時、一つの共通の言葉を話していました。

②バベルの塔

シンアルに住み着いた人々は、バベルの塔と呼ばれる高い塔を建てました。その塔は、レンガ造りで瀝青(アスファルト)を用いて積み上げていきました。人々が塔を建てた目的が 11:4 に記されています。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名を上げよう。われわれが地の前面に散らされるといけないから。」彼らは「天に届く」塔を建てて、自分たちの名を上げ、自分たちが神の代わりになる目的で塔を建てました。また 9:1、7 の「生めよ。増えよ。地に満ちよ。」という神がノアに命じられた命令に逆らうために、塔と町を建てたのです。このようにバベルの塔は、人間の罪と神の反逆のしるしでした。メソポタミア地域では、バベルの塔を原型としたと考えられるいくつもの高い塔の遺跡が発見されています。それは、ジックラトと呼ばれる塔で、現在発見されている最大のジックラトは長さ 62m、幅 47m、高さ 20m あり、頂上は神殿になっています。古代の碑文には長さ 90m、高さ 100m のジックラトがあったことが記されています。

③ことばの混乱と全地に散らされる人々

神は、人間が一致してご自分に反逆するのをご覧になりました。そして、このままでは再びノアの洪水の前の悪に満ちた世界に戻ることを覚え、彼らのことばを混乱させ、互いの意思が通じないようにされました。ことばの混乱は、人間に対する神のさばきであるとともに神のあわれみでもありました。人々の話しことばが混乱した結果、人々は一致して神に逆らうことができなくなり、塔と町の建設を止めました。そして、神によって人々は地の前面に散らされていきました。こうして、神の直接介入によって、「地に満ちよ」という神のみこころが成就していったのです。バベルとは混乱を意味する言葉で、バビロンとも訳される言葉です。

ペンテコステは、バベルの塔と正反対の出来事です。その日、聖霊に満たされた弟子たちは、エルサレムに集まっていた人々のことばで、キリストの福音を語ったのでした。ペンテコステのメッセージは、地上と天を結ぶのは救い主イエス・キリストだということです。バベルの塔は、人間の側から天に届こうとする試みでしたが、それは不可能であり、人間の罪の現れでした。一方、キリストは天から地にへりくだって来て下さり、十字架の死によって救いを成し遂げ、復活して天に上り、父なる神の唯一の生ける道となってくださったのです。人々が信仰によってキリストのもとに集まるときに、全地に散らばるキリスト者は、信仰の一致をもって、神の御名をあがめるようになったのです。

9. メルキゼデクとイエス・キリストとの関係 創世記14:17-20、ヘブル6:20-7:3

創世記1~11章は「先史時代」と呼ばれ、歴史的に何年と特定することができない時代の出来事が記されています。聖書における先史時代の出来事は、非歴史的出来事のことではなく、歴史の中で確かに起こったが、それがいつ起こったのかはわからないということです。一方、創世記12章からは「有史時代」と呼ばれ、歴史的にいつ起こったかをおおよそ特定できる時代となります。アブラハムの時代はBC約2100年と考えられています。

さて、アブラハムは主の命令に従い、ハランの地を出発し、カナンの地に入りました。そして、甥ロトとの争いを避けるため、それぞれ離れて暮らすことにしました。ロトはヨルダンの低地のソドムにアブラハムはカナンに住みました。ところが、ソドムはエラムの王ケドルラオメルの連合軍に戦いで敗れ、すべての財産を奪われ、ロトも捕虜となって連れて行かれました。そこでアブラハムはケドメラオメルの連合軍を追跡し、連合軍を打ち破り、奪われた財産や捕虜となった人々を取り戻しました。アブラハムが戻って来ると、サレムの王でいと高き神の祭司であるメルキゼデクが出迎え、アブラハムを神の名によって祝福しました。アブラハムはすべての物の十分の一を彼に与えました。

詩篇110:4では、来るべき救い主について次のように預言されています。「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である。」そして、新約聖書ヘブル書においては、イエス・キリストが旧約の預言の成就として、メルキゼデクの例に倣い、とこしえの祭司となられたと記しています。ではメルキゼデクとはどのような人であり、イエス・キリストとはどのような関係なのでしょう。

①メルキゼデクはアブラハムの時代に実在した人物である

彼はサレム(後のエルサレム)の王で、いと高き神(主なる神)の祭司でした。メルキゼデクとは「義の王」という意味であり、サレムとはシャロームのことなので「平和の王」でした。

②メルキゼデクは救い主の予型となる祭司であった

7:3では「父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです。」と言われます。これは、メルキゼデクが救い主イエスの予型となる人物であるので、創世記ではあえて系図を書かなかったということであり、実際は両親によって生まれた一人の人間でした。

③メルキゼデクの重要性

なぜイエスがメルキゼデクの例に倣い、とこしえの祭司であると言われるのでしょうか。それは、メルキゼデクがレビ系の祭司ではなかったからです。アブラハムを神の名によって祝福し、アブラハムから十分の一を受取ったメルキゼデクは、まだアロンと彼の子孫のレビ系祭司が現れる前に存在しました。しかもアブラハムを祝福する偉大な祭司だったのです。レビ系の祭司はモーセの律法に従って神に仕えました。しかし、レビ系祭司の働きは救いを成就することができませんでした。人類の救いを成し遂げるためには、レビ系祭司とは違う別の祭司が必要だったのです。それが永遠の大祭司イエス・キリストでした。イエスが死と復活と昇天によって救いを成し遂げ、メルキゼデクの例に倣い、とこしえの祭司になることによって、旧約の律法に代わり、新約の福音の時代が始まったのです。このようにメルキゼデクは、レビ系祭司ではない、とこしえの大祭司イエス・キリストを予型する人物だったのです。

10. 割礼とは何か 創世記17:9-14

割礼とは、男性性器の包皮を切り取ることです。創世記17章で、神はアブラハムとの契約のしるしとして、アブラハムとその子孫、さらにイスラエル人の中に生きる異邦人が割礼を受けることを定められました。さらに割礼を受けない者は、神との契約を破ったため、イスラエルの民から断ち切られると定められました。このように割礼は、イスラエルにとって神の民であるしるしとして重要なものとなりました。神がアブラハムと結ばれた契約をアブラハム契約と呼びます。この契約は創世記12:1-3において与えられ、神がアブラハムを祝福して大いなる国民とし、地のすべての部族はアブラハムによって祝福されるというものです。また17:1で神はアブラハムに対して、この神の祝福を受けるために、神の前に歩み、全き者(神との正しい関係にある者)となることを求められました。

ですから割礼は、イスラエルの民に対して、神の民としての自覚を促し、神のみを信じ、神に従うことを教えるしるしでした。申命記10:16では、「あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もううなじを固くする者であってはならない」と教えられ、肉の割礼は心の割礼(神に対するすなおで従順な信仰)を持つべきことを意味していると教えています。

しかし、イスラエルの歴史の中で割礼は形がい化し、割礼は受けていても神に対して不信仰になり、偶像礼拝の罪に陥るようになりました。そのような民に対してエレミヤは、「ユダの人とエルサレムの住民よ。主のために割礼を受け、心の包皮を取り除け」(エレミヤ4:4)と言って、神に対する悔い改めを求めました。しかし、イスラエルの民は悔い改めることをせず、神のさばきを受けて、バビロン捕囚が起きました。

新約時代になると、ユダヤ人も異邦人も救われるために割礼は必要なくなりました。なぜなら、イエス・キリストを信じる信仰によって、すべての人は救われるからです。けれども、初代教会において、ユダヤ人クリスチャンの中から、異邦人も割礼を受けなければ救われないと教える割礼派の人たちが現れ、異邦人教会は混乱しました。そこで使徒15章でこの問題を話し合うために、使徒たちや長老たち集まりました。この会議をエルサレム会議と呼びます。話し合いの結果、ユダヤ人も異邦人も主イエスの恵みによって救われることが確認され、異邦人に割礼を求めないことが決定されました。

パウロはローマ4:9-11で次のように教えています。「私たちは『アブラハムには、その信仰が義と認められた』と言っていますが、どのようにして、その信仰が義と認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。割礼を受けていないときですか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていない時です。彼は、割礼を受けていないときに信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。」このように、人は割礼によって義と認められるのではなく、信仰によって義と認められると教えています。

では割礼とバプテスマの関係はどうでしょうか。この点においては二つの解釈に分かれます。幼児洗礼を支持する教会では、割礼と洗礼のつながりを認めます。そして旧約時代には割礼が契約の民のしるしとなったように、新約時代には洗礼が契約の民のしるしであると解釈して、両親の信仰に基づいて幼児に洗礼を授けます。割礼が生まれて八日目に授けることも、幼児洗礼の理由の一つとされます。一方、信者の洗礼(自覚的信仰を告白した者のみに授ける洗礼)を支持する教会では、割礼と洗礼のつながりを認めません。理由は、新約聖書は、洗礼が割礼に代わる新しい契約のしるしであるとは教えていないからです。

11. イサクやエフタの娘の場合、神は人間の全焼のささげ物を求められたのか

神は律法において、人間を全焼のささげ物としてはならないと教えています。「また、自分の子どもを一人でも、火の中を通してモレクに渡してはならない。あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。」(レビ 18:21)「自分の子どもを取ってモレクに与える者は、だれであれ必ず殺されなければならない。民衆がその者を石で打ち殺さなければならない。」(レビ 20:2) (申命記 12:31-32、18:10) ですから、神は人間の全焼のささげ物を求めてはおられませんし、むしろ禁止しておられます。

①イサクの場合 創世記 22:2、9-14

アブラハムはまだモーセの律法が制定される前の時代に生きていました。しかし、神はすでにカインがアベルを殺すことを罪とされました。その神が、神のかたちに造られた人間を殺して全焼のささげ物としてご自分にささげることを求められるとは考えられません。そのようなことは神の御性質に矛盾することです。

ではイサクの場合はどうでしょうか。確かに神は 22:2 でアブラハムに対してイサクを全焼のささげ物として献げよと命じられました。しかし、この神の命令は、アブラハムの神への従順を試すためであり、さらにはやがて神が、ご自分のひとり子をすべての人の救いのために献げることの予型とするための出来事でした。ですから、神はアブラハムの神への従順を確認した時、「その子に手を下してはならない」と命じられたのです。神はイサクを全焼のささげ物として求めておられなかったのです。

②エフタの娘の場合 士師 11:30-31、34-40

次にエフタの娘の場合を考えてみましょう。エフタはイスラエルの士師でした。彼はアンモン人との戦いの前に、アンモン人のところから無事に帰ってきた時には、自分の家から迎えに出てきた者を全焼のささげ物として献げるという誓願を立てたのです。そして、戦いに勝って戻ってくると、なんと自分の一人娘が迎えに出て来たのでした。エフタは嘆き悲しみましたが、娘は主に対する誓願を果たしてくださいと申し出、2 か月の猶予をもらい、友人とともに山の上で自分か処女であることを泣き悲しみました。そして父のもとに戻った娘に対して、父は誓願どおりに行ったのでした。この出来事に対しては2つの解釈があります。

(1) エフタは文字通り娘を全焼のささげ物として主に献げた

この場合、人間を全焼のささげ物として献げてはならないという主の命令にエフタは背き、主に対して罪を犯したのでした。主は決して人間の全焼のいけにえを喜ばれません。ではなぜエフタは自分の娘を献げるとの誓願を主に立てたのでしょうか。それは士師記の時代の不信仰が影響しています。

「そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。」(士師 21:25) そのような時代の中で、神のことばが正しく人々に伝わっていなかったと考えられます。その結果、イスラエルに入り込んでいた異教の習慣をエフタは行ってしまったのでした。

(2) エフタは娘を幕屋で生涯主に仕える女として献げた

聖書は幕屋の入り口で主に仕える女がいたことを教えています。(出エジプト 38:8、1 サムエル 2:22) そこでエフタは自分の娘を幕屋で生涯主に仕える女として献げたと解釈するのです。その理由としていくつかの点を挙げることができます。①全焼のささげ物は、神への献身を表すささげ物なので、娘を神に献げることでエフタは神への献身を表した。②娘は自分が死ぬことではなく、処女であることを泣き悲しんだ。彼女はエフタの一人娘だったので、主に仕える女となれば結婚することはできず、エフタの家系は途絶えることになり、そのことをエフタも娘も悲しんだ。③エフタの死について士師記は触れず、「彼女はついに男を知らなかった」とだけ記されている。④ヘブル 11:32 ではエフタが信仰の人として記されていることを考えると、エフタが娘を全焼のささげ物としたとは考えにくい。

いずれの解釈を取るにしても、神は人間を全焼のささげ物とすることを求めておられません。

12. イスラエル 12 部族とはどの部族のことか 創世記 35 : 23-26, 48 : 5

イスラエルの 12 部族とは、ヤコブの 12 人の子に属する部族のことです。ヤコブは神からイスラエルという名を与えられました。(創世記 35:10) ヤコブの 12 人の子はルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェルです。彼らの子孫が 12 部族となりました。

その後、ヤコブが死の床で、ヨセフの二人の息子エフライムとマナセを自分の子とすると宣言し、二人をヤコブの養子にしました。(創世記 48:5) しかし、このことでイスラエルが 13 部族になったのではありません。ヨセフ族の中に 2 部族あるということです。すなわちヨセフ族 A(エフライム族)、ヨセフ族 B(マナセ族)という理解です。ヤコブはヨセフの二人の息子を祝福する時に、右手を弟のエフライムに、左手を兄のマナセに置き、エフライムに長子の祝福を与えました。このことは歴史の中で成就していきます。エフライム族は北イスラエル王国の中心地を相続し、北イスラエル王国はエフライムと呼ばれるようになりました。(イザヤ 7 章)

ヤコブが創世記 49 章で最後に 12 人の子を祝福する時に、マナセとエフライムの名前は入れず、ヨセフを祝福していることから、12 部族が上記のヤコブの子に属する部族であることがわかります。49 章におけるルベンに対する約束はやがて成就します。I 歴代誌 5 : 1 では「ルベンは長子であったが、父の寝床を汚したことにより、その長子の権利はイスラエルの子ヨセフの子に与えられた。」と記されています。またユダに対するヤコブの祝福は救い主の預言となりました。49:9 の「ユダは獅子の子」は「ユダ族から出た獅子」であるイエス・キリストにおいて成就します。また「王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。」(49:10) も王なるキリストにおいて成就しました。

12 部族が約束の地カナンを相続する際には、レビ族は相続せず、その代わりにマナセ族とエフライム族が相続します。レビ族は、同じレビ族の祭司アロン家の監督のもと、幕屋と神殿で神に仕える奉仕の務めを与えられました。(民数記 1:53) レビ族には、イスラエル人が神に献げる奉納物の十分の一を与えられました。またカナンの地では、レビ族には相続地の割り当てはない代わりに、各部族から住むべき町と放牧地が与えられました。(ヨシュア 21 章)

黙示録 7:5-8 にもイスラエルの 12 部族が出てきます。この中でヨセフ族はエフライム族の意味で、マナセ族が入り、ダン族が抜けています。その理由として、ダン族が偶像礼拝を行ったことが考えられます。士師の時代には「ダン族は自分たちのために彫像を立てた。こうして、神の宮がシロにあった間中、彼らはミカが造った彫像を自分たちのために立てていた。」(士師 18:30-31) とあります。また北イスラエル王国のヤロブアム王が金の子牛を二つ造った時、一つをベテルにもう一つをダンに置き、偶像礼拝が行われました。天国には偶像礼拝者は入れないことを教えていると考えられます。黙示録の 12 部族の 144,000 人とは、真の霊的イスラエルである全聖徒を表しています。彼らは皆、額に神の印が押されていました。

13. エジプトの呪法師たちの秘術とは何であったか 出エジプト 7:1-12、22、8:7、18-19

モーセとアロンは、出エジプトの前にファラオの所に行き、様々な奇跡を行いました。エジプトの呪法師たちも初めは自分たちの秘術を使って同じことをしました。アロンが自分の杖を投げて蛇に変えると、呪法師たちも彼らの秘術を使って同じことをしました。しかし、アロンの杖は彼らの杖を飲み込みました。その後モーセとアロンはエジプトに十の災害(十災)を送ります。その時、水を血に変える第1の災害と、蛙をエジプトの地に這い上がらせる第2の災害では、呪法師たちも同じ奇跡を行いました。しかし、地のちりをブヨに変える第3の災害では、呪法師たちは同じことはできませんでした。そして、ファラオに「これは神の指です」と言い、自分たちの秘術の限界とモーセとアロンの奇跡が神のわざであることを認めました。

エジプトの呪法師たちの秘術とは何だったのでしょうか。大きく二つの解釈があります。一つは秘術とは手品(マジック)であったと考えます。ある蛇を訓練すると静止した杖のようになると言います。血や蛙も彼らの手品によって行いました。しかし、ちりをブヨに変えることはできませんでした。もう一つの解釈は、呪法師たちはサタン之力を用いて奇跡を行ったと考えます。サタンは人を惑わすために、偽りのしるしと不思議を行う力を人間に与えることができます。「不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。」(Ⅱテサロニケ 2:9, 10)いずれの解釈にしても、神の力に人間もサタンも打ち勝つことはできません。エジプトに起きた十の災害は全能の神の力によるものでした。

14. なぜエジプト全土の初子が死ななければならなかったのか 出エジプト 12:29-32

エジプトの住民は、イスラエル人をエジプトから去らせる権威を持っていませんでした。それなのに、ファラオのかたくなさのゆえに、なぜエジプト全土の初子が死ななければならなかったのでしょうか。この出来事は、一国の政府が国民の生活に大きな影響力を持っていることを教えています。その国の政治形態がどのようなものであっても、政府や国のリーダーが決断することが、良きにつけ悪しきにつけ国民に大きな影響を与えるということです。

当時のエジプトはファラオによる独裁政治でした。ファラオは呪法師たちの「これは神の指です」(8:19)という言葉も、家臣たちの「この者たちを去らせ、彼らの神、主に仕えさせてください。エジプトが滅びるのが、まだお分かりにならないのですか」との忠告も聞きませんでした。(10:7)そして、神はついにエジプト中の初子を打つというさばきをもって、イスラエル人をエジプトから去らせる決断をファラオにさせたのです。

このことはやがてイスラエルでも起こりました。イスラエルの王たちが神に逆らい、預言者が悔い改めのメッセージを語っても聞かないことが繰り返される中で、ついに神のさばきが下り、北王国はアッシリアによって滅ぼされ、南王国はバビロンによって滅ぼされてしまいました。

今日も一国の政府が決断することが、国民に大きな影響を与えます。ですから教会とクリスチャン一人ひとり、良い政治を行うことができるように為政者のために祈らなければなりません。また政治に対して関心を持ち、選挙や様々な方法を通して自分の声を伝えることが大切です。

15. 新約の教えをもって、旧約の十戒をどう理解すればよいか

マタイ 1:22、コロサイ 2:16—17、ヘブル 9:11—12、10:1

昨年の修養会において、旧約聖書の読み方を学びました。その中で、旧約聖書は新約聖書の教えから読み直す必要があることを覚えました。なぜなら、旧約聖書は預言、影の部分であり、新約聖書が成就、本体の部分だからです。神の救いはキリストにあって成就しました。ですから、影である旧約聖書は本体であるキリストを教える新約聖書をもって解釈する必要があるのです。このことを怠って旧約聖書の教えを絶対化すると、キリスト教信仰とは相いれない教えに行きつきます。

では旧約聖書の律法の中でも最も重要な十戒を、クリスチャンは新約聖書の教えをもってどのように理解すればよいのでしょうか。ここでは十戒の一つ一つの戒めの意味を、新約の光をもって理解したいと思います。その前に旧約の律法とはどのようなものかを確認しましょう。旧約の律法は、司法律法、祭儀律法、道徳律法の3つに分けることができます。司法律法とは、出エジプト記や申命記などに記された旧約時代のイスラエルの国の民法や刑法などの法律です。ですから、司法律法は新約時代の世界に適用されません。しかし、そこに表された神の正義を新約の光をもって学ぶことはできます。

祭儀律法とは、出エジプト記やレビ記に記された幕屋礼拝や動物の犠牲による罪の贖いの規定などです。祭儀律法は、本体、実物であるキリストの贖いを表す影であるので、キリストが救いを成就されたことによって、新約時代には廃止されました。しかし、祭儀律法を学ぶことによって、本体であるキリストの贖いの意味をより深く理解することができます。

道徳律法とは、ここで学ぶ十戒や神を愛し隣人を愛するなどの道徳的な教えです。この道徳律法は新約時代にも有効です。ただし、道徳律法も新約の光をもって読む必要があります。なぜなら、キリストの救いの成就と助け主聖霊がクリスチャン一人ひとりに与えられたことによって、新約の道徳、倫理の基準は旧約時代以上に高くなったからです。道徳律法を新約聖書の教えをもって読み直すことによって、旧約時代の理解を超えた道徳基準を見出すことができます。

ガラテヤ 3:22—25 にはこうあります。「しかし聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人たちに与えられるためでした。信仰が現れる前、私たちは律法の下で監視され、来るべき信仰が啓示されるまで、閉じ込められていました。こうして、律法は私たちがキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。しかし、信仰が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。」ここで教えられることは、①律法は人間の罪を示すが、律法によっては罪からの救いはない。②律法は、罪人をキリストに導く養育係である。③キリストを信じる信仰によって、罪の赦しが与えられる。④キリストを信じる信仰による救いが成就したので、私たちは律法の下にはいない。

このように、新約時代に生きるクリスチャンは、旧約聖書の律法の支配下にあるのではなく、キリストの支配下に生きる者とされたので、聖霊の助けによって、キリストに従う者として道徳的にもさらに高い基準に生きる者とされているのです。この理解のもとに、次回から十戒の教えと一つ一つ見て行きましょう。

16. 第一戒「わたしには、わたし以外に、ほかの神々があってはならない。」出エジプト20：3

この世には2種類の神があります。一つは「人間が造った神」、もう一つは「人間を造った神」です。第一戒は、天地を造り、人間を造られた創造者なる神だけがまことの神であり、それ以外の神と呼ばれるものは本当の神ではないことを教えています。そして、神の民は、周りの国民が信じている人間が造った偶像の神々を信じてはならず、まことの神のみを信じ礼拝することを教えています。

この第一戒は、新約聖書でも共通の教えです。イエスは、悪魔から自分を拝むなら世界の栄華を与えると試みられた時、申命記6:13を引用して言いました。「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主のみ仕えなさい』と書いてある。」イエスは、第一戒が新約時代にも守るべき大切な教えであることを自ら示されたのです。

異邦人伝道が始まると、異邦人が信じている偶像の神々は本当の神ではなく、天地の造り主だけがまことの神であることを伝える必要がありました。パウロはアテネ伝道において、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えました。そして、「知られていない神に」と刻まれた祭壇があるのを見つけ、「あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを教えましょう。この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手で造られた宮にお住まいにはなりません。」と言ってまことの神を伝えました。(使徒17：23, 24)

一方、新約のクリスチャンと旧約のイスラエルの民の信仰の違いもあります。それは、旧約のイスラエルの民や現代のユダヤ教徒は、唯一の主なる神を信じるのに対して、新約のクリスチャンは三位一体の神を信じるという違いです。実は旧約聖書にも三位一体をうかがわせる箇所があります。たとえば、創世記1:2には「神の霊がその水の面を動いていた」とあり、天地創造の時に聖霊も共におられたことがわかります。また神が人を創造する時に、「人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう」(創世1:26)と言われ、唯一の神のうちに複数の人格があることがわかります。しかし、旧約では三位一体の啓示が明確には示されていないので、イスラエルの民は唯一の神への信仰しか持っていないませんでした。

それに対して新約聖書は、唯一の神は父、子、聖霊の三つの位格(神の人格)を持つ三位一体の神であることが明らかにされます。マタイ28:19では「父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け」とあります。ギリシャ語文法では、父、子、聖霊は三つなので「名」は複数にしなければなりませんが、聖書の「名」は単数形です。このように新約聖書は、父、子、聖霊は三人でありつつ一人の神であることを教えているのです。Ⅱコリント13:13にも「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。」とあり、三位一体の神の祝福が祈られています。

またもう一つ新約聖書が教えていることは、イエス・キリストは子なる神が人となられた救い主であるということです。イエスは子なる神であるのに救い主となるために、聖霊により処女マリアに宿り、人として生まれてくださったのです。ヨハネ1章では、イエスを「ことば」と呼び、「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」(1:1)と教え、また「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を解き明かしたのである。」(1:18)と教えています。「イエスは主です。」(Ⅰコリント12:3)これが新約の教えなのです。

17. 第二戒 「あなたは自分のために偶像を造ってはならない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。」 出エジプト 20 : 4-6

偶像礼拝禁止の教えは、旧約も新約も共通しています。I コリント 10:7 では「あなたがたは、彼らのうちのある人たちのように偶像礼拝者になってはいけません」とあり、II コリント 6:16 でも「神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです」とあって、クリスチャンは偶像礼拝をしてはいけなと教えています。また I コリント 8:4 では「世の偶像の神は実際に存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」とある一方で、I コリント 10:20 では「彼らがささげる物は、神にではなく悪霊にささげられているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません」とあって、偶像礼拝は悪霊と交わることだと教えて警戒を促しています。

また、エペソ 5:5 では「淫らな者、汚れた者、貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません」とあり、偶像礼拝とは宗教的なものだけでなく、神のみこころに反する人間の欲望が偶像になることを教えています。

さてカトリック・正教会・ルター派の十戒の数え方と他のプロテスタントの数え方が違います。ルター派以外のプロテスタントが第一戒、第二戒としているものを、カトリック・正教会・ルター派では一つにまとめて第一戒としています。そして、ルター派以外のプロテスタントが第十戒としているものを、カトリック・正教会・ルター派では二つに分けています。ここでは、第一戒と第二戒を二つに分ける意味を確認しましょう。

第一戒と第二戒を分けることによって、偶像礼拝とは異教の神を礼拝することだけでなく、まことの神を見える形に造って礼拝することであることが明確にされます。イスラエルの民が、最初に偶像礼拝をしたのが、モーセがシナイ山で神から十戒を与えられている時でした。モーセが山からなかなか降りてこないのを不安に思った民が、アロンに金の子牛を造らせて、これがエジプトから導いてきた神だとして、その前で戯れたのでした。彼らの行為はまことの神を見える形に造って礼拝したのであり、これが偶像礼拝だったのです。(出エジプト 32 章)

なぜカトリック等が、私たちが第二戒としているものを第一戒に数えるかという、聖画像の問題があるからです。ルター派は聖画像を用いませんが、カトリック教会では会堂にキリスト、マリア、聖人の画像が置かれています。東方正教会ではイコンと呼ばれる平面画のみを用い、彫像は用いません。ルター派を含めてプロテスタントはまことの神を礼拝するために、いかなる形を造ってはならないことを十戒が教えていると理解するので、画像を用いての礼拝は偶像礼拝になると考えます。一方、カトリックや正教会は、キリスト、マリア、聖人の画像は、異教の神々と同じではなく、画像を崇敬することは偶像礼拝ではないと考えます。しかし、実際は崇敬と言いつつ、画像に向かって祈りをささげることになり、プロテスタントから見れば偶像礼拝にあたる行為になります。

カトリックや正教会では、画像は、もともとは文字を読めない民衆に信仰を教えるための教材でした。ところが、いったん画像が置かれると、それが礼拝の対象となりました。それに対して宗教改革によって生まれたプロテスタントでは、信徒が自分で聖書を読めるように、読み書きという初等教育を重視し、その結果、聖書とその解き明かしである説教という礼拝が確立したのです。

18. 第三戒「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない。」出エジプト 20:7

第三戒の教えも旧約と新約に共通しています。では「主の名をみだりに口にしてはならない」とはどのような意味でしょうか。「みだりに」というヘブル語の言葉には、「悪を行う、偽り、むなしい」という意味があります。ですから、第三戒で禁止していることは、悪のために(自己中心のために)、偽りのために、むなしいことのために、主の名を口にしてはならないということです。

内村鑑三が初めてアメリカに行った時に、多くの人が「ゴッド(神)」や「ジーザス(イエス)」の名前を会話の中で口にするので、最初はさすがキリスト教国だと感心したそうです。ところが、英語がわかってくると、それは信仰から出てくる神への祈りや叫びの言葉ではなく、「オー・マイ・ゴッド」は「なんてこった・やばい」、「ジーザス」は「ちくしょう・くそっ」の意味であることがわかり、がっかりしたそうです。このような神やイエスの名前の使い方は、第三戒が禁止している使い方であり、クリスチャンはそのような使い方をしてはいけません。

一方、旧約のイスラエルの民は、現在ではヤハウェと発音されると考えられる神の名前を口で言うてはいけなと解釈しました。そこでヤハウェという神の名前を、ヘブル語で「主」を意味する「アドナイ」や「神」を意味する「エロヒーム」と読み替えました。それらの箇所は、新改訳では太字の「主」や「神」となっています。しかし、この考え方も間違っています。神をあがめるために、真実な心で、信仰をもって神の名前を呼ぶことは、信仰者として大切なことなのです。

新約聖書も第三戒の重要性を教えています。イエスは主の祈りの中で、「御名が聖なるものとされますように」と祈りなさいと教えられました。「御名」は原語では「あなたの名」ですから、神の名前のことです。日本でも「名は体を表す」と言いますがイスラエルでも同じで、神の名前は神ご自身を表します。以前の訳の「あがめられますように」は文語訳を継承した訳でしたが、2017版の「聖なるものとされますように」は原語の意味をよりはっきりと表しています。では、この祈りにはどのような意味があるのでしょうか。

私たちが祈っても祈らなくても、神は聖なるお方であることに変わりはありません。しかし、この祈りが受身形であることから、「私たちによって御名が聖なるものとされますように」という意味であることがわかります。すなわち、私たちの思いや言葉や行動によって聖なる神がさげすまれないように、そうではなく、私たちのすべてを通して神が聖なるお方であることが表されますようにと祈るのです。この主の祈りを実践するなら、私たちは主の名をみだりに口にすることはありません。

また新約聖書では、主の名とはイエスの名であることが教えられています。すなわちイエスは、旧約の主なる神が人となられた救い主であるという告白です。ですから、イエスの御名も私たちは聖なるものとしなければなりません。ピリピ 2:9-11 では、十字架で救いを成し遂げたイエスに対して、「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」と教えられています。新約時代においては、このイエスの名を信じて救われ、イエスの名をほめたたえ、イエスの名を伝えることによって、私たちが第三戒を肯定的に守り行うことができるのです。

19. 第四戒「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。」出エジプト20：8－11

第四戒に記されている安息日は週の第七日の土曜日（正確には金曜の日没から土曜の日没まで）です。この日を聖なるものとせよと命じられた理由は、神がその日を聖なるものとされたからです。創世記2:3で「神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。」とあるからです。そのことは出エジプト20:11にも記されています。安息日を聖なるものとするとは、その日をほかの六日間とは区別し、神のために取っておくようにという意味です。

安息日の過ごし方は、まず仕事を休み休息することです。神の創造のわざと同じように、六日間は働いて、すべての仕事をし、七日目はいかなる仕事もしてはならないのです。しかも奴隷、家畜、寄留者もとありますので、徹底的な休息の命令です。このことについては具体的な禁止事項と罰則も定められました。例えば食事を準備すること（出エ16:23－30）、火をおこすこと（出エ35:3）、薪を集めること（民数15:32－36）が禁じられています。また安息日を犯す者は殺されなければならないと定められました。（出エ31：14）安息日のもう一つの過ごし方は、神を礼拝することです。レビ記23:3には、「七日目は全き休みのための安息日、聖なる会合の日である。」とあり、この日は肉体の休息とともに、神を礼拝してたましいの安息をいただく日なのです。

申命記5:15では、「あなたは自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸ばされた御腕をもって、あなたをそこから導き出したことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守るよう、あなたに命じたのである。」とあり、イスラエルに対する神の救いを覚えることが安息日を守る理由とされています。

新約時代にはパリサイ人、律法学者が安息日規定をより厳格に守るための規則を作り、それを守ることがユダヤ教にとって重要となりました。しかしイエスはその誤りを教え、彼らの偽善を指摘しました。そして、安息日に病人を癒し、人の子は安息日の主ですと宣言されました。安息日の主とは、イエスは安息日に礼拝されるべき主であるという意味であり、ご自分が神であるとの宣言です。さらに旧約聖書に記されている安息日の意味を解き明かす権威を持つ主であるということです。

イエスの死と復活によって救いが成就した新約時代は、クリスチャンは旧約の安息日規定から解放されました。それは、安息日規定が律法の中の祭儀律法に深く関わるからです。むしろ、イエスの復活によって救いが成就したので、イエスが復活した週の初めの日曜日を礼拝の日とし、復活の主を礼拝しました。（使徒20:7）聖霊が降臨し、教会が誕生したペンテコステも日曜日でした。教会はその後、日曜日を主の日と呼び、安息日は主の日に代わりました。（黙示1:1）新約時代のローマ帝国では日曜日は休みの日ではありませんでしたので、クリスチャンは仕事が始まる前の早朝や、仕事が終わった夜に集まって礼拝しました。4世紀になりキリスト教を公認したコンスタンティヌス帝が日曜日を休日としたため、クリスチャンはその日仕事を休んで礼拝できるようになりました。人間には肉体の休息とたましいの安息が必要です。日曜日に仕事を休み教会で礼拝できることは大きな恵みです。今日社会は複雑化し、日曜日にも誰かが働かないと社会を維持できません。そのような中で、教会もクリスチャンも工夫しながら、主日礼拝を守れるようにしていくことが求められています。

20. 第五戒「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くようにするためである。」出エジプト20:12

十戒は、前半の第一戒から第四戒までが神との関係の戒め、後半の第五戒から第十戒までが人との関係の戒めとなっています。そして、第五戒は人との関係の戒めの属しつつ、前半と後半の懸け橋の役割を持っている戒めです。神は親に子どもを産み育てる権威と責任を与えられ、親は神から与えられた権威と責任をもって子どもを育てます。一方、子どもは生まれた時からしばらくは、親に全面的に依存して成長します。そして、子どもが成長するに従って、親は徐々に子どもに責任をゆだねて自律できるように育て、成人するまで子育ての責任を果たします。また、親は子どもに生きるために必要なことを教えるとともにその土台となる神への信仰を教えます。そのような子育ての中で、親子の信頼関係が築かれていき、その結果、子どもは親を敬い、さらに神を敬うことを身に着けていくのです。第五戒は、神が与えた親を敬う子どもには、具体的な神からの祝福があることを約束しています。

また、第五戒は「父」だけでなく「母を敬え」と教えているところに、聖書の独自性があります。古代世界や日本も近代までそうでしたが、家父長制度の中で父親は絶対的な力をもって家族にふるまいました。このような時代では、子どもは父に従うことは当然のことでした。しかし、母親に対する教えは強調されませんでした。それに対して聖書は、父と母を同じ親として敬うことを子どもに教えているのです。家父長制度とのもう一つの違いは、第五戒の「敬う」は両親への絶対的な服従を教えているのではないということです。「父と母を敬う」とは、親を与えた神を敬うことを前提とした敬いです。ですから、父と母も神を敬う信仰に立ち、神の教えに自ら従い、その生き方をもって子どもを教え育てる必要があります。また、子どもも親が尊敬に値する品性を持っているか否かにかかわらず、神が自分に与えられた親であるゆえに敬うのです。そして、もし親が神に逆らうことを命じるならば、親に従わず神に従うことを教えているのです。ですから、第五戒は親も子も神を敬い、神に従うことを土台とした親子関係を教えているのです。

新約聖書も、第五戒が重要な神の戒めであることを教えています。マタイ 15:3-6 で、イエスはパリサイ人に対して、「神へのささげ物と宣言したものは、親に渡さなくてもよい」という人間の言い伝えによって、「父と母を敬え」という戒めを骨抜きにしていると非難されました。そして、第五戒が大切な神の戒めであることを教えられました。

エペソ 6:1-3 でパウロは第五戒を引用して教えています。「子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことなのです。『あなたの父と母を敬え』これは約束を伴う第一の戒めです。『そうすれば、あなたは幸せになり、その土地であなたの日々は長く続く』という約束です。」ここでは第五戒の説明として、「主にあって両親に従いなさい」と教えています。それは主が立てられた両親であるゆえに従うことであり、主に従う信仰によって両親に従うことです。一方で主に従うことと両親に従うことが矛盾する時は、主に従うことを第一とすることでもあります。

子どもにとって、親の姿を見て神を見ることができればどんなに幸いでしょうか。親は完全ではなく欠点も弱さもあります。しかし親が神の前にへりくだり、神の赦しと恵みに生きるなら、子どもも親の姿を見て、神を敬う生き方へと導かれます。神に祝福された良き親子関係は、すべての人間関係の基本です。

21. 第六戒「殺してはならない。」出エジプト20:13

なぜ人を殺してはならないのでしょうか。それは人間が他の動物とは違い、「神のかたち」として神によって造られたからです。神のかたちとして造られた人間には、特別ないのちの尊厳と人格の尊厳が与えられているので、人を殺してはならないのです。(創世 1:27, 9:6) また人を殺すことは、いのちの支配者である神に逆らう罪であるので、殺してはならないのです。(ヨブ 1:21) 一方で、旧約聖書では戦争が行われ、死刑や正当防衛なども教えられています。第六戒の「殺してはならない」は具体的にどの範囲の殺人を禁じているのでしょうか。

第六戒の「殺す」のヘブル語のラツァハは、一つの例外(民数 35:30 の法の裁きによる死刑の教え)を除いて、すべて違法な殺害を意味しています。すなわち、合法的な殺害は例外的にあり得ると解釈できるのです。例えば出エジプト 21:12 では死刑制度が、22:2 では正当防衛が認められています。また、イスラエルによるカナンの地の先住民に対する聖絶による聖戦や敵からイスラエルを守る戦争も第六戒の例外として認められています。英語の聖書では、第六戒の「殺す」は kill (一般的な意味の殺す)ではなく、murder (悪意を持って人を殺す)が使われ、違法な殺害を禁止していることを表しています。聖絶は今日ではありえないことですが、旧約時代は罪に墮落した異邦人を、イスラエルを用いて神が直接さばくための方法として神が命令されたので、murderではなく、第六戒に違反しなかったのです。

では、新約時代に生きる私たちは、第六戒をどのように理解すればよいのでしょうか。それは、イエスの教えを通して、第六戒を再解釈することです。イエスは山上の説教で教えられました。「昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われているのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』という者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」(マタイ 5:21-22) 『目には目を、歯には歯を』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい」(5:38-39) 『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(5:43-44)

イエスは第六戒の意味を掘り下げ、言葉の暴力も殺人と同じ罪であること、仕返しをしないこと、憎しみを愛に変えて、敵を愛し、迫害する者のために祈れと教えられました。仕返しをせず、敵を愛する者となれば、敵と戦うことはできなくなります。また、マタイ 26:52 ではイエスはペテロに対して「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」と言われ、剣を取って戦うことを戒めておられます。このように、イエスの教えを土台とする新約聖書は、旧約聖書の第六戒の「殺してはならない」よりも、倫理的にも实际的にもより高い教えであることがわかります。

最後にウェストミンスター小教理問答問 68 の答えを見ましょう。「第六戒が求めていることは、私たち自身の命と他人の命を守るために、あらゆる正当な努力をすることです。」殺してはならないという教えのより積極的な意味は、自分と他人のいのちを守るために、あらゆる正当な努力をすることです。それは隣人愛であり、言葉や行為の暴力を防ぐことであり、医療や福祉の働きでもあります。

22. 第七戒「姦淫してはならない。」出エジプト20：14

姦淫とは、聖書では、既婚の男女が配偶者以外の異性と性的関係を持つことです。なぜ姦淫してはならないのでしょうか。それは、結婚制度を造られた神は、結婚した夫婦だけに性の交わりの祝福を許されたからです。神は、結婚制度について創世記 2:24 でこのように定められました。「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」結婚した夫婦は、一つの家庭を築き、ともに暮らし、社会的、経済的、精神的、肉体的にも一体性を築きます。夫婦の性的関係は、互いの愛と信頼関係を深めるために、神が夫婦だけに与えられた神聖なものであり、そこに他人が入り込む余地はないのです。もし、夫婦のどちらかが姦淫を犯すと、夫婦の愛と信頼関係が崩れ、結婚の危機となり、家庭が崩壊していきます。神は、夫婦が祝福された結婚生活と家庭を築くために、また社会において結婚が尊ばれ、家族が祝されるために、姦淫を禁じられたのです。

第七戒は、また結婚前の性的関係を禁じています。肉体関係が結婚した夫婦にだけ神が与えられたものであるので、結婚の枠組みから外れた男女の性的関係は、神の意図されたものではないのです。今日の社会では伝統的な性倫理が崩壊し、結婚の枠組みから外れた性的関係が当たり前に考えられるようになってきました。そのような中で、クリスチャンは社会の考えや自分の願いではなく、神の願いを第一とすることが大切です。神が意図された結婚を覚え、第七戒を守ることが祝福された結婚への道です。

ところで、旧約聖書ではなぜ一夫多妻制度が行われていたのでしょうか。アブラハム、ヤコブ、ダビデ、ソロモンたちは一夫多妻の結婚をしましたが、神はそれを許容しておられます。この問題に対する答えを見出すためには、幾つかのことを整理して考える必要があります。まず、神が定められた結婚制度は一夫一婦制であることです。創世記 2：24 の結婚する「男」も「妻」も単数です。ですから、一夫多妻制は神が造った制度ではなく、墮落した人間が造った制度です。神は一夫多妻を命じられませんでした。一方で、神は旧約時代には一夫多妻を許容されました。その理由として、人間の罪の社会における女性の地位が著しく低かったことがあると考えられます。旧約時代、親、兄弟、夫の支えがない女性は、生きるためには娼婦や奴隷にならざるを得ない厳しい状況がありました。そこで女性の救済方法としての一夫多妻制度が行われたのです。その一方で、一夫多妻は家庭に多くの問題を生じさせたことも事実です。

新約時代になると、神が本来意図された一夫一婦制度に立ち返りました。エペソ 6:33 では「あなたがたもそれぞれ、自分(単数)の妻(単数)を自分と同じように愛しなさい。妻(単数)もまた、自分の夫(単数)を敬いなさい。」とあり、創世記 2:24 を引用しつつ、一夫一婦制の結婚が、キリストと教会の関係において教えられています。

さらにイエスはマタイ 5:27-28 で、第七戒は単に姦淫の行為に適用されるのではなく、心の思いにまで適用されると教え、旧約聖書よりも高い倫理を教えられました。『姦淫してはならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中すでに姦淫を犯したのです。」イエスの十戒の理解は、私たちの行為だけでなく思いや言葉にまでも適用される神の教えであるということです。そのことを覚える時に、律法を完全に守っている人はだれもおらず、自分も含めすべての人は神の前に罪人であることがわかります。だからこそ、私たちにはイエスのくださる罪の赦しが必要なのです。

23. 第八戒「盗んではならない。」出エジプト20：15

なぜ人の持ち物を盗んではならないのでしょうか。聖書から教えられることは、私たちの持ち物はすべて神からの授かりものであり、神が所有者であり、私たちは管理者であるということです。

「地とそこに満ちているもの、世界とその中に住んでいるもの、それは主のもの。」(詩24:1)盗むことは、管理者である人のものを盗むだけでなく、所有者である神のものを盗むことになるのです。ですから、盗みは人に対する罪だけでなく、神に対する罪なのです。

神のものを盗むことについては、神はマラキ 3:8-10 で十分の一献金に当てはめて教えておられます。「人は神のものを盗むことができるだろうか。だがあなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う、『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだのでしょうか』と。十分の一と奉納物においてだ。・・・十分の一をことごとく、宝物蔵に携えて来て、わたしの家の食物にせよ。・・・」私たちは十分の一献金をもって、十分の十すべては主のものであることを告白します。そして、主から聖別された十分の九を受取って、自分や他の人の必要のため使うのです。

また、盗みは被害者にとっては、単に物を失うだけでなく、心も傷つきます。その人にとって大事な物であればあるほど心が傷つき、体調を崩すこともあります。詐欺の被害者はだまされたことで自分を責めます。さらに他人からも責められると、悲しみや絶望から自ら命を絶つ人さえ出ています。ですから、盗みは「殺してはならない」と同様、神のかたちに造られた人間の尊厳を損なう行為なのです。逆に他の人の物を認め尊ぶなら、その人自身を尊ぶことになり、隣人愛を示すことになります。

新約聖書は、盗むなという消極的な教えだけでなく、積極的に隣人愛を示すようにと教えています。エペソ 4:28 でパウロは次のように教えます。「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。むしろ、困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい。」まず自分の生活の必要のために、人の物を盗むのではなく、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働くことの大切さを教えました。労働に対する賃金を得ることは、「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」という主の祈りの答えの一つでもあります。

さらに、盗みとは正反対の生き方である、困っている人に分け与えるという隣人愛に生きることを教えています。労働で得たお金を、自分の必要のためだけでなく、他の人の必要のためにも用いるのです。これは、奪うことから与えることへの生き方の方向転換です。この方向転換をする時、その人自身が神から与えられた隣人愛の使命を果たすことになり、与える者も受ける者も共に生きる喜びを経験することになるのです。

この生き方の方向転換は、「神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰」によって与えられる神の救いの結果です。(使徒 20:21)イエスを信じたザアカイは、イエスに対してこう言いました。「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」それに対してイエスは言われました。「今日、救いがこの家に来ました。この人モアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」(ルカ 19:8-10)このように、新約時代は、イエスの救いによって、神の子どもとして生まれ変わった結果、心の方向転換がなされ、神の恵みの中で生き方が変わり、律法を行う者に変えられていくのです。

24. 第九戒「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない。」出エジプト20:16

第九戒は、裁判において偽りの証言をしてはならないことを教えています。聖書時代のイスラエルでは、今日のような、証拠に基づく事実認定をして判決を下すという専門的な裁判制度はなく、証人の証言が判決の最大要素でした。裁判において正義の判決が下されるためには、証人の真実な証言が必要であり、しかも一人の証言ではなく、複数の証言をもって、判決を下すことになっていました。真実な証言を得るために、第九戒の「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない」の戒めが重要でした。また複数の証言が必要であることについては、申命記19:15で教えています。「いかなる咎でも、いかなる罪でも、すべて人が犯した罪過は、・・・二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」このことがないがしろにされると、イゼベルが遣わした二人の偽りの証言によって死刑となった、ナボテのような悲劇が起ります。(I列王21:13)

また第九戒は、裁判における偽証を禁じるだけでなく、日常生活における嘘偽りをも禁じています。箴言12:22では「偽りの唇は主に忌み嫌われ、真実を行う者は主に喜ばれる」と教えています。人に対して嘘をつくことは、神に対して嘘をついていることになるのです。一方で、いのちを守るための緊急的非常時において嘘をついた出来事もあります。例えば、ヨシュア記2:15でエリコに偵察に来た二人のイスラエル人を救うために、ラハブは嘘をつきました。またIサムエル19:14でミカルはダビデを救うために嘘をつきました。もちろん、このような例外を根拠に、聖書は嘘についても良いと教えていると曲解してはいけません。

第九戒は、新約聖書においても同じように教えられています。「あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。」(エペソ4:25)「互いに偽りを言ってははいけません。」(コロサイ3:9)「しかし、臆病な者、不信仰な者、忌まわしい者、人を殺す者、淫らなことを行う者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者たちが受ける分は、火と硫黄の燃える池の中にある。これが第二の死である。」(黙示21:8)Iペテロ2:22では「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺き(共同訳は偽り)もなかった」とあります。キリストは偽りを口にされず、真実を語り、真実に生きられました。

その証言をしたペテロが、イエスを知らないと偽る大失敗をしたのです。彼は三度イエスを知らないと言いました。三度目はこうです。「嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、『そんな人は知らない』と言った。すると、すぐに鶏が鳴いた。ペテロは『鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います』と言われたイエスのことばを思い出した。そして、外に出て行って激しく泣いた。」(マタイ26:74-75)ペテロは、イエスを裏切るという自分が犯した罪の大きさを覚えて、激しく泣いたのでした。

しかし、イエスは事前にペテロに言われました。「シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。」(ルカ22:31-32)悪魔は偽りの父です。(ヨハネ8:44)エバが罪を犯した時も、悪魔は嘘についてエバをだましました。私たちも悪魔のわなに陥りやすい者です。しかし、罪を犯した時も信仰がなくならないように、イエスがとりなしていただきます。「私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」(IIテモテ2:13)キリストの真実こそ、私たちの希望であり、私たちの救いの根拠です。

25. 第十戒「あなたの隣人の家を欲してはならない。あなたの隣人の妻、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲してはならない。」出エジプト20：17

ルター派以外のプロテスタントと正教会が第十戒としているものを、カトリック・ルター派では二つに分け、「あなたの隣人の家を欲してはならない」を第九戒、「あなたの隣人の妻、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲してはならない。」を第十戒としています。それは、第一戒、第二戒の数え方が違うからです。私たちは17節全体を第十戒と理解します。

第十戒は、隣人のものまで欲しがる人間の罪深い欲を戒めています。隣人のものは、神がその人に与えたものであり、それを欲しがるとは隣人だけでなく神に対する罪となるのです。隣人を神の前で尊ぶことが、隣人のものを神から与えられたものとして尊重することにつながります。

また第五戒から第九戒までは行いに対する戒めですが、第十戒は心の思いに対する戒めです。それは心の中の悪い思いが熟して、悪い行いとなるからです。実際、隣人のものを欲しいという欲を自制できなくなることによって、殺人、姦淫、盗み、偽りという第六戒から第九戒の罪を犯すことになるのです。イエスは、「悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは、心から出てくるからです」と言われ、悪い行いは私たちの心から出てくると教えられました。(マタイ 15:19) 第十戒は、対人関係の戒めを守るためには、私たちの心が罪の思いに支配されてはならないことを教えています。箴言 4:23 にはこうあります。「何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」私たちの心が悪い思いではなく、良い思いで満ちるように、見張っていなければなりません。

第十戒は旧約、新約共通の教えです。新約聖書も貪り、食欲の罪を戒めています。「どんな食欲にも気をつけ、警戒しなさい。」(ルカ 12：15)「盗む者、食欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。」(I コリント 6:10)「淫らな者、汚れた者、貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません。」(エペソ 5：5)

では、第十戒を守るためにどうしたらよいでしょうか。それは神が私たち一人ひとりに与えてくださっているもので満足することです。「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそが、大きな利益を得る道です。私たちは、何もこの世に持って来なかったし、また、何かを持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足するべきです。」(I テモテ 6:6-8)「金銭を愛する生活をせず、今持っているもので満足しなさい。主ご自身が『わたしは決してあなたを見放さず、あなたを捨てない』と言われたからです。」(ヘブル 13:5)

ウエトミンスター小教理問答問80の答には「第十戒が求めている事は、私たち自身の状態に満足すること、それも、隣人とそのすべての所有物とに対して、正しい愛の気持ちをもって満足することです」とあります。また問81の答には「第十戒が禁じている事は、すべて私たち自身の身分に満足せずに、隣人のしあわせをねたんだり恨んだりすること、またすべて、隣人の所有するどのようなものにも法外な意向や愛着を寄せることです」とあります。

パウロは「私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました」と言いました。(ピリピ 4:11) 神が私たちと共にいてくださり、私たちの必要を満たしてくださっていることを覚える時、私たちはどんな状況にあっても、主にある感謝と満ち足りた心をもって歩むことができます。

26. 「15. 新約の教えをもって、旧約の十戒をどう理解すればよいか」の復習

マタイ 1:22、コロサイ 2:16-17、ヘブル 9:11-12、10:1

今まで 10 回にわたり、十戒を新約の教えに照らし合わせて、新約時代に生きるクリスチャンにとっての十戒の意味を学びました。ここで再び「15. 新約の教えをもって、旧約の十戒をどう理解すればよいか」の復習をしたいと思います。そのことによって、今までの十戒の学びをよりよく理解できると思います。

昨年の修養会において、旧約聖書の読み方を学びました。その中で、旧約聖書は新約聖書の教えから読み直す必要があることを覚えました。なぜなら、旧約聖書は預言、影の部分であり、新約聖書が成就、本体の部分だからです。神の救いはキリストにあって成就しました。ですから、影である旧約聖書は本体であるキリストを教える新約聖書をもって解釈する必要があります。このことを怠って旧約聖書の教えを絶対化すると、キリスト教信仰とは相いれない教えに行き着きます。

では旧約聖書の律法の中でも最も重要な十戒を、クリスチャンは新約聖書の教えをもってどのように理解すればよいのでしょうか。十戒の一つ一つの戒めの意味を、新約の光をもって理解するためにまず旧約の律法とはどのようなものかを確認しましょう。旧約の律法は、司法律法、祭儀律法、道徳律法の 3 つに分けることができます。司法律法とは、出エジプト記や申命記などに記された旧約時代のイスラエルの国の民法や刑法などの法律です。ですから、司法律法は新約時代の世界に適用されません。しかし、そこに表された神の正義を新約の光をもって学ぶことはできます。

祭儀律法とは、出エジプト記やレビ記に記された幕屋礼拝や動物の犠牲による罪の贖いの規定などです。祭儀律法は、本体、実物であるキリストの贖いを表す影であるので、キリストが救いを成就されたことによって、新約時代には廃止されました。しかし、祭儀律法を学ぶことによって、本体であるキリストの贖いの意味をより深く理解することができます。

道徳律法とは、十戒を始めとする神を愛し隣人を愛するなどの道徳的な教えです。この道徳律法は新約時代にも有効です。ただし、道徳律法も新約の光をもって読む必要があります。なぜなら、キリストの救いの成就と助け主聖霊がクリスチャン一人ひとりに与えられたことによって、新約の道徳、倫理の基準は旧約時代以上に高くなったからです。道徳律法を新約聖書の教えをもって読み直すことによって、旧約時代の理解を超えた道徳基準を見出すことができます。

ガラテヤ 3 : 22-25 にはこうあります。「しかし聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人たちに与えられるためでした。信仰が現れる前、私たちは律法の下で監視され、来るべき信仰が啓示されるまで、閉じ込められていました。こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。しかし、信仰が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。」

ここで教えられることは、①律法は人間の罪を示すが、律法によっては罪からの救いはない。②律法は、罪人をキリストに導く養育係である。③キリストを信じる信仰によって、罪の赦しが与えられる。④キリストを信じる信仰による救いが成就したので、私たちは律法の下にはいない。

このように、新約時代に生きるクリスチャンは、旧約聖書の律法の支配下にあるのではなく、キリストの支配下に生きる者とされたので、聖霊の助けによって、道徳的にもさらに高い基準に生きる者とされているのです。このことは十戒の教えにおいても適用されます。十戒は私たちに罪を示し、キリストのもとへと私たちを導きます。そしてキリストを信じて救われると、新約聖書の光に照らして十戒を学び、キリストに従う者に必要な信仰と道徳の確かな基準を与えてくれるのです。

27. 奴隷制度について「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である。」出エジプト 20 : 2

十戒の前文で、神はエジプトで奴隷として重労働を課せられていたイスラエス人を救われたことが言及されています。その一方で旧約聖書はイスラエル人が奴隷を持つことを認めています。「あなたがヘブル人の男奴隷を買う場合、その人は 6 年間仕えなければならない。しかし 7 年目には自由の身として無償で去ることができる。」(出エジプト 21:2) ヘブル人の奴隷は 7 年目かヨベルの年には自由の身となれますが、外国人の奴隷は主人の家族の永遠の所有物となりました。(レビ記 25 : 44-46) 奴隷制度は古代社会では広く認められ、イスラエルでも行われていたのです。新約聖書には奴隷制度の規定はありませんが、ローマ帝国で行われていた奴隷制度を公然と批判する教えもあります。むしろ奴隷と主人に対してクリスチャンとしてのあるべき姿を教えています。

「奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。」エペソ 6:5
「主人たちよ。…脅すことはやめなさい。あなたがたは彼らの主、あなたがたの主が天におられ、主は人を差別なさらないことを知っています。」エペソ 6:9

では聖書は奴隷制度を認めているのでしょうか。答えは、聖書全体の教えから見ると、奴隷制度は認められないということができるでしょう。神がすべての人をご自身のかたちに創造されたことを見ても、すべての人に人格の尊厳が神から与えられ、神の前にはみな平等なのです。ですから、誰かが他の人の自由を奪い、人格を否定して自分の所有物とすることは認められません。しかし、奴隷制度が社会的に廃止されるまでには長い時間がかかりました。

いくつかのことを覚える必要があります。第 1 に、聖書は社会改革のためではなく、罪からの救いの道を示すために書かれたことです。聖書に記されているすべてのことが神の前に正しいのではなく、人間の罪の結果として行われてきたことが多くあります。奴隷制度も本来は神のみこころではないが、時代的制約の中で認めているのです。神の本来のみこころがなされるためには、人間が罪の奴隷から解放される必要があります。人が罪から解放され、神の子どもとして新生する時に、本来の神のみこころを知ることができます。そして、まず教会の中で神のみこころが行われ、それから徐々に教会から社会に神のみこころが示され、改革されていきます。「ユダヤ人もギリシア人もなく奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」ガラテヤ 3:28

第 2 に、近代にヨーロッパ諸国の植民地やアメリカで行われた奴隷制度は、旧新約聖書によって否定されています。アフリカ人は誘拐され、奴隷商人によって売られ、重労働を課せられました。「人を誘拐した者は、その人を売った場合も、自分の手もとに置いている場合も、必ず殺されなければならない。」出エジプト 21:16 I テモテ 1:10 では人を誘拐する者は、人を殺す者と同じ罪に挙げられています。

第 3 に、教会は近代の奴隷制度に加担と解放の両方に関わったことです。奴隷制度に加担した点については、教会はアフリカから来た奴隷をまとめるために、奴隷をキリスト教に改宗させようとしてしました。その際、奴隷制度を維持するために必要なこと(エペソ 6 : 5 など)を強調して教えました。「奴隷聖書」と呼ばれる聖書は、都合の悪い箇所を削除した結果 14 巻しかなく、もちろん出エジプト記はありません。このように教会も支配者側に加担した罪を犯しました。一方で、奴隷制度を廃止し、奴隷を解放するためにも教会とクリスチャンが関わりました。イギリスでは、クリスチャン議員ウィルバースフォース(彼の所属教会の牧師は元奴隷船第長のジョン・ニュートン)が、奴隷制度廃止法成立に生涯をかけました。アメリカでは同じくクリスチャン大統領リンカーンが奴隷解放宣言を行いました。

今日奴隷制度はなくなりましたが、奴隷状態で働かされている人が今も世界で 4500 万人いると言われています。また差別問題も解決されていません。教会は福音宣教によって、人々を罪の奴隷から解放する働きをするとともに、社会の問題に対しても神のみこころが行われるために、関わる必要があります。

28. 聖所 「彼らにわたしのための聖所を造らせよ。そうすれば、わたしは彼らのただ中に住む。幕屋と幕屋のすべての備品は、わたしがあなたに示す型と全く同じように造らなければならない。」 出エジプト 25:8-9

出エジプト 25-27 章と 30 章は幕屋について記されています。幕屋とはどのようなものであり、新約において、どのように成就したのでしょうか。

①幕屋の名称：聖書には幕屋を表わす 5 つの名前が用いられています。(1)幕屋：住むという意味(2)聖所：聖なる場所(3)天幕：仮の住居(4)会見の天幕：指定された場所で会うという意味(5)あかしの幕屋：あかしとは十戒のことであり、十戒が記された石が入った契約の箱がある場所

②幕屋の目的：(1)神が住まわれる場所であり、神が民と会見される場所である。幕屋は公に礼拝する場所であり、そのために犠牲のいけにえがささげられ、罪の贖いがなされた。(2)目に見えない神が民とともにおられることを可視的に証しする場所である。それによって、民は神の臨在を知り、偶像礼拝から守られた。(3)来るべきキリストの救いを表わす予型となった。

③幕屋の構造(東側から) (1)周囲：東西 100 キュビト、南北 50 キュビト、高さ 5 キュビトで、5 キュビト間隔で立てられた柱に亜麻布の幕が掛けられた。(2)入り口(門)：20 キュビトの掛け幕が掛けられた入り口から入る。(3)祭壇：庭の中央にいけにえを焼くための祭壇があった。(4)洗盤：祭司が死なないために、聖所に入る前に水を浴び、手足を洗った。(5)聖所：a 壁：高さ 10 キュビト、幅 10 キュビト、長さ 30 キュビトのアカシヤ材の柱で造られた壁に、b の 4 重の幕の覆いが掛けられていた。東側 2/3 が聖所、西側 1/3 が至聖所に分かれていた。祭司は c の入口から聖所に入る。d の机には 12 個の臨在のパンが安息日ごとにささげられた。e の燭台は 7 つの枝にともしび皿があり、ともしびを絶えずともしておいた。f の香の壇で朝と夕に常供の香のささげ物として香がたかれた。(6)至聖所：神が臨在される最も聖なる場所であり、g の仕切りの垂れ幕によって仕切られた。h の契約の箱はあかしの箱、主の箱、聖なる箱、御力の箱とも呼ばれている。契約の箱の中には十戒が記された 2 枚の石、マナの入った金のつぼ、芽を出したアロンの杖が入っていた。箱の上は宥めの蓋があり、宥めの蓋の両側には金で作られたケルビムが、それぞれ向かい合うように立てられた。大祭司は年に一度、至聖所に入り、宥めの蓋に罪のきよめのささげ物の雄牛と雄やぎの血を注ぎ、イスラエルの民の罪の贖いを行った。(7)幕屋はソロモンが神殿を作ったことによって役目を果たした。ソロモンの神殿がバビロン捕囚の時に破壊され、捕囚後ゼルバベルが神殿を再建した。その後、ヘロデ大王が神殿を拡張した。イエスの時代の神殿はヘロデの神殿が建っていた。紀元 70 年にローマ軍によって神殿は破壊され、ユダヤ人の神殿礼拝は終了した。

④新約における成就：旧約における幕屋・神殿とそこにおける礼拝は、キリストの救いを表わす予型であり、キリストの十字架の贖いによって成就しました。ヨハネ 1:14 の「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」の「住まわれた」は「幕屋を張られた」という意味であり、幕屋にあった神の栄光の臨在が、受肉されたキリストのうちに認められるようになったのです。また幕屋においてなされた罪の贖いがキリストによって完成しました。「しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、また雄やぎや子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。」ヘブル 9：11-12

また幕屋は、聖霊の宮であるキリスト者のからだと教会を表わしています。「私たちは生ける神の宮なのです。」Ⅱコリント 6:19、Ⅰコリント 6:19「このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。」エペソ 2:21 さらに、幕屋は来るべき神の国を表わしています。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。」黙示 21:3

29. 祭司「あなたはイスラエルの子らの中から、あなたの兄弟アロンと、彼らとともにいる彼の息子たちのナダブとアビフ、エルアザルとイタマルをあなたの近くにさせ、祭司としてわたしに仕えさせよ。」出エジプト 28:1

出エジプト記には、大きく分けて 2 つの主題があります。一つは出エジプトによる神の救いのみわざ、もう一つは救われた神の民が聖所を建て、聖なる民として作り上げられていくことです。イスラエル人が「祭司の王国」(出エ 19:6)と呼ばれるのは、彼らが聖所に仕える生活を中心にするからです。彼らが祭司の王国となるために、幕屋の建設とそこで奉仕する祭司の規定が記されました。

①レビ人:レビ人とはレビ族に属する人のことです。神は、イスラエル人の初子をレビ人によって贖われ(代わりとされ)、神に仕える働きのために聖別されました。(民数 3:12)そして、レビ人の中のアロンとその子らとその子孫を祭司職に任命されたのです。レビ人は祭司の指導の管理下にあり、礼拝を取り仕切る祭司のもとで仕えました。レビ人の 3 つの部族(ゲルション族、コハテ族、メラリ族)にはそれぞれの聖所の任務が与えられました。(民数 3 章)

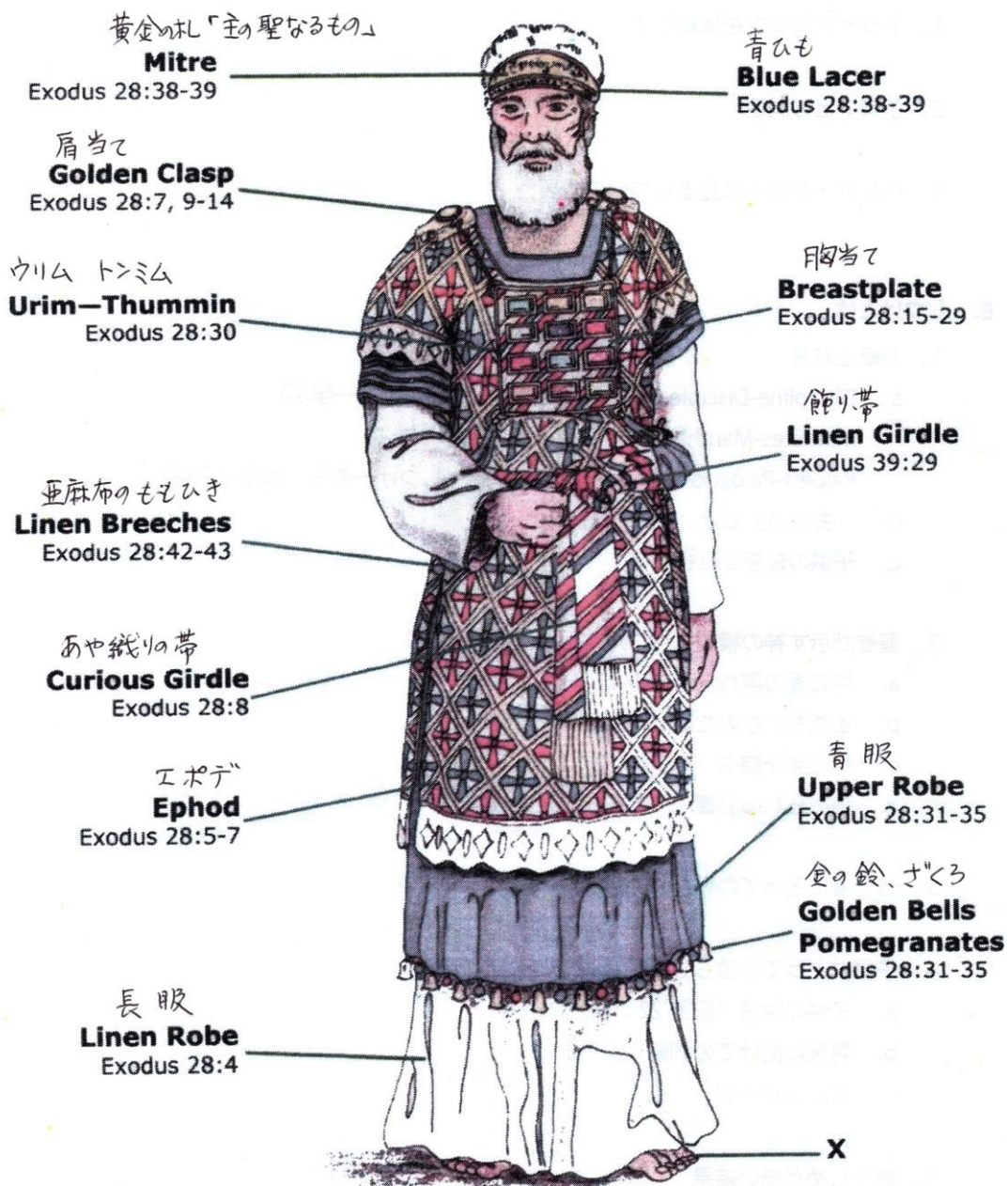
②祭司:祭司はアロンと彼の息子の子孫が世襲しました。ナダブとアビフは異なる火をささげたため、死にました。彼らには子がいなかったので、エルアザルとイタマルが祭司としてアロンのもとで仕えました。(民数 3:4)大祭司はアロンであり、アロンの死後エルアザルと彼の子孫が大祭司となりました。(民数 20:26、25:13)祭司は大祭司のもとで、聖所での奉仕をしました。なお、新約聖書にはよく祭司長の言及がありますが、祭司長とは祭司の中で指導的立場にある人のことです。

③祭司の任務:祭司の任務は聖所での務めに関することとそれ以外のことに分けられます。聖所に関することは、ささげ物を献げ、罪の贖いをして、イスラエルの民を聖別することです。また、祭壇の火を絶やさず燃やし続けること、聖所のともしびをともし続けること、朝夕に香を焚くこと、安息日ごとに 12 個の臨在のパンを献げることなどがありました。また大祭司は年に一度、いけにえの血を携えて至聖所に入り、宥めの蓋に注いで、イスラエルの民の罪の贖いをしました。聖所以外の務めは、イスラエルの民を祝福すること、ラッパを吹き鳴らして全会衆を聖所に集め、宿営を移動させ、戦いに備えさせること、ツァラアトの診断と宣言をすること、律法を民に教えることがありました。

④祭司の装束:出エジプト 28:4-39 には大祭司の装束、28:40-42 には祭司の装束が記されています。それらは美と栄光を表す聖なる装束でした。祭司はこの装束を着て神に仕えなければなりませんでした。裏の絵は大祭司の装束です。

⑤新約における成就:キリストは、旧約の大祭司の成就としてこの世に来られ、自らを罪のための完全な犠牲のいけにえとしてささげて、永遠の贖いを成し遂げてくださいました。そして、よみがえって天に上り、いま永遠の大祭司として神の右に座して私たちのためにとりなしていただきます。「私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」(ヘブル 4:14)

そして、キリストを信じて神の民の一員とされたクリスチャンは「王である祭司」となって、この世で神に仕え、人々に福音を伝え、神のもとに導く務めが与えられました。祭司の王国であるイスラエルは、新約においては教会において成就したのです。さらにクリスチャンは祭司として、直接神に仕えることができるようになり、プロテスタント教会が掲げる「万民祭司」が実現しました。また祭司の装束は、義認によって着せられたキリストの義の衣と、やがて天において着ることが許される「輝くきよい亜麻布」によって成就しました。(ローマ 13:4、黙示 19:8)



祭司：長服、飾り帯、ターバン（かぶり物） 亜麻布のももひき

30. 神へのささげ物「あなたがたの中でだれかが主にささげ物を献げるときは、家畜の中から、牛か羊をそのささげものとしてささげなければならない。」レビ 1 : 2

神へのささげ物はモーセ以前にも行われていましたが、神は律法によって幕屋、祭司職とともにささげ物の規定を与えられました。ささげ物には、動物のささげ物と植物のささげ物がありました。動物のささげ物は傷のない動物でなければなりません。これはやがて来られる救い主には罪がないことを表わしていました。旧約のささげ物は、やがてキリストにおいて成就しました。旧約のささげ物と新約における成就を見てみましょう。

①罪のきよめのささげ物(罪のためのいけにえ)レビ 4:3 罪のきよめのささげ物は、無意識に故意ではない罪、あるいは故意とはいえ、情状酌量される環境で犯した罪を贖うためにささげられました。なお、第1級の犯罪(安息日を破る、姦淫、殺人、神を冒瀆するなど)は死をもって罰せられました。大祭司には若い雄牛、支配者には雄やぎ、一般の人には雌のやぎか羊、貧しい者には2羽の鳩、余裕のない者には少量の小麦がささげられました。動物の血は祭壇の角に塗られました。血を流すことなしに、罪の赦しがないからです。(レビ 17:11、ヘブル 9:22) 罪のきよめのささげ物は、イエスの血による贖いによって成就しました。(ヘブル 9:14)

②代償のささげ物(罪過のためのいけにえ)レビ 5:15 代償のささげ物は、償いをしなければならない罪を贖うためにささげられました。罪のきよめのささげ物は主に、神に対する罪のために、代償のささげ物は、人に対する罪のためにささげられました。要求されている賠償がなされた後に、一頭の雄の子羊がささげられ、その血は祭壇の周りに注ぎかけられました。代償のささげ物もイエスの血による贖いによって成就しました。

③全焼のささげ物(全焼のいけにえ)レビ 1 : 3 全焼のささげ物は、罪に対する神の怒りをなだめる、なだめのささげ物であるとともに、主に対して礼拝者が全く聖別されることも意味しました。全焼のささげ物は毎日朝夕に規則的にささげる物で、一歳の子羊がささげられました。安息日には朝夕 2 頭ずつささげられました。これはイエスのご自身のすべてを献げる全きささげ物となられたことによって成就しました。また、イエスによって救われた私たちが、神に自らのすべてをささげて礼拝することを表わしています。(ローマ 12:1)

④交わりのいけにえ(和解のいけにえ)レビ 3:1 交わりのいけにえは、神の和解した者が神に感謝し、神と交わるためにささげられました。血は祭壇の周りに注ぎかけられました。また、脂肪は焼かれ、胸とももの部分は祭司に与えられ、その他の部分はささげた者が家族や友人とともに主が選ばれた聖なる場所で食べました。この食事は神との交わりを表わしました。新約においては聖餐式で、キリストのからだを表わすパンと血を表わすぶどう汁をいただくことを通して、キリストの贖いを覚え、神との交わりをいただきます。

⑤穀物のささげ物(穀物のささげ物)レビ 2:1 穀物のささげ物は血を流すことのないささげ物です。穀物のささげ物は動物のいけにえに添えてささげられました。例外として、余裕のない者は罪のきよめのささげ物に代わってささげることができました。小麦、種を入れないパンなどに塩を添えてささげました。穀物のささげ物もキリストの犠牲のささげ物によって成就しました。

⑥注ぎのささげ物(注ぎのささげ物)民数 15:7 注ぎのささげ物はぶどう酒や水、油が祭壇やいけにえの肉に注がれました。注ぎのささげ物もキリストによって成就するとともに、パウロは自らを注ぎのささげ物と言い、神への献身を表わしました。(ピリピ 2 : 17)

⑦臨在のパン(供えのパン)出エジプト 25:30 臨在のパンは安息日ごとに12個のパンがささげられました。パンはいのちのパンであるキリストを表わしました。(ヨハネ 6:35)

⑧ともしび用の油(灯火用の油)レビ 24:2 燭台のともしびが絶えずともしておくために、純粋なオリーブ油が絶えずささげられました。ともしびは世の光であるキリストを表わしました。(ヨハネ 8:12)

⑨常供の香のささげ物(常供の香のささげ物)出エジプト 30:8 祭司は夕暮れに香の壇で香の煙を立ち上らせ、香は神への祈りを表わしました。新約においては、キリストの私たちのためのとりなしと、私たちのキリストの名による祈りを表わします。

3 1. 食物規定「イスラエルの子らに告げよ。次のものは、地上のすべての動物のうちで、あなたがたが食べてもよい生き物である。動物のうち、すべてひずめが分かれ、完全にひずめが割れているもので、反芻するもの。それは食べてもよい。」レビ 11:2,3

レビ記 11 章には食物規定が記されています。神はイスラエル人が食べてもよいきよい動物と食べてはいけない汚れた動物を区別されました。ひずめが分かれて反芻する牛や羊は食べてもよい動物です。一方、らくだ、たぬき、うさぎ、豚は、ひずめが分かれていないか、反芻しないので食べてはいけませんでした。魚では、ひれと鱗のあるものは食べても良いですが、ひれや鱗のないうなぎ、タコ、イカ、貝などは食べてはいけません。鳥では猛禽類は食べてはいけませんし、昆虫ではいなごやバッタ類以外は食べてはいけません。また「いかなる肉の血も食べてはならない」とあるので、食べてもよい動物も血抜きをしなければ食べてはいけません。(レビ 17:14) また「子やぎをその母の乳で煮てはならない」とあるので、肉と乳製品と一緒に食べてはいけません。(出エジプト 2:19) 今日ユダヤ人は食べてもよいものを「コーシャ」と呼んで、コーシャのみを食べるようにしています。

ではなぜ神はイスラエル人に食物規定を与えられたのでしょうか。レビ記 11:44 にはこうあります。「わたしはあなたがたの神、主であるからだ。あなたがたは自分の身を聖別して、聖なる者とならなければならない。わたしが聖だからである。あなたがたは、地の上を這ういかなる群がるものによっても、自分自身を汚してはならない。」ここから教えられることは、毎日の食事の時に、神がきよいとされたものだけを食えることによって、イスラエル人が聖なる神に従い、聖別された聖い者となるためであることがわかります。聖い食べ物と汚れた食べ物の区別は儀式的なものであり、衛生面からの区別ではありません。神がきよいとされた物を食えることによって、聖なる神に従い、自分たちは、神によって聖別された聖なる民であることを絶えず確認することが、食物規定の目的でした。

実際の効果としては、食物規定によって異邦人とともに食事をする事ができないことがありました。イスラエル人が異邦人と交わることに制限が課せられた結果、紀元 70 年にエルサレム崩壊により 1900 年間イスラエル人が国を失っても、イスラエル民族は守られました。「ユダヤ人が安息日を守ったのではなく、安息日がユダヤ人を守った」と言われますが、「ユダヤ人が食物規定を守ったのではなく、食物規定がユダヤ人を守った」と言うこともできるでしょう。

では新約時代はこの食物規定をどのように理解すればよいでしょう。食物規定は祭儀律法ですので、新約時代は無効となりました。神はペテロに、異邦人伝道が神のみこころであることを示すために夢の中できよくない動物を食べよと言われました。それに対してペテロが、きよくない物を食べたことはないと言うと、神は「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない」と言われました。(使徒 10:15) このことは異邦人をきよくないと言ってはいけないことを教えるとともに、新約時代においては食物規定が無効になったことを教えています。パウロはローマ 14:20 で「すべての食べ物はきよいのです」と言いました。ですからクリスチャンは何を食べても良いのです。同時にパウロは、「食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません」と言い、兄弟に対する配慮を自分に与えられた権利や自由より優先するとも言っています。

またペテロはレビ 11:44 を引用し、クリスチャンが聖なる者となるべきことを I ペテロ 1:14-16 で教えています。「従順な子どもとなり、以前、無知であったときの欲望に従わず、むしろあなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となちなさい。『あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである』と書いてあるとおりです。」ですから、食物規定は無効となっても、神の民が聖なる者となるべきことは、旧新約聖書の一貫した教えなのです。

3 2. ツアラアトとは何か レビ 13:1-2、ルカ 5:12-14

新改訳 2017 版のあとがきを見ると、『らい病(人)』と訳されていたヘブル語『ツアラアト』およびギリシャ語『レブラ』『レプロス』は、第 3 版に続いて…『ツアラアト』と訳出したと記されています。文語訳、口語訳、新改訳第 1 版・第 2 版まで「らい病」と訳された言葉は、新改訳第 3 版と 2017 版では「ツアラアト」と訳されています。新共同訳は、旧約聖書では「重い皮膚病」、新約聖書では引き続き「らい病」と訳しました。2018 年に出版された「聖書協会共同訳」は「規定の病」と訳しました。なぜこのような訳の変化が起きたのでしょうか。そこには差別の問題がありました。

レビ記 13 章 14 章はツアラアトについての教えです。この箇所を読むと、ここに記されている症状がハンセン病(現在はいらい病ではなく、らい菌を発見したハンセン医師にちなんでハンセン病と呼ぶ)とは違うことがわかります。なぜならこの症状は、からだだけでなく衣服、織物、革製品、家にも出るからです。今日、歴史的言語学と現代医学用語学の双方に熟練した者で、先入観にとらわれていない人なら「らい病」という名前は選ばないだろうと言われます。しかし、歴史的に各国言書が「らい病」と訳し、英語の欽定訳(ジェイムズ王訳 1611 年出版)も leprosy と訳したことが影響し、最近までその訳が続きました。

一方、社会ではハンセン病患者に対する差別が続きました。日本では 1907 年にらい予防法が制定され、1953 年に改定、1996 年に廃止されるまで 90 年間、この法律の下で患者を強制隔離し、基本的人権を奪い、不妊手術を行うなどの差別が行われてきました。また患者家族も社会的差別を受けてきました。日本では宣教師が率先してハンセン病患者の救済にあたり、1889 年から 1895 年(明治 20 年代)に 3 つのハンセン病患者のためのキリスト教病院が建てられました。患者はそこで気兼ねなく過ごし、医療と福音によって癒されていきました。

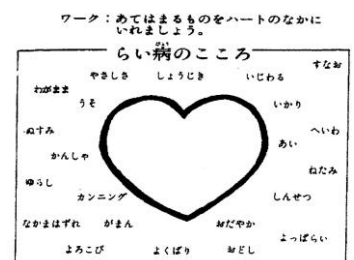
このようなキリスト教会の愛の働きの良い面があったと同時に、聖書解釈とその実践によって、ハンセン病を間違って理解して教え、差別を助長する面もありました。聖書翻訳において大きな方向転換を迫られたのが、1992 年にハンセン病療養所内にある長嶋曙教会が日本福音同盟(JEA)等の団体に申し入れをしたことでした。その申し入れの中で、福音派の教会で、聖書のらし病を罪の象徴として語り、患者の心を傷つけていること、ハンセン病に対する間違った理解をして教えていることなどが挙げられ、ハンセン病に対する正しい理解をし、聖書的に間違った教えを改めるべきことを要望しました。

二つの絵は 1992 年のある教団の夏期学校教案に掲載されたもので、単元の目標は「ナアマンのらい病を通して罪の恐ろしさを知る」です。そこでは次のように教えられています。

「らい病というのは最初、からだのあちらこちらに腫物ができて、やがてそれが広がり、最後にはからだが腐っていく恐ろしい病気なのです」

「らい病というのは人から人へうつるように、罪も人から人へうつっていきます」「聖書は罪人がどのような者であるかを表すためにらい病人として記しています」これらは間違った聖書です。

このような過去の誤りへの反省に立ち、聖書翻訳において原語の「ツアラアト」や「規定の病」と訳しました。ツアラアトは旧約聖書における祭儀的な意味での汚れを表すものであり、ツアラアトが人間の罪を表しているのではありません。また新約時代には、律法は廃止されました。聖書の間違った理解によって、差別を助長することがないように気をつけなければなりません。



33. 宥めの日とアザゼルの雄やぎ「特にこの第7の月の10日は宥めの日であり、あなたがたのために聖なる会合を開く。」レビ23:27「雄やぎ2匹のためにアロンがくじを引く。一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのためである。」レビ16:8

イスラエルでは、第7の月の10日は宥めの日(贖罪の日)として、聖なる会合を開くことが定められました。イスラエルでは連日、罪の贖いがなされていましたが、祭司たち自身とすべての民のために徹底した贖いが必要であったため、宥めの日が守られました。この日は一切の仕事を休む安息日となり、人々は断食しました。(23:28-29)この日、大祭司は至聖所に入り、民のための罪の贖いをしました。至聖所には年に一度の宥めの日に、大祭司だけが入ることができました。しかも、大祭司はレビ16章に記されている順序に従って至聖所に入り、民の罪の贖いをするのが求められ、もしその手順を間違えば、大祭司自身が死んでしまうことになりました。大祭司は以下の手順で民の罪の贖いをしました。

- ①からだに水を浴びた後、聖なる装束を着る。
- ②罪のきよめのささげ物である雄牛の頭に手を置いて罪を告白した後、自分と家族のために屠る。
- ③火皿と香を持って至聖所に入り、香から出る煙があかしの箱の上の宥めの蓋を覆うようにする。
- ④聖所から出て、祭司から雄牛の血の入った器を受取り、再び至聖所に入る
- ⑤雄牛の血を取り、宥めの蓋の上に一度、下に七度振りかけ、自分と家族の罪の贖いをする。
- ⑥再び聖所から出て、民の罪の贖いをするために、「主のため」の雄やぎを屠る。
- ⑦雄やぎの血を携えて、三度目に至聖所に入り、雄牛の血と同じように宥めの蓋に振りかける。
- ⑧聖所の香の壇の四隅の角に雄牛と雄やぎの血を塗り、その上で七度血を振りまく。
- ⑨聖所から出てアザゼルの雄やぎのところに来る。そして両手を置いて民の罪を告白する。
- ⑩民の罪を負った雄やぎを荒野に追いやる。
- ⑪聖なる装束を脱ぎ、水を浴びた後、大祭司の服を着る。
- ⑫自分と家族のために雄羊を、民のために雄羊を、それぞれ全焼のいけにえとしてささげる。
- ⑬再び聖所に入り、聖なる装束に着替え、至聖所に入って香を取り出し、聖所から出て来る。

このような順序で、年に一度、祭司たち自身とすべての民のために徹底した罪の贖いがなされたのでした。アザゼルという言葉の明確な意味は分かっていませんが、アーザル(除去する)の強調語として「全き除去」「全き罪の赦し」という意味ではないかと考えられます。民の罪を負った雄やぎが荒野に追放されることによって、民の罪が遠くに運ばれ、全き罪の赦しが与えられたことを表わしました。

「東が西から遠く離れているように、主は、私たちの背きの罪を遠く離される。」詩篇103:12

英語の聖書ではアザゼルをスケープゴート(scapegoat)と訳しています。escape(逃げる)とgoat(やぎ)の合成語です。この言葉は一般的な意味として、不満のはけ口にされる対象を指す言葉、また集団の不利益を、特定の個人に押し付ける行為として使われます。例えば、ナチスはユダヤ人をスケープゴートにした結果、ホロコースト(ユダヤ人大量虐殺)が起きました。また、今も自分たちの不満や責任を他の人に押し付け、その人を非難する、即ちスケープゴートにすることが起こります。これらの一般的な意味で使われるスケープゴートは神に喜ばれることではなく、聖書本来の意味とは全く違います。

旧約の宥めの日の罪の贖いは、新約においてはイエス・キリストにおいて完全に成就しました。「しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。」ヘブル9:11-12 大祭司イエスの血による贖いによって、私たちの罪は徹底的に、完全に、永遠に贖われたのです。

3 4. 人口調査「イスラエルの全会衆を、氏族ごと、一簇ごとに調べ、すべての男子を一人ひとり名を数えて、その頭数を調べよ。」民数記 1:2

民数記はその名のごとく民の数を記した書です。英書ではNumbers「数(複数)」です。エジプトを出たイスラエルの民は、神の命令によって2回人口調査を行いました。1回目はエジプトの地を出て2年目の第2の月の1日にシナイの荒野において(1章)、2回目は約束の地に入る前にヨルダン川のほとりのモアブの草原で行われました。(26章)人口調査の結果、1回目は603, 550人、2回目は610, 730人でした。この数は20歳以上の男子の数で、レビ人は入っていません。レビ人は人口調査とは別に数えられ、生後1か月以上の男子を登録しました。1回目は22,000人、2回目は23,000人でした。

この登録人数から、イスラエルの総人口は200万人を超えていたのではないかと考えられます。エジプトにきたヤコブの家族が70人であったことを覚えると、エジプトでイスラエル人がどんどん増え、それをファラオが脅威に感じたことも納得できます。神がアブラハムに「あなたの子孫は地のちりのように、空の星のようになる」に約束したことの成就を見ることができます。

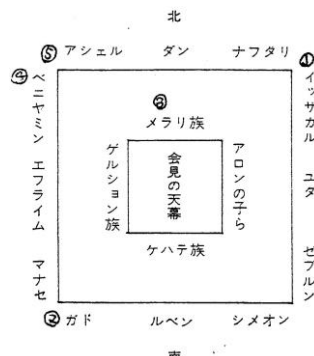
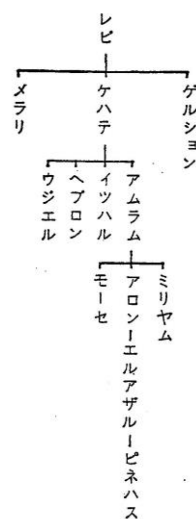
なぜレビ人は人口調査の際に、他のイスラエル人の中に登録されなかったのでしょうか。それはレビ人は主のものであり(3:45)、イスラエルの民に代わって幕屋に関わる奉仕をするためでした。また人口調査の目的が、戦いに出ることができる者を調べることであったのでレビ人を除いたのです。さらにレビ人には相続地が与えられなかったことも理由となりました。(26:62)シメオンとレビがシェケムの人たちを剣で殺した結果、イスラエルの中に散らされることになりました。

(創世 49:5-7)シメオンはユダの相続地の中に入れられました。レビ族は相続地を持たず、各部族の中に散らされました。一方、レビ人は主に身をささげて主に従い、金の子牛の前で乱れていた民3千人を殺すことによって主の祝福にあずかり、主に仕える特別な使命が与えられました。

第1回目人口調査から第2回目の人口調査までに、約40年間の年月が過ぎていきます。その間、出エジプトを経験した人の中で、カレブとヨシュア以外はみな死んでしまい、次の世代が第2回目で数えられたのです。このことを通して、神のさばきが確実に行われたことが分かります。13章、14章でモーセは各部族からの代表12人をカナンの地に偵察に向かわせました。偵察から帰ってきた12人のうちカレブとヨシュアだけが、主に従って約束の地を占領しようと言いました。しかし他の10人は、「あの地の民は強くて、私たちは攻め上れない」と報告し、民は不信仰になって攻め上ることを止めてしまいました。神は不信仰な民は約束の地に入れないと告げ、彼らの子どもたちが入ると言われたのです。そしてその通りになりました。

新約聖書では、このことは私たちにとっての約束の地である天国に入るための教訓として教えられています。ヘブル 3:7-4:11には、荒野の民の不信仰と従頂に倣って、私たちが天国の安息に入れないことがないようにしようと教えています。

『今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。神に逆らったときのように』と言われているとおりです。…神が40年の間、憤っておられたのは、だれに対してですか。罪を犯して、荒野にしかばねをさらした者たちに対してではありません。…このように、彼らが安息に入れなかったのは、不信仰のためであったことが分かります。」(ヘブル 3:15, 17, 19)私たちは彼らのように不信仰、不従頂にならず神のみことばの約束を信じ、信仰と従頂を持って天の約束の地を目指しましょう。



35. 荒野の旅「モーセとアロンの指導のもとに、その軍団ごとにエジプトの地から出て来たイスラエルの子らの旅程は次のとおりである。」民数 33:1

民数記はその名のごとく、イスラエルの民の数が記されています。もう一つの特徴は、エジプトからカナンの地に行くまでの旅程とそれぞれの滞在地で何があったのかが記されています。旅程の場所は33章にまとめられています。正確な場所がわからない地名もありますが、イスラエルの民はエジプト脱出後、シナイ半島を南下し、シナイ山を経て北上し、その後40年間荒野で過ごし、死海の東側を通過してエリコの対岸まで旅をしました。ここでは、3つの場所での出来事を見ていきたいと思います。

①キブロテ・ハ・タアワ 33:16, 11章

荒野を旅する民は、何度も水や食べ物で不平不満を言いました。ここでは「肉が食べたい。エジプトで食べていた魚や野菜もなく、マナしかない」とつぶやきました。神は海から大量のうずらを運び、民はその肉を食べました。しかし、主の怒りが民に向かって燃え上がり、激しい疫病で民を打たれたのでした。11章では、イスラエルの民が荒野の40年間、尽きることなく毎朝取って食べたマナについて記されています。マナはコエンドロの種のように、夜、宿営に露が降りる時、マナも降りて来て、朝になると民はそれを取ってパン菓子を作って食べました。マナは、やがて来られる救い主イエスを表わしていました。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」ヨハネ 6:35

②カデシュ・バルネア、ツィンの荒野 33:36, 20章

モーセが各部族の代表12人をカナンの地に偵察に向かわせた場所はカデシュ・バルネアでした。民の不信仰の結果、ヨシュアとカレブ以外の大人は皆、約束の地に入れなくなり、その結果、40年間の荒野の旅が続いたのです。カデシュでモーセの姉ミリアムは死にました。またモーセ自身が約束の地に入れなくなる出来事がカデシュで起こりました。それがメリバの水の出来事です。水がないと民が言ってモーセにつぶやいた時、神はモーセに杖を取り、岩に命じれば水が出ると言われました。モーセとアロンは民を岩の前に集め、以前レフィディムで行ったように、モーセは杖で2度岩を打ちました。(出エジプト 17:6) しかし主は、モーセとアロンに対して、主に信頼しなかったために2人は約束の地に入れないと言われたのです。

アロンはその後ホル山で死に(20:28)、モーセはネボ山のピスガの頂で死にました。(申命 34:5) モーセもアロンも約束の地に入れなかったことは、本当に無念だったでしょう。ヘブル 11章を見ると、旧約の信仰者は約束のものを手に入れることができず、みな地上では旅人、寄留者として歩んだと言っています。しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。神は彼らのために都を用意されたのです。」ヘブル 11:16 新約の民もこの世には約束の地はなく、私たちは地上ではみな天国に向かう旅人、寄留者なのです。

③エドムの地の迂回途上 21:4-9

約束の地が近づき、エドムの地を迂回する荒野で、民は神とモーセに逆らいました。その時、神は民の中に燃える蛇を送り、多くの民が死にました。民はモーセに自分たちの罪を告白し、神のとりなしを願いました。モーセが民のために祈ると、神は燃える蛇を作り、旗ざおに付けるようにと言われ、かまれた者はそれを仰ぎ見れば生きると約束されました。「モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。」21:9

この出来事はやがて救い主イエスが十字架に付けられることと、十字架のイエスを仰ぎ見る者はだれでも救われるという、キリストの救いの予型となりました。「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」ヨハネ 3:14-15 イスラエル人の荒野の旅は、私たちが地上の荒野の旅の中で、神に信頼し、救い主イエスの十字架の贖いを信じて 約束の地である天国に向かう者となるようにと教えているのです。

36. 占い師バラム「バラムはバラクに言った。『あなたは、あなたの全焼のささげ物のそばに立ってください。…主が私にお示しになることを、あなたに知らシエマーしよう。』」民数 23:3

イスラエル人がエリコの対岸にあるモアブの草原に宿営した時のことです。(33:48)モアブの王バラクはイスラエル人を恐れ、はるか北のベトルから有名な占い師バラムを呼んで、イスラエルをのろわせようと思いました。バラムが主に伺いを立てると、一度目は招きに応じることを禁じましたが、2回目は許可しました。しかし、バラムがモアブに向かう途中、主の使いが抜き身の剣を持って立ちはだかりました。その姿はろばには見えても、バラムには見えませんでした。バラムは動かないろばを打つと、主はろばの口を開かれたので、ろばがバラムにしゃべるという奇跡が起きました。(22:28)

目が開かれ主の使いを見たバラムは、主が告げる言葉だけを告げるようにとの警告を受けて、バラクのところに行きました。バラクは3回場所を変えて、イスラエルをのろうようにバラムに頼みますが、バラムは3回とも主が語られたとおりのイスラエルを祝福し、自分のところに帰りました。民数 22-24章に記されているバラムの振る舞いから、バラムが主に従う預言者のように受け取るかもしれませんが、しかし、聖書はそうには教えていません。彼が主のことばしか語れなかったのは、彼が主を信じる信仰者だからではなく、彼の欲に反して働く神に対する恐れからでした。バラムはこの時、ミディアン人の女をそそのかしてイスラエルを誘惑し、バアル・ベオルの神を拝むようにさシエマーした。(31:6、25章、黙示 2:14) バラムは彼の罪に対するさばきとして、その後イスラエル人によって殺されました。(31:8)

新約聖書はバアルの罪を教えます。「彼らは正しい道を捨てて、さまよっています。ベオルの子バラムの道に従ったのです。バラムは不義の報酬を愛しましたが、自分の不法な行いをとがめられました。口のきけないろばが人間の声を話して、この預言者の正気を失ったふるまいをやめさせたのです。」(Ⅱペテロ 2:15-16) ユダ 11 節も「利益のためにバラムの迷いに陥り」と言って、バラムのような食欲の生き方することを戒めています。

37. 誓願とナジル人「男が主に誓願をするか、あるいは、物断ちをしようと誓う場合には、自分のことばを破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならない。」30:2

誓願とは、神が自分の願いを聞き届けてくださった時にあることをする、あるいはあることをしない(物断ち)と約束することです。誓願は信仰上の義務ではなく、個人の自由に任せられていました。しかし、誓願をした場合は、破ることはできないため、軽々しくしてはいけなかったものでした。ハンナは主に対して、男の子をくださるなら、その子を一生の間主にお渡しし、その子の頭にかみそりを当てませんという誓願をしました。主はハンナの願いをかなえ、男の子サムエルを与えられました。ハンナは誓願を果たすために、乳離れしたサムエルを祭司エリのところに連れて行き、サムエルは生涯神に仕える者となりました。(Ⅰサムエル 1 章) イエスは、律法とパリサイ人が、抜け道を作って、形だけの誓願を行っていた偽善を戒められました。(マタイ 23:16-22)

誓願の中で特別なものに「ナジル人の誓願」があります。(6 章)ナジルとは聖別するという意味で、主の御用のためにすべてをささげて神に仕えるという誓願です。サムエルは、母ハンナがその子の頭にかみそりを当てませんという誓願をしたことによって、ナジル人の誓願をされた者として生まれました。サムエルは母の誓願を受け継ぎ、最後の士師として、また祭司、預言者として、神に生涯用いられました。サムソンも、胎内にいる時から神にささげられたナジル人だとの約束を受けて生まれました。(士師 13:5) しかし、サムソンの場合は、ナジル人としての誓いを果たさず、神の祝福を失う生涯を送りました。

ナジル人は3つの誓いを果たさなければなりませんでした。1つはぶどうで作った一切の物や強い酒を断つこと、2つ目は聖別の期間中は髪を切らないこと、3つ目は死体に近づかないことです。生涯のナジル人の誓願もあれば、一定期間のナジル人の誓願もありました。新約聖書においては、バプテスマのヨハネがナジル人と考えられます。(ルカ 1:15) またパウロが行った誓願やエルサレム教会の4人の誓願もナジル人の誓願でした。(使徒 18:18、21:23) 新約時代に生きるクリスチャンは誓願をする必要はありません。むしろ、日々自分自身を主に献げ、主のみこころに従って生きることが大切です。

38. ねたみの神 「あなたは自分のために偶像を造ってはならない。・・それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしはねたみの神。」申命記 5：8—9

申命とは「重ねて命令する」と言う意味です。約束の地に入ろうとするイスラエルの第2世代に対して、モーセは律法を整理し、重ねて命令し、神との契約を更新しました。5章では出エジプト20章に記されている十戒が重ねて教えられています。ここでは前回学んだ時には触れることができなかった「ねたみの神」について見てみましょう。「ねたみ」が、他の人が自分よりすぐれた状態をうらやましく思って憎む、そねむという意味だと、それは聖書における罪ですから神に当てはめることはできません。「姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」（マルコ 7:22）

一方、ねたみにはもう一つ、自分の愛する者が自分以外の他の人に愛情を向けている場合に嫉妬すると言う意味もあります。そのような状況で嫉妬しない場合は、その人を愛していないということでしょう。愛するゆえにねたむということがあり、その意味で神はねたみの神と言われるのです。ねたみの神は、第二戒の偶像を造ってはならないの戒めの中で使われています。神はイスラエルの民をご自分の民として愛しておられます。それなのに、イスラエルがまことの神への愛を捨て、他の神々を愛するなら、主なる神は愛するゆえにねたまれるのです。もし神が、イスラエルが偶像礼拝をしてもねたまないならば、神はイスラエルを愛しておられないことになります。神はイスラエルを、そして私たちをねたむほど愛しておられる神なのです。「わたしは、シオンをねたむほど激しく愛し、激しい憤りをもってこれをねたむ」（ゼカリヤ 8:2）

39. 創造の神と救いの神を覚える「あなたは自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸ばされた御腕をもって、あなたをそこから導き出したことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守るよう、あなたに命じたのである。」申命記 5:15

第四戒の理由が、出エジプトと申命記では違います。出エジプト 20:11 では神の創造のわざを理由に挙げています。「それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとし」出エジプトでは、天地を六日間で造られた神が七日目に休まれたので、イスラエルの民も六日間働き、七日目は休んで、創造者なる神を礼拝するようにと教えられています。この教えをモーセがシナイ山で神からいただいた後、40年間荒野の旅を続け、安息日に神を礼拝する中で、創造主なる神は同時に自分たちの救い主であることを覚えました。そして、再びモーセが十戒を教えた時、安息日を守る理由として、神がイスラエルをエジプトから救い出されたことを覚えるためとしたのです。

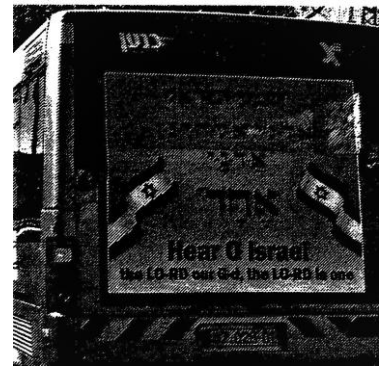
このように神の啓示は漸進的なものであり、一度にすべての啓示がなされるのではなく、時代とともに神の啓示はより明らかにされていき、最終的にキリストにあって成就していくのです。神の救いを覚える安息日も、十字架の救いを成し遂げてくださったキリストにあって成就しました。イスラエルの民は、エジプトで奴隷であった状態から救い出してくださった神を礼拝するために安息日を守りました。一方、新約時代のクリスチャンは、キリストの贖いによって罪の奴隷から救い出してくださった神を礼拝するために、キリストが復活された日曜日を主の日として守るようになりました。その結果、クリスチャンは土曜日の安息日規定から解放され、主日礼拝をもって、神を礼拝するようになったのです。

私たちの神は創造主であり、同時に救い主です。世界を創造し、私たちを造ってくださった神は、キリストによって救い、新しい人に再創造してくださいました。キリストが再臨される時には、以前の天と地は過ぎ去り、新しい天と地が創造され、私達の救いも完成します。そのことを覚えつつ、私たちは主日礼拝をささげます。そして、たましいと肉体の安息をいただき、主の栄光のために新しい週に歩みに遣わされます。

40. シェマー 「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。」 申命記 6:4

申命記 6 章 4～9 節は、ヘブル語では「シェマー」で始まるので、シェマーと呼ばれる大切なみことばです。ユダヤ教では朝夕の祈りの中で読まれます。4 節はヘブル語で「シェマー(聞け)イスラエル アドナイ(主)エロヘヌー(私たちの神)アドナイ(主)エハド(唯一)」と発音し、イスラエルのバスの後ろにも記されています。

イスラエル人が約束の地に入っても、周りの民の神々に従わずに、唯一の神(ヤハウェ)を私たちの神として信じ、従うようにとの神の教えです。信仰は聞くことから始まり、神のことばを聞き、信じ従う時に、神の祝福に与ります。逆に、神のことばに聞き従わず、偶像を拝むとき、イスラエルは神のさばきを受けました。



一つ、唯一を表わすエハドというヘブル語は、「いくつものものが完全に一つになっている状態」や「一つのものの中に多様なものがある状態」を表す時に用いられます。例えば、「ふたりは一体となるのである」(創世 2:24)、「天幕をつなぎ合わせて一つとする」(出エジプト 26:11)ではエハドが使われています。唯一(エハド)の神には複数の人格があるという三位一体の神の御性質が、暗示されていることが分かります。そして、新約聖書において唯一の神は、父、子、聖霊の三位一体の神であることが明確に啓示されたのです。

5 節「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」唯一の神に対する私たちの応答は、全身をもって神を愛することです。神はイスラエルを愛し、エジプトから救い出してくださいました。その神の愛に対する応答は神を愛することです。イエスは律法の中で一番重要な第一の戒めとして、このみことばを教えられました。神はイエスを通して、私たちの愛を表わしてくださいました。イエスを救い主と信じ、罪から贖われた私たちも、全身全霊をもって神を愛する者とされています。

6 節「私が今日あなたに命じるこれらのことばを心にとどめなさい。」モーセが語る神の教えを、大人は聞き、心にとどめなければなりません。私たちもみことばを読んで神に聞くだけでなく、聞いたみことばを心にとどめておくことが大切です。心の中にあるものが、私たちの日々の生活に出て来て、私たちの人生を築き上げるのです。

7 節「これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家で座っている時も道を歩く時も、寝る時も起きる時も、これを彼らに語りなさい。」聖書は子どもたちの信仰継承の大切さを教えています。「よく教え込む」とは「繰り返して何度も教える」ことです。毎日の生活の中で、親は自分が神から教えられたみことばを子どもたちに伝え、まことの神を信じ、神の教えに聞き従い、神を愛して生きることの大切さを伝えます。そして、子どもたちが信仰を継承できるように努めます。

8 節「これをしるしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。」主を愛し、主の言葉にいつも聞き従うための実践方法を 8 節 9 節で教えられました。今日も敬虔なユダヤ教徒はテフィリン(祈りの帯の意味)と呼ばれるシェマーの聖句を入れる小箱を、手と額の上に結び付けて祈ります。イエスはマタイ 23:5 で律法学者とパリサイ人が人に見せるために、聖句を入れる小箱を大きくしたり、衣の房を長くしていると言って、彼らの偽善を戒められました。

9 節「これをあなたの家の戸口の柱と門に書き記しなさい。」今日もユダヤの家には家の門や部屋の入口に、メズーサ(門柱の意味)と呼ばれるシェマーの聖句が入った細長い箱を取り付けます。家に入る時にはメズーサに手を当て、手にロづけをします。クリスチャンはこのような方法は用いませんが、絶えずみことばに聞き、心にとどめ、主を愛し、子どもに教えることが日々の生活の中で大切であることを覚えましょう。

40. 聖絶「神、主が彼らをあなたに渡し、あなたがこれを討つとき、あなたは彼らを必ず聖絶しなければならない。」申命記 7:2

聖絶とは、聖なる神の前で罪のためにのろわれた者となった罪人が、完全に滅ぼされることです。イスラエルの民は約束の地カナンに入る時、そこに住む 7 つの異邦の民を聖絶するようにと主から命じられました。なぜ聖絶が必要だったのか、聖絶の今日的意味は何なのかを見てみましょう。まず、なぜ神はイスラエル人にカナンに住む異邦人を聖絶するように命じられたのでしょうか。それは、この地に住む異邦人の罪の目盛りが満ちたので、神がイスラエルを用いてさばくためでした。創世記 15:16 では、カナンの地の民の罪が満ちるときに、イスラエル人がカナンに戻って来ることが記されています。

もう一つの理由は、イスラエル人がその地に住む異邦人の影響を受けて偶像礼拝を行い、イスラエル人自らが聖絶されることがないためでした。そのために、その地の偶像を徹底的に打ち壊すようにと命じられました。神は偶像と偶像に仕える者を聖絶の対象とされます。「ただ主ひとりのほかに、神々にいけにえをささげる者は、聖絶されなければならない。」出エジプト 22:20 偶像は、神の栄光を著しくゆがめるものであり、神は偶像を嫌われます。やがてイスラエル自らが偶像礼拝を行い、神によって聖絶されたのがバビロン捕囚でした。「バビロンの王ネブカドネツアルを呼び寄せて…攻めさせ…これを聖絶し…永遠の廢墟とする。」エレミヤ 25:9

ではなぜ 7 つの異邦の民を聖絶するために、神はイスラエルを用いられたのでしょうか。それは、イスラエルが神の救いの計画を実現するために、神の民として特別に選ばれたからです。神はイスラエルに律法と栄光の神の臨在のしるしである聖所を与えられました。聖所は、罪人が聖なる神によって聖絶されることがなく、罪が贖われて救われる方法を教えています。イスラエルの民も神の前では罪人であり、罪を持ったままでは聖絶されてしまいます。しかし神は、犠牲の動物に民の罪を負わせ、身代わりに動物を聖絶することによって、イスラエルを贖われました。その結果、イスラエルは神の前に聖なる民とされ、神に仕えることができるようになったのです。イスラエルがバビロン捕囚による聖絶を受けたのは、彼らが偶像礼拝に走り、罪の贖いを拒んだ結果でした。

旧約における罪の贖いによる聖絶からの救いは、イエスの十字架の贖いによって成就しました。すべての人は罪を犯したので、罪を持ったままでは聖なる神の前では聖絶されるのです。新約聖書では聖絶という言葉はありません。また旧約時代のような直接的な聖絶もなく、聖絶のために用いられる民族もいません。しかし、旧約の聖絶は、新約において二つの点で成就します。一つは、来るべき神のさばきの時に、罪人が永遠の滅びを受けて聖絶されることです。もう一つは、イエスが罪を贖う神の小羊となって、すべての人の身代わりに神のさばきを受けて聖絶されたことです。その結果、イエスを救い主と信じる者は、聖絶されることがなく、神の前に聖なる民とされ聖別されます。

レビ 27:28 は「すべて聖絶の物は最も聖なるものであり、主のものである」と教えています。罪人は罪を持ったまま聖なる神に受け入れられることはありません。罪人を主のものとするために、神は二つの方法を示されました。一つは、自らの罪に対する神のさばきを受け聖絶されて、主のものとなることです。この場合は、最終的な聖絶の時は神の最後の審判であり、主のものとなるとは永遠の滅びに至ることです。

もう一つの方法は、イエスが自分の身代わりに聖絶されたことを受け入れることです。イエスは私たちのためにのろわれた者となって、私たちが受けるべき聖絶を代わりに受けてくださいました。(ガラテヤ 3:13) イエスの血による贖いによって罪を赦された者は、神の前に聖別された神の民となり、神に仕える者となりました。新約時代のキリスト者にとっての戦いは、肉の戦いではなく霊的な戦いです。イエスの証人として福音を伝え、神の栄光を現す働きをし、やがて天の御国で永遠の祝福にあずかるのです。

4 1. イスラエルの三大祭り「あなたのうちの男子はみな、年に三度、種なしパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭りのときに、あなたの神、主が選ばれる場所で御前に出なければならない。主の前には何も持たずに出てはならない。」申命記 16:16

1. 過越の祭り、種なしパンの祭り<3~4 月、第 1 の月アビブ(捕囚後の月ニサン) 14 日の夕暮れ：過越の祭り、15 日(14 日の夕暮れ)~21 日：種なしパンの祭り>「アビブの月を守り、あなたの神、主の過越を祝いなさい。アビブの月に、あなたの神、主が夜のうちにエジプトからあなたを導き出されたからである。」16:1「七日間、種なしパン、苦しみのパンを食べなさい。あなたはエジプトの地から急いで出て来たからである。」16:3

過越の祭りは、エジプトですべての長子が死ぬという最後の災いからイスラエルの民が救われ、エジプトを脱出することができたことを覚える祭りです。その時イスラエルは、神が命じられた通りに、子羊の血を二本の門柱と鴨居に塗りました。神はその血を見て、イスラエルの家を過ぎ越され、災いは起きませんでした。そのことを覚えるために、イスラエルでは過越の祭りの夕暮れに、傷のない 1 歳の雄の小羊を屠り、その血を門柱と鴨居に塗りました。後には、子羊の血は祭壇にふりかけるようになりました。また、イスラエルの民は急いでエジプトを脱出するために、種なしパンを食べました。そのことを覚えるために過越の祭りでは子羊の肉を種なしパンと苦菜を添えて食べ、7 日間は種なしパンを食べました。

過越の子羊は、やがて来られる救い主を預言していました。イエスは過越の祭りの時に、私たちの罪のために身代わりに神のさばきを十字架で受け、その血を流してくださいました。私たちが信仰によって、イエスを私の救い主と信じる時に、イエスの血によってすべての罪がきよめられ、神のさばきは過ぎ越されます。また新約においては、パン種は罪の象徴として語られています。パウロはキリストの救いにあずかった者は、古い罪の生き方から離れ、誠実と真実な生き方をするようにと勧めました。「新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。」1 コリント 5:7

2. 七週の祭り(五旬節-ペンテコステ)<5~6 月、第 3 の月(捕囚後の月シワン)>「あなたの神、主のために七週の祭りを行いなさい。あなたの神、主の祝福に応じて、進んで献げるささげ物をあなたの手によって豊かにささげなさい。」16:10

過越の祭りから 7 週間後に七週の祭りが行われました。過越の祭りから 50 日目にあたるので、後には五旬節(ギリシャ語でペンテコステ)と呼ばれるようになりました。この日は、小麦の初穂が神にささげられるので、「刈り入れの祭り」、「初穂の祭り」とも呼ばれています。この日、イスラエルの民はエジプトから脱出し、約束の地で穀物を収穫することができる恵みを神に感謝しました。また、後にはシナイ山で律法が与えられたことを覚える律法授与記念日としても祝いました。

新約においては、五旬節の日に約束の聖霊が弟子たちに下られ、教会が誕生する日となり、聖霊降臨日として祝うようになりました。その日はイエスの復活を祝うイースターから 50 日目となり、どちらも日曜日です。そこから、教会は日曜日に復活の主を礼拝するようになり、礼拝の日が土曜日から日曜日に変わり、日曜日は主の日と呼ばれるようになりました。

3. 仮庵の祭り<9~10 月、第 7 の月エタニム(捕囚後の月チスリ) 15~21 日>「あなたの打ち場とあなたの踏み場から取り入れが済んだとき、七日間、仮庵の祭りをしなければならない。」16:13

イスラエルの民は荒野の旅での 40 年間、仮庵(仮の住まい)である天幕生活をしました。その間、神はイスラエルを荒野で導き、マナを与えて養われました。そのことを覚えるためになつめやしの葉や木の枝で仮庵を造り、七日間過ごしました。捕囚期以降は、シロアムの池から運び上げられた水を神殿の祭壇に注ぐ水注ぎの儀式も行われるようになりました。それは乾期が終わり、先の雨(秋の雨)を神に願う意味がありました。ヨハネ 7:37 の祭りの終わりの大いなる日とは、仮庵の祭りの水注ぎの儀式が行われる日です。その時イエスはご自分のもとに来て飲みなさいと言われ、ご自分がいのちの水を与える救い主であることを表わされました。「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた『誰でも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。』」ヨハネ 7:37-38

4 2. 王についての規定「あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地に入って行って、それを占領し、そこに住むようになった時、あなたが『周りのすべての国々と同じように私も自分の上に王を立てたい』というなら、必ず、あなたの神、主が選ばれる者をあなたの上に王として立てなければならない。」申命記 17:14-15

申命記 17 章には、王についての規定が記されています。イスラエルは約束の地カナンに定住後、士師の時代を迎え、その後民はサムエルに「王を立ててください」と願い、神はその願いを聞き入れて、王制が敷かれました。17 章は将来の王制に対する規定をあらかじめ教えています。この規定ではまず王を選ぶときの条件が 2 つ記されています。

①「必ず、あなたの神、主が選ばれる者をあなたの上に王として立てなければならない。」この条件はやがて王と立てる際に、神がサウルやダビデを選び、サムエルが油注ぐことによって守られました。またイスラエルが南北に分裂する際に、北王国の王として神は預言者アヒヤを通してヤロブアムを選ばれました。(I 列王 11:35) ②「あなたの同胞の中から、あなたの上に王を立てなければならない。」国家が弱い時に外国の王による支配を望む傾向があった中で、イスラエルでは異邦人が王になってはいけないという規定です。これもイスラエルでは守られました。但し、後には外国の王の支配を受けることになりました。

次に、王に対する 3 つの戒めが規定されます。①「決して自分のために馬を増やしてはならない。」この規定は、王が馬を増やし、馬に頼り、馬を誇って、主を求めない過ちを犯すことがないためです。ソロモンはこの戒めを破り、馬を増やしました。(I 列王 4:26)「馬を増やすために民をエジプトに戻らせてはならない」ともあります。イザヤはこの戒めを破る者に対してこう言っています。「ああ、助けを求めてエジプトに下る者たち。彼らは馬に頼り、数が多いと行って戦車に、非常に強いと行って騎兵により頼み、イスラエルの聖なる方に目を向けず、主を求めない。」(イザヤ 31:1)

②「王は、自分のために多くの妻を持ち、心をそがれることがあってはならない。」当時の諸外国の王たちは王家と国を繁栄させるため、多くの妻を持ちました。しかし、イスラエルでは王は多くの妻を持つてはならないとの戒めが与えられました。ソロモンはこの戒めを破り、多くの外国の妻を持ち、妻たちの影響を受けて異教の神々を礼拝するようになりました。(I 列王 11:3) その結果、ソロモンの死後、国は分裂しました。③「自分のために銀や金を過剰に持つてはならない。」周りの外国の王にならい、ソロモンは金銀を非常に多く増やしました。(I 列王 10 章) その富で栄華を極めました。彼の心はやがて主から離れてしまいました。

次に、王は主のみことばに従うべきことが規定されました。「自分のために このみおしえを巻物に書き写し、自分の手もとに置き、一生の間これを読まなければならない。それは、王が自分の神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばと、これらの掟を守り行うことを学ぶためである。それは、王の心が自分の同胞の上に高ぶることのないようにするため、また命令から右にも左にも外れることがなく、彼とその子孫がイスラエルのうちで、長くその王国を治めることができるようにするためである。」イスラエルの歴史を見ると、王が主のことばに聞き従い、主に信頼する時、国は栄え、敵からも守られました。一方、主のみことばに従わない王が出ると、偶像礼拝がはびこり、道徳的にも腐敗し、敵の攻撃を受けて、滅びに向かっていきました。

この王の規定があることを、サムエルもよく知っていたことでしょう。しかし、民が I サムエル 8 章で、王を立ててほしいと願った時、その願いはサムエルにとって悪しきことと思われました。それはなぜでしょうか。それは自分の高齢と息子たちの不適格を指摘されたことに対する反発があったからではないかと考えられます。サムエル自身は主とイスラエルに十分仕えてきたからです。しかし、主はサムエルに対して「彼らの言うことを聞き、彼らのために王を立てよ」と命じられました。サムエルは王の権利を宣言した後、最初の王となるサウルに油を注ぎサウルが初代の王となりました。こうしてカナン占領後 400 年以上を経た BC1050 年頃にイスラエルは王国となりました。

4 3. 救い主の預言

①「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない。」申命記 18:15

旧約聖書は預言の書であり、その預言はやがて来られる救い主によって成就します。旧約の救い主の預言の成就としてイエス・キリストはこの世に来られ、十字架と復活によって救いを成し遂げてくださいました。私たちは、旧約聖書だけを読んでいると預言の意味が十分わかりません。しかし、預言の成就としての新約聖書を読むことによって、旧約の意味を理解することができます。そして、旧約の預言の成就として、救い主イエスが成し遂げられた救いのすばらしさを知ることができます。

申命記 18:15 のみことばもここだけ読むと、それが救い主イエスの預言であることがわかりません。旧約の預言は近い将来に起こる出来事、イエスの時代に起こる出来事、さらには終末に起こる出来事が重なって預言されていることが多くあります。このみことばは、まずモーセの死後、モーセと同じような主のことばを取り次ぐ預言者が立てられるとの約束です。ですから、イスラエルの民はいつの時代も主が立てられた預言者に聞き従わなければならないのです。

一方、新約聖書を見ると、このみことばはイエスについての預言であることがわかります。ヨハネ 5:46 でイエスは言われました。「もしもあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。」またペテロはイスラエルの民に、イエスがキリストであることを申命記 18:15 以降を引用して証ししました。「モーセはこう言いました。『あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。彼があなたがたに告げることすべてに聞き従わなければならない。…また、サムエルをはじめ、彼に続いて語った預言者たちもみな、今の時について告げ知らせました。』」ペテロがサムエルの名前を挙げたのは、サムエルが最初の預言者だからです。ステパノも申命記 18:15 を引用してイエスを証しています。(使徒 7:37) モーセをはじめすべての預言者が救い主を預言し、イエスにあってすべて成就したのです。

②「その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。」申命記 21:23

このみことばは、死刑を執行した後、さらし者として木につるした死体の取り扱いについての規定です。死刑囚は死後、木につるされることによって、彼が受けるべきさばきをその身に受けたことを人々の前に示しました。しかし、木にかけられた者は神にのろわれた者なので、日没前に木から降ろし埋葬しなければなりません。イエスが十字架で死んだ時、ユダヤ人たちは翌日の安息日に死体が十字架上に残らないようにイエスの脚を折って取り降ろしてほしいと願いました。それは翌日が安息日であることと、この申命記のみことばに基づく願いでした。

パウロはこのみことばがキリストの贖いを預言しており、キリストの十字架刑によって成就したことをガラテヤ 3:13 で教えています。「キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。『木にかけられた者はみな、のろわれている』と書いてあるからです。」律法ののろいについて申命記 27:26 にはこうあります。「このみおしえのことばを守ろうとせず、これを実行しない者はみな、のろわれる。」

パウロはこの言葉を引用してガラテヤ 3:10 でこう言います。「律法の行いによる人々はみな、のろいのもとにあります。『律法の書に書いてあるすべてのことを守り行わない者はみな、のろわれる』と書いてあるからです。」すべての人は律法を完全に行うことができず罪人となり、律法ののろいである罪に対する神のさばきを受けなければなりません。しかし、キリストが十字架で私たちが受けるべき律法ののろいを代わりに受けてくださったので、キリストを信じることによって、律法ののろいからの贖い出されるのです。「律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです。『義人は信仰によって生きる』からです。」ガラテヤ 3:11

4 5. 祝福とのろい

「私はいのちと死、祝福とのろいを前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、主を愛し、御声に聞き従い、主にすがりためである。」申命記 30. 19—20

聖書には、のろいについて多くのことが述べられています。のろいとはいったい何なのでしょう。旧約時代のイスラエルの周辺諸国では、のろいは一般的な現象で、のろいの言葉はそれが向けられる相手を破滅させる力があると考えられていました。だれでものろうことができましたが、占い師バラムのように特別な能力を持つ者に祝福やのろいをお願いすることも行われていました。

一方、聖書においては、神ののろいと神の祝福が正反対のものとして記されています。神の祝福がいのちであるのに対し、神ののろいは死なのです。この場合、いのちとは肉体的ないのちだけでなく、霊的いのちのことであり、神との生ける関係のことです。神との豊かな交わりの中で神の祝福にあずかることができるのです。それに対して、死とは肉体的な死だけでなく、霊的死のことであり、神との交わりが失われるのです。その結果、神が下さる祝福を受けることができないのです。神が創造された被造物は、本来良い、祝福に満ちたものでしたが、人が罪を犯した結果、神と人との関係がそこなわれ、被造物全体が神ののろいの対象となってしまいました。聖書は、のろいではなく祝福を、死ではなくいのちを選ぶように、そのために主を愛し、御声に聞き従い、主にすがるようにと教えています。

申命記 28 章には、律法を守る者に与えられる祝福と、律法を守らない者が受けるのろいが具体的に教えられています。28:1-14 は神の祝福の約束です。「もし、あなたが、あなたの神、主の御声に確かに聞き従い、私が今日あなたに命じる主のすべての命令を守り行うなら、あなたの神、主は、地のすべての国々の上にあなたを高く上げられる。あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従うので、次のすべての祝福があなたに臨み、あなたについて行く。」28:1-2 そしてその後、具体的な祝福が記されています。

28:15-68 は神ののろいの宣告です。「しかし、もしあなたの神、主の御声に聞き従わず、私が今日あなたに命じる、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたをとらえる。」28:15 そしてその後、具体的なのろいが記されています。3-6 節と 16-19 節を比べると、のろいは祝福の正反対であることが分かります。3 節「あなたは町にあっても祝福され、野にあっても祝福される。」16 節「あなたは町にあつてものろわれ、野にあつてものろわれる。」このように、神ののろいとは神の祝福を失う状態です。また、祝福は民が神に従う結果、神がともにおられる状態であり、反対にのろいは民が神に従わない結果、神がともにおられない状態です。

新約聖書にも祝福とのろいが教えられています。ガラテヤ 3:9 には、「ですから、信仰によって生きる人々が、信仰の人アブラハムとともに祝福を受けるのです。」とあり、3:13 ではなぜイエスを信じる者が、のろいから祝福に変えられるのかを教えてください。それは前回も見たように、キリストが私たちの代わりにのろわれた者となってくださったからです。「キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。『木にかけられた者はみな、のろわれている』と書いてあるからです。」

新約における祝福は、旧約の物質的な祝福よりも、霊的な祝福が強調されています。霊的な祝福は永遠に続く祝福です。パウロは I コリント 16:22-23 で「のろい」と恵みを対比させて語ります。キリストの十字架によって成し遂げられた救い神の恵みに対する応答が、のろいから解放され祝福を受ける方法だからです。「主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。主イエスの恵みがあなたがたとともにありますように。」

46. 旧約の戦いと新約の戦い「民はときを上げ、祭司たちは角笛を吹き鳴らした。角笛の音を聞いて民が大声でときを上げると、城壁は崩れ落ちた。そこで民はそれぞれ、まっすぐに攻め上り、この町を攻め取り、町のものをすべて、男も女も若者も年寄りも、また牛、羊、ろばも剣の刃で聖絶した。」ヨシュア 6:20-21

ヨシュア記は、ヨシュアに率いられたイスラエルの民が、約束の地カナンを占領していくことが記されています。その際、イスラエルはカナンの地に住む異邦人を聖絶するように神から命じられ、剣を手にとって戦います。私たちはすでに項目21の「第六戒:殺してはならない」で、第六戒の戒めは戦争、聖絶、神のさばきには当てはまらないことを見ました。また、項目40の「聖絶」で聖絶の意味とその理由について学びました。旧約時代には、罪に墮落した異邦人を、イスラエルを用いて神が直接さばくことが行われました。逆にイスラエルが罪を犯した時は、神は異邦人を用いてイスラエルをさばかれました。そして、その際は剣による戦いが行われました。

私たちは、旧約聖書を読む時、旧約時代は新約時代と違い、キリストによる救いが成就していないために、新約時代とは随分違う信仰の戦いがあったことを理解する必要があります。旧約の民は、主への信仰と従順のゆえに、強く雄々しく敵と戦うことがあったのです。一方で、旧約聖書の戦いを新約時代に生きる私たちにそのまま適用することは間違っています。

新約時代の信仰の戦いは、肉の戦いではなく霊的戦いです。「悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に付けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」エペソ 6:11-12 そして、神のすべての武具として、真理の帯、正義の胸当て、平和の福音、信仰の盾、救いのかぶと、御霊の剣である神のことば、祈りが教えられています。

キリストが救いを完成させ、全世界に福音が伝えられ、多くの人が救われ、教会が建てられていくのを、悪魔は何とかして妨げようとしてきます。その悪魔の策略に立ち向かうための霊的戦いを新約時代の教会とクリスチャンは行うのです。この霊的戦いでは実際の武器を手を取ることはありません。「私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。」I コリント 10:4 悪魔の要塞を打ち壊すための私たちの霊的武器は、みことばと祈りと信仰です。

イエスが捕らえられた時、ペテロが剣を取って戦おうとした時に、マタイ 26:52 で「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます」とイエスは言われました。ペテロは旧約の戦いをしようとしたのですが、イエスはそれをやめさせました。ルカ 22:36-38 でイエスが「剣のない者は上着を売って剣を買いなさい」と言われ、弟子たちが「主よ。ご覧ください。ここに剣が二本あります」と言うと、イエスは「それで十分」と答えられました。これはどういう意味でしょうか。ペテロはこの二本の剣の一本を用いて戦おうとし、イエスは「剣をもとに収めなさい」と言われました。

ですから、イエスがルカ 22:36 で言われた剣とは、御霊の剣である神のことばのことであり、それを弟子たちは実際の剣と誤解したのです。「それで十分」とはイエスが二本の剣で戦えと言われたのではなく、弟子たちがイエスのことばを誤解したため、会話を終了する意味で言われたのです。

ローマ 13:4 には「彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います」とあります。ですから、新約聖書は国家が社会の悪を抑制するための最小限度の武器を持つことを肯定しています。しかし国や為政者が、神が国家にゆだねている範囲を超えて、間違った目的のために、必要以上の武器を用いようとすると、国民を迫害したり、自国の利益のために他国と戦争を起こすことになります。これは神が願っておられることではありません。間違った武器の使用は「剣を取る者はみな剣で滅びます」という結果を招きます。教会とクリスチャンにとっての信仰の戦いのための剣は、御霊の剣である神のことばであることを覚え、みことばをしつかりと身に付けて、悪魔の策略に打ち勝ちましょう。

47. 逃れの町「イスラエルの子らに告げよ。『わたしがモーセを通してあなたがたに告げておいた、逃れの町を定めよ。意図せずに誤って人を打ち殺してしまった殺人者が、そこに逃げ込むためである。血の復讐をする者から逃れる場所とせよ。』」ヨシュア 20:2-3

旧約聖書は、故意の殺人の罪に対しては死刑を定めていますが、意図せずに誤って人を殺した場合、即ち過失致死を犯した人のためには逃れる場所を設けました。(出エジプト 21:12-14)それは、際限ない個人的復讐を防ぐためであり、神の義と神の愛の調和を表わす規定でした。ヨシュアは、ヨルダン川西側に3つ、東側に3つ、合わせて6つの逃れの町を定めました。この6つの町はレビ人の町です。過失殺人者は逃れの町に逃れて、正当な裁判を受けることができました。

また大祭司が死ねば、彼は自分の町に帰ることができました。それは、人のいのちを奪うことは、どのような理由であれ、別のいのちによって贖われる必要があるからです。過失殺人者の罪は、彼をさばく大祭司の死によって贖われ、その結果、自由の身となったのです。ですから逃れの町は、来るべきキリストの贖いを指し示していました。私たちのために死なれたキリストのもとに逃れる時、私たちのすべての罪が赦され、キリストにある自由を得るのです。

48. レビ人の町「イスラエルの子らは主の命により、自分たちの相続地から次の町々とその放牧地をレビに与えた。」ヨシュア 21:3

ヨシュアは各部族の土地に全部で48のレビ人の町とその放牧地を定めました。そのうちの6つは逃れの町を兼ねていました。シメオンとレビは、妹ディナが異邦人に辱められたため、その町の男たちをだまして殺しました。それに対してヤコブは、シメオンとレビはイスラエルの中に散らすというのろいを宣言しました。(創世 49:5-7)シメオン族はユダ族のなかに相続地を持ち、ユダ族の中に散らされました。一方レビ族は、モーセのことばに従い、金の子牛を拝む者たちを殺した結果、神の祝福を得、神に仕える祭司や幕屋の奉仕者とされました。

レビ人が各部族に散らされたのは、レビ人にとってもイスラエルにとっても祝福となりました。なぜなら、レビ人が各部族に散らばることによって、全部族に律法を教え、神への恐れと敬虔を呼び覚まし、神が正しく礼拝されることが可能となったのです。またレビ人にとっては、各部族の土地に散らばっても、レビ人の町で一緒に生活することによって、彼ら自身が律法を中心に生活することができ、霊的墮落の危険から守られました。

49. ヨルダン川東岸の地「ルベン族、ガド族、マナセの半部族は、カナンのあるシロでイスラエルの子らと別れ、モーセを通して示された主の命により、彼らが得た自分の所有地、すなわちギルアデの地へ帰って行った。」ヨシュア 22:9

ルベン族、ガド族、マナセの半部族は、多くの家畜を持っていたことを理由に、ヨルダン川東岸を相続地としたいとモーセに願いました。(民数 32 章)モーセは、彼らが他の部族と一緒にカナンの地の戦いに行くなら、カナンの地を征服した後、ヨルダン川東岸を相続地として与えると告げました。彼らはモーセが告げた通り、カナンの地に戦いに行き、カナンの地を占領後、ヨルダン川東岸のギルアデの地に戻って行きました。彼らは帰る途中、ヨルダン川のそばに自分たちが主の民であることをイスラエルの子孫に証しするために祭壇を築きました。この祭壇は、カナンの地に住むイスラエル人が、ヨルダン川東岸の民は主の民ではないと言わないための証拠となりました。

その後、ルベン族、ガド族、マナセの半部族はどうなったのでしょうか。Ⅰ歴代 5:25-26 にはこうあります。「ところが、彼らはその父祖の神の信頼を裏切り、神が彼らの前から根絶やしにされたその地の民の神々を慕って淫行した。そこで、イスラエルの神は、アッシリアの王プルの霊、すなわちアッシリアの王ティグラト・ピレセルの霊を奮い立たせられた。それで彼は、ルベン人とガド人およびマナセの半部族を捕らえ移し、彼らをハラフ、ハボル、ハラ、ゴザンの川に連れて行った。今日もそのままである。」ヨルダン川東岸はその後、異邦人の地となりました。ヨルダン川東岸の地は妥協の産物であり、本来は彼らもカナンの地を相続すべきだったのです。

50. さばきつかさ「そのとき、主はさばきつかさを起こして、略奪する者の手から彼らを救われた。…しかし、さばきつかさが死ぬと、彼らは元に戻って先祖たちよりもいっそう墮落し、他の神々に従い、それらに仕え、それらを拝んだ。彼らはその行いや、頑なな生き方から離れなかった。そのため、主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がった。」士師記 2:16、19、20

士師記は、ヨシュアの死後からサムエル登場前までの期間のイスラエルの歴史を記しています。士師とは、イスラエルを治め、敵から救い出したさばきつかさのことで、さばきつかさは救助者とも呼ばれます。神はイスラエルを救うために12人のさばきつかさを立てられました。イスラエル各部族は、ヨシュアによって割り当てられた相続地を得るために戦いを続けますが、先住する異邦人を完全に追い出すことができませんでした。その結果、イスラエル人は異教の民と交わり、偶像礼拝を行うようになりました。すると神は、異邦人を用いてイスラエルをさばき、異邦人の支配を受けます。イスラエルはその苦しみの中で、主に助けを求めます。すると主は、さばきつかさを起こし、イスラエルを異邦人から救われます。この繰り返しが士師記に記されています。

士師記に繰り返されるパターンは次のとおりです。

- ①イスラエルの罪：イスラエル人はバアル礼拝を行う。
- ②神のさばき：神は異邦人を用いてイスラエルをさばかれる。
- ③イスラエルの悔い改め：イスラエル人は苦しみの中で主に助けを求める。
- ④さばきつかさによる救い：神は民の声を聞き、さばきつかさを送って敵からイスラエルを救う。そして、このサイクルが繰り返される中で、イスラエルはますます墮落していき、ついには内戦が起きました。この墮落がやがて王制が築かれるきっかけとなりました。

神が立てられたさばきつかさは全部で12人です。彼らの中には、サムソンのように道徳的に墮落している人もいました。それでも、神が彼らを用いられたのは、彼らは弱さを持ちながらも、主への信仰があったからです。ヘブル 11:32 には、信仰によって戦いの勇士となった人としてサムソンを挙げています。神は、さばきつかさを通してご自分の力を表わし、敵からイスラエルを救われました。また士師記には、敵と戦ったことが記されていないさばきつかさも5人います。彼らは敵に支配されない比較的平和で繁栄した時代のさばきつかさでした。では12人のさばきつかさを見てみましょう。

- ①オテニエル 3:7—11 40年 敵はアラムの王クシャン・リシュアタイム
- ②エフデ 3:12—30 80年 左利きの勇者 敵はモアブの王エグロン
- ③シャムガル 3:31 不明 敵はペリシテ人 牛を追う棒でペリシテ人600人を殺す。
- ④デボラ 4:1—5:31 40年 女預言者 敵はカナンの王ヤビン バラクとともに敵を倒す。
- ⑤ギデオン 6:1—8:35 40年 敵はミディアン人 300人で敵を倒す。
- ⑥トラ 10:1—2 23年 平和と繁栄の時代
- ⑦ヤイル 10:3—5 22年 平和と繁栄の時代
- ⑧エフタ 11:1—12:7 6年 敵はアンモン人 敵に勝って戻る時、最初に出て来た者を全焼のいけにえとして献げると誓願し、一人娘が出て来た。娘は殺されたか、生涯幕屋で仕える者となったかの2つの解釈がある。
- ⑨イブツアン 12:8—10 7年平和と繁栄の時代
- ⑩エロン 12:11—12 10年平和と繁栄の時代
- ⑩アブドン 12:13—15 8年平和と繁栄の時代
- ⑩サムソン 13:1—16:31 20年生まれながらのナジル人 道徳的には墮落した人物であったが、怪力の持ち主 敵はペリシテ人最後に神に祈り、敵とともに死んだ。

5 1. ルツとボアズ「その方は私たちの近親の者で、しかも、買い戻しの権利のある親類(ゴエール)の一人です。」ルツ 2:20

ルツ記を理解するためには、幾つかの重要な律法を知る必要があります。一つは土地の買い戻しの規定で、この規定には「贖い」の思想があります。「もしあなたの兄弟が落ちぶれて、その所有地を売った時は買い戻しの権利のある近親者(ゴエール)が来て、兄弟の売ったものを買戻さ(ガーアル)なければならない。」レビ 25 25 ヘブル語の「贖う」はガーアルで、「買戻す」とも訳されます。そしてゴエールはガーアルの分詞形で「贖う者」、土地の買い戻しの場合は「買戻しの権利のある親類」と訳されます。ボアズはルツとナオミにとって贖う者(ゴエール)でした。

もう一つの規定は、申命記 25:5-6 にあるレビラート婚と呼ばれる規定です。レビルはラテン語で夫の兄弟を意味します。「兄弟と一緒に住んでいて、そのうちの一人が死に、彼に息子がいない場合、死んだ者の妻は家族以外の他の男に嫁いではならない。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。そして彼女が産む最初の男子が、死んだ兄弟の名を継ぎ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。」

またルツがモアブの女であったことも重要な要素です。イスラエルとモアブの関係は二面性がありました。モアブはロトの姉娘の子の子孫です。申命記 2:9 では「モアブに敵対してはならない」とあります。その一方で申命記 23:3 では、モアブ人は十代目の子孫さえも主の集会に加わることができないとあります。それは、モアブの王バラクがバラムを雇ってイスラエルをのろおうとしたからです。ルツの時代は、イスラエルとモアブは行き来ができ、互いに結婚もできたことが分かります。その一方で、ルツが何度も「モアブの女」と呼ばれていることは、モアブに対するイスラエル人の違和感が強調されています。

ルツは姑のナオミと一緒にベツレヘムに行くことを決心する時、1:16 で主なる神への信仰を告白します。「お母様が行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」ルツは約十年間、ナオミの家族とともに住む間に、イスラエルへの信仰を持ちました。そして、夫に先立たれても、ナオミとともにイスラエルに行き、イスラエルの神、主を信じ、主の民として生きることを決心したのです。

ベツレヘムに着いたルツは、さっそく落ち穂拾いを始めました。レビ 19:9-10 には、収穫後の落ち穂は、貧しい人や寄留者のために残しておかなければならないと規定されているので、貧しい者は、自由に拾ってよかったのです。そして、ルツが行った畑は「はからずもエリメレクの一族に属するボアズの畑であった」のです。ボアズはルツに親切にし、「主があなたのしたことにより報いてくださるよう。あなたがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように」と言います。この言葉にもボアズの信仰を見ることができます。

ルツはナオミの勧めによって、ボアズがいる打ち場に行き、ボアズが寝るとボアズの足もとにこっそり入ります。ボアズが驚いて目を覚ますと、ルツは「あなたの覆いを、あなたのはしための上に広げてください。あなたは買い戻しの権利のある親類(ゴエール)です」と言いました。ボアズは自分は第2ゴエールであり、自分より先に買い戻しの権利を持つ第1ゴエールがいるとルツに伝え、もし第1ゴエールが買い戻さないなら、第2ゴエールである私が買い戻しますと約束しました。

翌朝、ボアズは第1ゴエールに、「ナオミがエリメレクの畑を売ることになっているので、あなたが買い戻すつもりなら、買い戻してください。しかし、あなたが買い戻さないなら、私が買い戻します」と言います。第1ゴエールは買い戻すと答えましたが、「畑を買い戻す場合は、死んだ人の名を相続地に存続させるために、モアブの女ルツも引き受けなければなりません」とボアズが伝えました。それを聞くと第1ゴエールは、「私に代わって、あなたが買い戻してください。私は買い戻すことはできません。」と答え、その結果、ボアズが畑を買い戻し、ルツを妻として迎えました。ボアズは、異邦人を救うイエス・キリストの型であると言われます。そして、ルツとボアズからオベデが生まれ、オベデからエッサイが生まれ、エッサイからダビデが生まれ、ダビデの子孫からイエスが生まれたのです。

52. サムエルとサウル「サムエルは油の壺を取ってサウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った。

「主が、ご自分のゆずりの地と民を治める君主とするため、あなたに油を注がれたのではありませんか。」Ⅰサムエル 10:1

士師記の時代が終わると、神はサムエルをさばきつかさとして立てられました。サムエルは最後の士師、最初の預言者、そして祭司として主に仕え、一生の間イスラエルをさばきました。(7:15)サムエルが年老いた時、二人の息子をさばきつかさとして任命しますが、彼らは不正を行い、さばきを曲げていました。そこで民はイスラエルに王を与えてくださいとサムエルに求めました。サムエルは民の求めを良く思いませんでした。神に祈ると、神は民の願いを聞き、王を立てるようにと言われました。そしてサムエルは、神が立てられたサウルに油を注ぎ、サウルがイスラエルの最初の王となりました。

しかし、サウルは2年間しか王として治めることができませんでした。その理由はサウルが神に従わなかったからです。まずサウルが油注ぎを受けた時、サムエルから「先にギルガルに行き、私もささげ物といけにえを献げに行くから、7日間待ちなさい」と告げられました。(10:8)サウルはギルガルでサウルを待ちましたが、その間にペリシテ人が攻めて来そうになりました。そこで味方を勇気づけるために、7日間待った後、サウル自身がいけにえをささげてしまいました。しかし、サウルがいけにえをささげた直後、サムエルが来たのです。サムエルは、サウルが主の命令を守らなかったため、あなたの王国は立たないと宣言しました。(13:14)

もう一つの出来事は、アマレク人を聖絶せよという神の命令に従わず、良いものを残し、アマレクの王も生かしておいたことです。サムエルは「あなたが主のことばを退けたので、主もあなたを王位から退けた」と言って、アマレクの王を殺し、2度とサウルに会いませんでした。サウルは、主の従順を表わす試験に合格できませんでした。私たちも、主に従うかどうかの試験を人生の中で受けています。私たちは主のことばを退けるのではなく、主のことばに従う者となりましょう。

神はサムエルに、ダビデに油を注ぎ、次の王にするように命じ、サムエルはダビデに油を注ぎました。その時以来、主の霊がダビデの上に激しく下りました。(16:13)しかし、ダビデが王になるためには、サウルからいのちを狙われる試練を経なければなりません。ダビデに油注ぎがなされた後、「主の霊はサウルを離れ去り、主からの、わざわいの霊が彼をおびえさせ」ました。(16:14)わざわいの霊は悪霊であり、主はサウルから聖霊を去らせ、代わって悪霊を送られたのです。16:15, 16のサウルに臨む神の霊も、神が遣わされた悪霊のことです。悪霊がサウルに臨むとサウルはおびえました。家来たちは堅琴の上手なダビデを連れて来て、悪霊がサウルに臨む時、ダビデに堅琴を弾かせました。すると悪霊は離れ去りました。これは3千年前の音楽療法とされています。

ダビデはその後、戦いで数々の勝利を治めました。サウルは、「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った」という歌を聞いてから、ダビデをねたみ、ダビデのいのちを狙うようになりました。悪霊がサウルに下った時、サウルはダビデを槍で突き刺そうとしますが、ダビデは身をかわしてサムエルの所に逃げました。サウルはダビデがサムエルの所にいると知ると、使者たちを遣わしました。使者たちが預言者の一団のもとに来た時、使者たちの上に神の霊(聖霊)が臨み、彼らも預言しました。こんなことが3度あった後、サウル自身もやって来ました。するとサウルにも神の霊(聖霊)が臨み預言したのです。旧約時代は、新約時代と違い、神のみこころによって、ある人に聖霊が下ります。この時もサウルに聖霊が下ることによって、ダビデのいのちが守られました。(19章)

サウルにはもう一つ不思議な出来事があります。それは28章でサウルが霊媒をする女の所に行く出来事です。サウルは変装して女のところに行き、霊媒によってサムエルを呼び出してほしいと頼みます。女はサムエルを見、自分のもとに来たのがサウル王であると知り驚きます。そして、サムエルはサウルに明日死ぬことを告げました。この出来事をどのように理解すればよいのでしょうか。私たちはサムエルが現れたのが、霊媒術によらず、神の超自然的な介入によって起きたと理解することができます。イエスの変貌の時にもモーセとエリアが現われたので、神が望まれれば死者をこの世に現わすこともできるのです。また女自身も驚いているので、これは神のみわざだったのです。

53. ダビデとサウル「ダビデは彼に言った。『主に油注がれた方に手を下して殺すのを恐れなかったとは、どうしたことか。』」Ⅱサムエル 1:14

ダビデはサウルからいのちを狙われ、逃亡生活を続けました。そのサウルがペリシテ人との戦いで戦死しました。サウルの死からダビデの信仰を見てみましょう。まず、サウルの死についてです。Ⅰサムエル 31:4-5 ではこうあります。「サウルは道具持ちに言った。『おまえの剣を抜いて、私を殺してくれ。さもないと、あの無割札の者たちがやって来て、私を刺し殺し、私をなぶりものにするだろう。』しかし、道具持ちは非常に恐れて、到底その気になれなかった。それでサウルは剣を取り、その上に倒れ込んだ。道具持ちは、サウルが死んだのを見ると、自分も剣の上に身を伏せて、サウルとともに死んだ。」

一方、Ⅱサムエル 1:9-10 ではアマレク人がダビデのもとに来て、サウルに頼まれてサウルを殺したと言いました。『さあ、近寄って、私を殺してくれ。激しいけいれんが起きているが、息はまだ十分あるから』と言いました。私は近寄って、あの方を殺しました。もう倒れて生き延びることができないとわかったからです。」そしてアマレク人は、サウルの王冠と腕輪をダビデに渡しました。この二つの説明の違いをどのように理解したらよいのでしょうか。一つは、アマレク人はダビデからほうびを得るためにうそをついたという理解です。もう一つは、アマレク人の証言は本当であり、サウルは自害に失敗し息が残っていたので、アマレク人がサウルの求めに応じて殺したという理解です。

聖書はどちらの説明が正しいかは語らず、むしろダビデの反応を中心に語ります。ダビデはアマレク人から、多くのイスラエル人が死に、サウルもヨナタンも死んだことを聞くと、衣を引き裂いて悼み悲しみ、夕方まで断食しました。そして「私は主に油注がれた方を殺した」と証言したアマレク人を殺しました。そしてサウルとヨナタンのために哀歌を歌いました。この出来事から、油注がれた方であるサウルに対するダビデの特別な思いを改めて覚えることができます。

ダビデは逃亡中、2回サウルを殺すチャンスがありました。1回目はⅠサムエル 24 章のエン・ゲディの荒野での出来事です。ダビデが隠れていた洞窟にサウルが用をたすために入ってきました。ダビデの部下はサウルを殺そうと言いますが、ダビデはサウルの上着の裾を切り取っただけで部下にこう言います。「私が主に逆らって、主に油注がれた方、私の君主に対して、そのようなことをして手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。彼は主に油注がれた方なのだから。」

2回目は、Ⅰサムエル 26 章のジブの荒野での出来事です。ダビデは部下にこう言いました。「私が主に逆らって、主に油注がれた方に手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。さあ、今は、枕元にある槍と水差しを取って、ここから出て行こう。」そして、サウルを殺さず、槍と水差しだけを取ったのでした。ダビデは、サウルは自分を殺そうとしているが、主に油注がれた方であり、神が選んだ王であると理解しました。ですから、主に油注がれた王を殺すことは神に逆らうことだったので、自分から手を下さず、神の御手にゆだねたのです。ダビデはサウルが主から捨てられたことを知りつつ、神が選んだ王であるゆえにサウルへの恐れを持ち続けたのです。

一方、神はサウルからいのちを狙われることで、ダビデの信仰を試されました。人間的には部下が言うようにサウルを殺せば、ダビデは逃げる必要がなくなり、どんなに安心できるでしょうか。しかし、油注がれたサウルを殺すことは、神に敵対することになります。そうすればダビデもサウルと同じ神に捨てられる道を歩むことになるでしょう。ダビデ自身も次の王となるためにサムエルからすでに油を注がれていました。(Ⅰサムエル 16:13)ダビデは自らが油注がれることにより、神に選ばれることの厳粛さと神への恐れを改めて覚えたことでしょう。ダビデは神からの試験に合格し、主に油注がれたサウルに対する敬意を最後まで貫き通したのです。

このダビデの信仰は、神の救いの計画につながっていきました。それは「油注がれた方」「メシア」が後に「救い主」の意味につながるからです。ダビデはサウルからいのちを狙われる出来事を通して、「油注がれた方」を尊ぶという神のみこころに、すでに触れていたのです。ダビデの子孫として生まれたイエスが「油注がれた方」、ヘブル語で「メシア」、ギリシャ語で「キリスト」です。私たちはイエスをキリスト、救い主と信じ、イエスを礼拝します。

54. ダビデの罪と悔い改めによる赦し 「ダビデはナタンに言った。『わたしは主の前に罪ある者です。』ナタンはダビデに言った。『主もあなたの罪を取り去ってくださった。あなたは死なない。』」Ⅱサムエル 12:13

サウルの後に王となったダビデは、順調な滑り出しをします。7章では、ダビデの世継ぎの子が永遠の王国を確立させるといふ、救い主の約束を神からいただきました。戦いにも勝利し、ダビデ王国は拡大していきます。そのような中で心に隙ができたダビデは、姦淫と殺人という大変な罪を犯してしまいました。家来たちが戦いに行く間エルサレムに残ったダビデは、ヒッタイト人ウリヤの妻バテ・シェバを召し入れて彼女と寝ました。その結果、彼女は妊娠したのです。ダビデは自分の罪を隠すために、ウリヤを戦場から呼び寄せ、家に帰って休むようにと言います。しかし、ウリヤは家に帰らず、王宮の門の辺りで家臣たちと一緒に寝ました。

困ったダビデは、ウリヤが戦いの前線に敵に打たれて死ぬようにせよとの手紙を將軍ヨアブ宛に書き、その手紙を持たせてウリヤを戦場に戻しました。その結果、ウリヤは戦死してしまいます。夫の死を知ったバテ・シェバは夫の死を悲しみましたが、喪が明けると、ダビデは彼女を妻として迎え入れ、子を産みました。これですべて一件落着とダビデは思ったことでしょう。当時の王は絶対君主であり、自分の思うままに何でもできたのです。しかし、イスラエルではそうではありませんでした。神はダビデの行為をすべて見ておられました。「しかし、ダビデが行ったことは主のみこころを損なった。」11:27

主はナタンを遣わし、「どうして、あなたは主のことばを蔑み、わたしの目に悪であることを行っただのか」とダビデの罪を指摘し、神のさばきを告げました。それを聞いたダビデは、「私は主の前に罪ある者です」と言って、自分の罪を告白しました。ナタンはダビデに「主も、あなたの罪を取り去ってくださった。あなたは死なない」と言って、罪の赦しを宣言しました。旧約においては姦淫も殺人も、動物のいけにえをささげて罪を贖うことはできず、死罪でした。しかし、この時は心からの罪の悔い改めによって、ダビデは罪の赦しをいただくことができました。このことは新約における、罪の悔い改めと主イエスへの信仰によって与えられる罪の赦しにつながっています。

ダビデは詩篇 51:7 で、「ヒソプで私の罪を除いてください。そうすれば私はきよくなります。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなります」と言って、ナタンから罪を指摘させた時の思いを語っています。ヒソプは、過越のいけにえの血を鴨居と門柱に塗り付けるために用いられました。またイエスは、ローマ兵からヒソプの枝に付けられた酸いぶどう酒を差し出され、それを受けて息を引き取られました。ダビデが自分の罪を告白して、罪の赦しをいただいたのは、やがて十字架で流される主イエスの血によったのです。「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」

「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての不義からきよめてくださいます。」Ⅰヨハネ 1:7,9

確かにダビデの罪は神によって完全に赦されました。しかし、ダビデは自分が犯した罪の結果を刈り取らなければならませんでした。ナタンはダビデに罪の赦しを宣言した後、こう言いました。「しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は、必ず死ぬ。」12:14 そのことば通り、子どもは死にました。そして、それでことは終わらず、その後もダビデ家は混乱していきました。ダビデの子のアムノンが、同じくダビデの子アブサロムの妹タマルを犯します。2年後、アブサロムはアムノンを殺し、復讐しました。3年間逃亡したアブサロムは再びエルサレムに戻り、4年後にアブサロムが謀反を起こし、ダビデと戦うことになりました。そして、アブサロムが戦死するのです。

「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。」ガラテヤ 6:7 神は罪を悔い改めて、イエスを信じる者の罪を赦してください。しかし私たちは、この世にあっては罪の結果を刈り取らなければならないことも覚えなければなりません。罪を軽く見てはいけません。ダビデの経験は、神が下さる罪の赦しの幸いとともに、罪の結果を刈り取る厳しさも教えています。「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」と祈り続けましょう。

55. サウルとその一族の罪 「ダビデの時代に、3年間引き続いて飢饉が起こった。それで、ダビデは主の御顔を求めた。主は言われた。『サウルとその一族に、血の責任がある。彼がギブオン人たちを殺戮したからだ。』」Ⅱサムエル 21:1

ダビデと息子アブシャロムとの戦いは、アブシャロムの死によって終わりました。ところが次にシェバがダビデに逆らい、イスラエルの人々はシェバに従うようになり、ダビデ王国には混乱が続きました。結局、ダビデの將軍ヨアブが、アブシャロムの軍団長であったアマサを殺し、シェバは知恵ある女によって殺されて、ようやく国は収まりました。ダビデの罪の影響は、長く続いたのです。21章はさらにダビデの時代に3年間の飢饉が続いたことが記されています。ダビデが主に祈ると、原因はサウルとその一族がギブオン人に対して犯した罪に対する正しい処理がなされていないことでした。

ダビデはギブオン人を呼び出し、彼らから話を聞きました。ヨシュア9章を見ると、ギブオン人とは、ヨシュアが率いるイスラエル人がカナンを占領する際に、滅ぼされないように、古びた服を着て自分たちは遠い国から来た者で、イスラエルと盟約を結びたいと申し出た人たちです。その時、ヨシュアは主の指示を求めず、彼らのことばを信じ盟約を結びました。ところが、ギブオン人は近くに住む人たちだと後でわかりました。しかし、ヨシュアは主にかけて誓ったギブオン人との盟約は有効であるとして、彼らを殺さず、薪を割る者、水をくむ者としました。その盟約があるにも関わらず、サウルはギブオン人を殺したのです。

ダビデはギブオン人にどのようにして償うことができるかと尋ねました。すると、「私たちとサウルおよびその一族との間の問題は、銀や金のことではありません」と言いました。その意味は、過失の罪で人を殺した場合は、償い金をもっていのちの代価を支払うことができるが、この件は故意の殺人なので、いのちにはいのちをもって償わなければならないということです。(出エ21:12、30)さらに「私たちを絶ち滅ぼそうとした者、私たちを根絶やしにしてイスラエルの領土のどこにもいさせないように企んだ者、その者の息子の7人を私たちに引き渡してください。…主のために彼らをさらし者にします。」と言いました。ダビデは「引き渡そう」と答えました。

ダビデはヨナタンとの誓いを守り、ヨナタンの息子メフィボシェは引き渡さず、サウルの息子2人とサウルの娘の息子5人を引き渡し、7人は殺され、さらし者にされました。サウルの息子の母リツパは遺体が獣から守られるように、夜昼と番をし、そのことがダビデに知らされました。ダビデは犠牲となった者の悲しみを受け止め、サウル家への敬意を表すために、ヤベシュ・ギルアデに葬られていたサウルとヨナタンの骨を、ベニヤミンの地のサウルの父の墓に葬りました。「その後、神はこの国の祈りに心を動かされ」飢饉は終わったのです。

この出来事から、2つのことを覚えたいと思います。一つは、イスラエルにおいては神の前に誓った誓約は、時代が変わっても守らなければならないということです。サウルはギブオン人との盟約を無視して、ギブオン人を絶ち滅ぼそうとしました。これはギブオン人に対する罪だけでなく、神に対する罪だったのです。この罪の結果、神はイスラエルに3年の飢饉を送られたのです。一方ダビデはヨナタンとの誓いを守り、彼の息子メフィボシェを救いました。

二つ目は、罪は正しく処理されなければならないということです。旧約においては「いのちにはいのち」をもって償わなければならない律法に従って、サウルの息子と孫7人がギブオン人の手で殺されました。新約時代では、このような形での償いは行われませんが、個人であっても国であっても、臭いものに蓋をし、罪を正しく処理しなければ、神の祝福を受けることができません。私たちは神の前に罪を悔い改め、キリストの赦しをいただき、人に対して犯した罪は赦しを求めることが大切です。なお、なぜサウルの息子や孫が犠牲になったのかについては2つの理解があります。一つはギブオン人の罪はサウル個人ではなくサウル一族が行ったことなので、息子や孫も関わっていたという理解です。もう一つは、彼らは直接関わっていなかったが、神の名前がこのことで汚され続けることがないように、例外として父の罪を子や孫が負ったということです。(申命24:16)

56. 人口調査の罪「さて、再び主の怒りがイスラエルに対して燃え上がり、ダビデをそそのかして、彼らに向かわせた。『さあ、イスラエルとユダの人口を数えよ。』」Ⅱサムエル 24:1

第Ⅱサムエル 24 章の出来事は、第Ⅰ歴代誌 21 章にも記されています。ダビデは人口調査を行うことによって罪を犯しました。ダビデを誘惑したのは主ではなく、主によって遣わされたサタンです。(Ⅰ歴 21:1)人口調査それ自体は罪ではありませんが、民数記での 2 回人口調査は神の命令によって行われています。しかし、ダビデの人口調査は神の命令ではなく、ダビデの命令によって行われました。ダビデは神のようにふるまう高慢の罪を犯したのです。さらにダビデは、主に頼り頼む代わりに兵の数に頼り頼む不信仰な罪を犯しました。ダビデの命令を受けた将軍ヨアブは、ダビデの命令が主のみここに逆らうことであると悟り、「王はなぜこのようなことを望まれるのですか」と問いますが、ダビデには部下の声に謙遜に耳を傾けることをせず、むしろヨアブや軍の高官たちに激しく命じました。

人口調査の結果の兵の数は、Ⅱサムエルではイスラエルが 80 万人、ユダが 50 万人ですが、Ⅰ歴代誌ではイスラエルが 110 万人、ユダが 47 万人です。ユダの数はおよそ 50 万で合っていますが、イスラエルの数はⅠ歴代では、ダビデの周りに仕える部下約 30 万人を含んでいます。(Ⅰ歴 27:1-15)報告を受けた後、ダビデは良心のとがめを覚え、主に対して罪を告白します。「私はこのようなことをして、大きな罪を犯しました。主よ。今このしもべの咎を取り去ってください。私は本当に愚かなことをしました。」(24:10)

それに対して主は預言者ガドを遣わして、3 つの懲らしめの中から一つを選んで受けよと言われました。主は愛する者を懲らしめられるのです。(ヘブル 12:6)その三つとは、7 年間の飢饉、3 か月の敵からの逃亡、3 日間の疫病です。7 年間の飢饉はⅠ歴代では 3 年間となっており、70 人訳(ヘブル語聖書のギリシャ語訳)も 3 年間となっているので、原典では 3 年間の可能性が高いとも考えられますが、新改訳はヘブル語写本どおりに 7 年間と訳しています。

さて、ダビデは「それは私には非常に辛いことです。主の手に陥らせてください。主のあわれみは深いからです。私が人の手には陥らないようにしてください。」と願いました。(24:14)主は 3 日間の疫病を下され、7 万人の民が死にました。主は、エルサレムを打とうとする御使いに「もう、十分だ。手を引け」を言われます。一方、ダビデは「ご覧ください。この私に罪があるのです。私が悪いことをしたのです。この羊の群れがいったい何をしたでしょうか。どうか、あなたの御手が私と私の父の家に下りますように」と言いました。(24:17)国を治める王が罪を犯す時、その悪影響は国民に及ぶのです。

主は預言者ガドを通して、エブス人アラウナの打ち場に主のために祭壇を築くようにと命じます。ダビデは打ち場を買って祭壇を築き、いけにえをささげました。そして、「主がこの国のための祈りに心を動かされたので、イスラエルへの主の罰は終わった」のです。(24:25)Ⅱサムエルではエブス人アラウナですが、Ⅰ歴代ではエブス人オルナンです。名前は違いますが同一人物です。またⅡサムエルではダビデは銀 50 シェケルで打ち場と牛を買いますが、Ⅰ歴代では地所の代金として金 600 シェケルを支払います。Ⅰ歴代は最終的に支払われた全地所代を記しています。

そして、ダビデがエブス人アラウナから買ったエルサレムの土地が、神殿の場所となるのです。ダビデは「これこそ神である主の宮だ。これこそイスラエルの全焼のささげ物の祭壇だ」と言って、ソロモンがここに神殿を建てるための準備を始めました。(Ⅰ歴 22:1)そして、ソロモンがそこに神殿を建てました。「ソロモンはエルサレムのモリヤの山で主の宮の建築を始めた。そこは主が父ダビデにご自分を現わされ、ダビデが準備していた場所で、エブス人オルナンの打ち場があったところである。」(Ⅱ歴代 3:1)

このように、この出来事はダビデの罪から始まり、神のさばきと神のあわれみによるさばきの終了、エブス人アラウナの打ち場に祭壇を築き、いけにえをささげ、その場所が神殿の場所となるという結果になります。神はダビデの罪を通して、すべてを働かせて益として下ったと知ることができます。

「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画に従って召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」(ローマ 8:28)

57. ソロモン王国の確立「王はエホヤダの子ベナヤに命じた。ベナヤは出て行ってシムイを打ち取り、シムイは死んだ。こうして、王国はソロモンによって確立した。」Ⅰ列王記 2:46

イスラエルが王国になったことによって、神のみこころに反する権力闘争が起きました。サウルはダビデのいのちを狙いました。ダビデの三男アブサロムは、自分の妹タマルを長男のアムノンが犯したことのかたきを取って、アムノンを殺しました。その後アブサロムは、父ダビデに対して謀反を起こし殺されました。Ⅰ列王 1 章では四男のアドニアが王位を狙い、謀反を起こしました。ダビデにはヘブロンで生まれた 6 人の息子がいましたが、それぞれが違う母から産まれるという複雑な家庭環境でした。(Ⅱサムエル 3:1-6)

アドニアの謀反にくみしたのは、将軍ヨアブと祭司エブヤタルでした。その時、祭司ツァドクや預言者ナタンはアドニアにくみしませんでした。アドニアが王になろうとしていることを知ったナタンは、バテ・シェバに伝え、バテ・シェバはダビデ王のもとに行って伝えました。「わが君。あなたは、あなたの神、主にかけて『必ずあなたの子ソロモンが私の跡を継いで王となる。彼が私の王座に就く』と、このはしためにお誓いになりました。それなのに今、ご覧ください。アドニアが王となっています。王様。あなたはそれをご存じないのですか。」(1:17, 18) ナタンも同じようにダビデに伝えました。

ダビデは、主にかけて誓ったとおり、ソロモンが王になると告げ、祭司ツァドクはソロモンに油を注いで王としました。王となったソロモンはアドニアを殺さず、家に帰しました。ダビデは死ぬ前にソロモンに対して、彼に反逆しそうな将軍ヨアブとダビデをのろったシムイに対する適切なさばきをするようにと伝えました。ダビデの死後、ソロモンは自分の王国を確立するために、自分に反逆しそうな人たちを殺しました。まず、アドニアがシュネムの女アビシヤクを自分の妻として与えてほしいと伝えた時、アドニアを殺しました。シュネムの女アビシヤクは、ダビデの晩年にダビデの世話をした女性です。アドニアは彼女を妻として、再び王位を狙おうとしたのです。それを悟ったソロモンはアドニアを殺しました。

次に祭司エブヤタルを祭司職から追放しました。ソロモンはアドニアの謀反にくみしたエブヤタルは死に値するが、ダビデに忠実に仕えたエブヤタルをあわれみ、祭司職から追放することにしたのです。この結果「シロでエリの家族について語られた主のことばは、こうして実現した」のです。(2:27) エブヤタルは祭司エリの子孫でした。次に父ダビデに言われていたように、将軍ヨアブを殺しました。ヨアブは平和な時に、サウルの軍の将軍アブネルとアブサロムの軍の将軍アマサを殺し、さらにアドニアの謀反にくみしました。そして、最後にシムイを殺しました。シムイはダビデがアブサロムの謀反のためエルサレムから逃れた時に、ダビデを激しくのろいました。シムイはソロモンにとっても自分の王位を脅かす人物だったのです。

こうして、ソロモンが自分に反逆する人々を殺したことによって、「王国はソロモンによって確立した」を聖書は記します。ここに私たちは神の国の確立とこの世の王国の確立の違いを見ます。神の国は人間の権力争いによって確立するものではありません。そうではなく、私たちが神を信じ、救い主イエスを信じる時に、心の中で始まり、さらに私たちが地上で神のみこころを行い、神と隣人を愛する中で、この世に広がっていきます。そして、最終的にはイエスの再臨によって、この世が終わり、救いが完成する新天新地において実現します。私たちはその完成を待ち望み、「御国が来ますように」と祈りつつ、「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」と祈って、神のみこころを行っていきます。

イエスの弟子たちも、だれが一番偉いかと議論し、天の御国でイエスの右と左に座ることを願いました。弟子たちもその時はまだ、この世的な価値観から解放されていなかったのです。権力闘争が始まるとみにくい争いになることは、聖書だけでなく歴史が教えていることです。「あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」(マタイ 20:28) このイエスの教えを実践する者となりましょう。

58. ソロモンの栄華「ソロモンは主を愛し、父ダビデの掟に歩んでいた。ただし、彼は高き所でいけにえを献げ、香をたいていた。」Ⅰ列王 3:3

王となったソロモンは主を愛し、律法に従って歩みました。神殿が完成するまでのイスラエルの礼拝は過渡期にありました。ダビデの町にはダビデが張った天幕の中に契約の箱がありました。そこではアサフたちによって毎日賛美がささげられました。一方、ギブオンの高き所にはモーセの幕屋があり、そこでは祭司ツァドクたちによって朝夕に全焼のささげ物がささげられました。(Ⅰ歴代 16 章)さらに、各地の高き所で民はいけにえをささげ、ソロモンもいけにえをささげて主を礼拝していました。この時の高き所は、カナン人の偶像礼拝を行う高き所とは区別され、主を礼拝する場所でした。神殿完成後は、主への礼拝は神殿で行われ、それ以外の高き所での礼拝は偶像礼拝とされました。

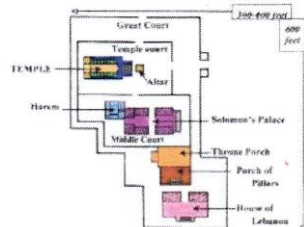
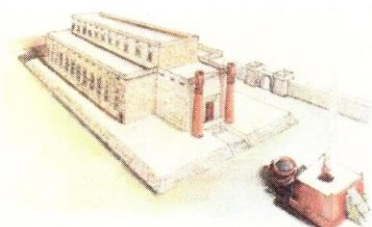
ソロモンはギブオンの高き所で千匹の全焼のいけにえをささげた時、夢の中で主が現れ、「あなたに何を与えようか。願え」と言われました。ソロモンは「私は小さな子どもで、出入りするすべを知りません。…善悪を判断してあなたの民をさばくために、聞き分ける心をしもべに与えてください。」と謙遜に願いました。それに対して主は「わたしはあなたに、知恵と判断の心を与える。…そのうえ、あなたが願わなかったもの、富と誉れもあなたに与える。あなたが生きている限り、王たちの中であなたに並ぶ者は一人もいない。」と言われました。その結果、ソロモンは知恵に満ち、民をさばき、王国を治めました。

10 章でシェバの女王が、ソロモンの名声を聞き、難問をもって彼を試そうとしてやって来ました。ソロモンは彼女の質問にすべて答えました。シェバの女王はソロモンの知恵と宮殿と家来たちの態度と主の宮での礼拝を見て、「あなたの知恵と繁栄は、私が聞いていたうわさよりはるかにまさっていました」と言いました。ソロモンは旧約聖書の箴言、伝道者の書、雅歌の著者です。

ソロモンにとっての最大の事業は神殿建設でした。6 章を見ると、ソロモンは王となってから 4 年目に建築に取り掛かり、7 年かけて完成させました。神殿は長さ約 26.4m、巾約 8.8m、高さ約 13.2m の大きさで、神殿内部の手前 2/3 が聖所、奥の 1/3 が至聖所でした。神殿が完成すると、主の箱とすべての用具を運び入れ、数えきれない羊や牛のいけにえをささげました。その時、主の栄光が主の宮に満ちました。ソロモンは奉獻の祈りの中で「それにしても、神ははたして地の上に住まれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです」と祈りました。(8:27)ですから、神殿は人が神とお会いする礼拝の場であり、神が住まれる場ではありません。神殿で祈りがささげられ、罪の贖いがなされ、神を礼拝するのです。

ソロモンはまた自分が住む宮殿を 13 年かけて建てました。10 章を見ると、交易により多くの金が入りました。ソロモンが飲み物に用いる器はすべて金であり、ソロモンの時代には銀は価値あるものとはみなされていませんでした。また、象牙、猿、くじゃく、パルサム油、馬、ろばなどが毎年は行ってきました。さらに、戦車 1400 台と騎兵 1 万 2 千人を所有し、エルサレムや他の町に配置しました。このように、神のソロモンへの約束は成就しました。

イエスは「栄華を極めたソロモン」と言われ、歴史の中で確かにソロモンが栄華を極めたことを語られました。一方で、「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした」と言われ、神は野の花を、人間が造った物より美しく飾られたと教えられました。そして、野の花を装う神は、人間をもっとよく装ってくださると言われ、「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」と教えられました。



59. ソロモンの墮落「こうしてソロモンは、主の目の前に悪であることを行い、父ダビデのようには主に従い通さなかった。」Ⅰ列王 11:6

栄華を極めたソロモンは、王となった当初は主を愛し、律法を守って生きました。主もソロモンを祝福し、知恵と富と誉れを与えられました。ソロモンは信仰によって神殿を建て、イスラエルでの神殿礼拝が始まりました。けれども、晩年になるとソロモンは偶像礼拝を行い、墮落してしまいました。その直接的な理由は、彼の異国人の妻たちの偶像礼拝の影響です。異国人の妻たちが偶像礼拝をイスラエルに持ち込み、ソロモンも妻たちに影響されて偶像を礼拝したのです。

「ソロモン王は、ファラオの娘のほかにも多くの異国人の女、すなわちモアブ人の女、アンモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヒッタイト人の女を愛した。この女たちは、主がかつてイスラエル人に『あなたがたは彼らの中に入ってはならない。彼らをあなたがたの中に入れてもいいけない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせる』と言われた、その国々のものであった。しかし、ソロモンは彼女たちを愛して離れなかった。彼には、七百人の王妃としての妻と、三百人の側女がいた。その妻たちが彼の心を転じた。」11:1-3

主はソロモンに二度も現れて、ほかの神々に従ってはならないと命じられました。しかし、ソロモンは主の命令を守りませんでした。その結果、主はソロモンを怒り、「あなたがこのようにふるまい、わたしが命じたわたしの契約と掟を守らなかったのも、わたしは王国をあなたから引き裂いてあなたの家来に与える。…一部族だけをあなたの子に与える」と言われました。そして、ソロモンに敵対する者として、エドムの王の子孫ハダド、ダマスコとアラムの支配者レゾン、ソロモンの家来ヤロブアムを起こされました。預言者アヒヤはヤロブアムに対して十部族を与えると伝え、一部族だけはソロモンの子に与えると言いました。そしてソロモンの死後、そのとおりになりました。

ソロモンの墮落の第1の原因は富の誘惑でした。確かにソロモンが多くの富を得たのは、主の祝福によるものでした。しかし、その祝福はソロモンにとっては誘惑でもありました。申命記 17:17 の王についての教えには「自分のために銀や金を過剰に持つてはならない」とあります。ソロモンは主の祝福によって得た富を、自分の欲のために使うのではなく、神のみこころに従い、神への奉仕と民の幸せのために使わなければなりません。しかし、ソロモンは自分の欲を満たすために富を使ったのです。七百人の異国人の妻と三百人の側女を持つためには、多額のお金が必要でした。ソロモンは富の誘惑に負け、富を自分の欲を満たすために使いました。

ソロモンの墮落の第2の原因は異性の誘惑でした。旧約時代は、神はある程度の一夫多妻を許しておられました。しかし、ソロモンはその限度をはるかに超えていました。申命記 17:17 には「また王は、自分のために多くの妻を持って、心をそがれることがあってはならない」と神は教えておられました。しかもソロモンは神が禁じておられた異国人の妻と側女を持ったのです。人間の欲はとどまることなく一つ持てば次が欲しくなります。その結果、妻たちに影響されてソロモンは偶像礼拝を行いました。

ソロモンの墮落の第3の原因が偶像への誘惑でした。ソロモンの心が全く主から離れていたわけではありません。ソロモンの偶像礼拝は、主を礼拝し、同時に偶像も礼拝したということです。そして、ソロモンが偶像を礼拝したのは、異国人の妻たちの影響でした。ソロモンの偶像礼拝は、その後のイスラエルとユダの王による偶像礼拝へとつながっていきます。そして、そのことが、イスラエルの国全体を墮落させ、やがて北イスラエル王国も南ユダ王国も滅びに至るのです。

ソロモンの墮落の第4の原因は力の誘惑でした。申命記 17:15 には「ただし王は、決して自分のために馬を増やしてはならない。馬を増やすために民をエジプトに戻らせてはならない」とあります。しかし「ソロモンは戦車と騎兵を集め、戦車千四百台と騎兵一万二千人を所有した。…戦車はエジプトから銀六百、馬は銀百五十で買い上げられて、輸入された」とあります。ソロモンは主に頼らず、軍事力に頼ったのでした。ソロモンは富があったのでこれらのことができたが、富は神のみこころから離れる方向に用いてしまいました。私たちは富の祝福を神からいただく時、富の誘惑に負けて自分の欲のために用いるのではなく、主のみこころのために用いることが大切です。「あなたがたは神と富とに仕えることはできません」マタイ 6:24

60. 王国の分裂「全イスラエルはヤロブアムが戻って来たことを聞いたので、…彼を全イスラエルの王とした。ユダ部族以外には、ダビデの家に従う者はいなかった。」Ⅰ列王 12:20

ソロモンの死後、イスラエルは南北に分裂し、北イスラエル王国と南ユダ王国に分かれました。その原因はソロモンの罪にありました。ソロモンは二度にわたる主の警告にもかかわらず、偶像礼拝を止めなかったため、主は王国は分裂すると言われました。「あなたがこのようにふるまい、わたしが命じたわたしの契約と掟を守らなかったのも、わたしは王国をあなたから引き裂いて、あなたの家来に与える。…私のしもべダビデと、わたしが選んだエルサレムのために、一つの部族だけをあなたに与える。」(11:11-13)

ヤロブアムはソロモンの家来として、マナセとエフライム族の管理の職に就いていました。ある時、預言者アヒヤがヤロブアムに会いました。アヒヤは外套を 12 切れに引き裂き、十切れをヤロブアムに取らせ、「見よ。私はソロモンの手から王国を引き裂き、十部族をあなたに与える。ただし、ソロモンには一つの部族だけが残る。」と告げました。(11:30-32) ソロモンはヤロブアムを殺そうとしますが、ヤロブアムはエジプトに逃げました。ソロモンが死に、彼の子レハブアムが王となったことを聞いたヤロブアムはエジプトからイスラエルに戻り、イスラエルの全会衆と共にレハブアムのもとに来て民の願いを訴えました。

「あなたの父上は、私たちのくびきを重くしました。今、あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。」ソロモンは、神殿や王宮、その他の町の建設のために、過酷な労働、物資の納入、税の徴収を民に課し、民は苦しみました。ヤロブアムは民の負担を軽くしていただければ、イスラエルの民は引き続き王に仕えたと願い出たのです。レハブアムは即答を避け、3 日後に来るようと言い、まずソロモンに仕えた長老たちに相談しました。長老たちは民の願いを聞くようにと助言しました。しかし、ソロモンはその助言を退け、同世代の若者の家来に相談しました。

若者たちは、ソロモン以上に重いくびきを負わせ、レハブアム王の権力を民に示すようにと助言し、レハブアムはその助言を受け入れました。そして、3 日後にやって来たヤロブアムとイスラエルの民に対して、父ソロモンよりも重いくびきを負わせ、むちではなくサソリをもって懲らしめる強い罰を与えると答えました。これが、決定的な分裂の原因となりました。全イスラエルはヤロブアムを王とし、王国は北十部族と南のユダ部族(ベニアミン族を含めて)に分裂しました。

イスラエル王国の分裂の主な原因はソロモンの罪です。神は偶像礼拝の罪を犯したソロモンをさばき、その結果、国は分裂することになりました。もう一つはレハブアムの対応でした。もし、レハブアムが長老たちの知恵ある助言に従い、民のくびきを軽くすることを約束すれば、王国はすぐには分裂しなかったかもしれません。しかし、レハブアムが民の願いを聞き入れなかったことも、「主がそう仕向けられたから」とあります。(12:15)ここに人間の責任と主の主権という二律背反の真理があります。二律背反とは、相反する二つのことがどちらも真理であることです。レハブアムは彼自身が主体的に判断したのであり、その責任は彼にあります。一方、レハブアムの行動の背後には主の働きがあり、主の主権の中で行われたのです。

さて、ヤロブアムは自分の王国を確立させるためには、民がエルサレム神殿に行くことをやめさせる必要があると考えました。もし民が今後もエルサレムに礼拝に行くなら、やがて民はレハブアムのもとに帰るだろうと考えたのです。そこで金の子牛を二つ造り、民に言いました。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなたの神々がおられる。」そして、一つを南のベテルに、もう一つを北のダンに据え、レビ族でない一般の民の中から祭司を任命しました。さらにユダとは別の日に祭りの日を定め、祭壇でいけにえをささげ、金の子牛を礼拝しました。「このことは罪となった」のです。そして、北イスラエルの王は、「ヤロブアムの道」に歩み続け、偶像礼拝の罪を続けた結果、722 年にアッシリアによって滅ぼされ、民はアッシリアに捕囚の民となって連れて行かれました。

6 1. 神の人によるヤロブアムへの警告「祭壇よ、祭壇よ、主はこう言われる。『見よ、一人の男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちを、いけにえとしておまえの上に献げ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」Ⅰ列王 13:2

Ⅰ列王 13 章は、北イスラエル王国の滅亡の預言です。この箇所は 3 つに分けることができます。第 1 は、神の人によるヤロブアム王への警告です。一人の神の人(預言者)が、主の命令によってユダからベテルにやって来ました。そして、王の前で金の子牛を礼拝する祭壇に向かって預言しました。この預言は、Ⅱ列王 23:15-20 で成就しました。ヤロブアムの 300 年後にユダの王となるヨシヤの名前が預言されますが、これは神の予知によるものです。また、この預言が成就するしるしとして、祭壇が裂け、その上の灰がこぼれ出ると預言しました。

王は、神の人がベテルでの礼拝を否定することは、自分の権力に反抗することだと知り、神の人を捕らえるように命じました。すると、王の手がしなびて戻すことができなくなりました。さらに 神の人が言ったとおり祭壇が裂け、灰がこぼれ出ました。王は神の人に助けを求め、神の人が神に祈ると王の手は元に戻りました。王は神の人を食事に招待し、贈物をしたいと申し出ました。王は神の人を自分の権力下に置きたいと考えたのです。しかし神の人は、主によって食事をしてはならず、もと来た道を通して帰ってはならないと命じられていると言って断り、別の道を通して帰って行きました。

第 2 は神の人に対するさばきです。ベテルには年老いた預言者が住んでいました。彼は息子から神の人が行ったことを聞き、直接聞きたいと願って、神の人に追いつきました。そして食事に招待すると、神の人は主によって食事をしてはならず、もと来た道を通して帰ってはならないと命じられていると言って断りました。すると老預言者は、私も預言者であり、御使いが主のことばを受けて、私に「その人を、あなたの家に連れ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ」と告げたと言って、神の人をだましました。

神の人は、老預言者のことばにだまされ、彼の家に行って食卓に着きました。すると、老預言者に主のことばが与えられ、神の人が主の命令を守らなかったの、「あなたの亡骸は、あなたの先祖の墓には入らない」と告げました。神の人は食後、帰路に就くと、途中で獅子によって殺されてしまいました。このことは、北イスラエルをさばく神は、神の人が主の命令に背くなら同じようにさばかれることを教えています。それほど主の預言者の職責は厳しいものであり、その職責を、霊的に目を覚まして全うしなければならないことを教えているのです。分裂王国の時代に、預言者の活動が活発になります。この出来事はこの後の預言者たちに対する警告ともなりました。

第 3 は老預言者の悲しみと預言です。老預言者は自分の軽率な言葉によって、神の人が獅子によって殺されたことを知り、責任を感じました。彼も預言者が主の名によって人をだませば、どのような悲劇が起こるかを、身をもって知りました。彼は、神の人の遺体を引き取り、いたみ悲しみながら自分の墓に葬りました。そして息子たちに、自分が死んだら神の人を葬った墓に葬り、彼の骨のそばに自分の骨を納めるようにと頼みました。そして、「あの人主のことばに従って、ベテルにある祭壇をサマリヤの町々にあるすべての高き所に向かって叫んだことは、必ず成就するからだ」と言って、神の人の預言は必ず成就すると告げました。

13 章は、北イスラエルへの神のさばきと神の人に対する神のさばきが並行的に記されています。神の人自身が主に従わなかった結果、神のさばきを受けることによって、主に従わない北イスラエルも必ずさばかれることが表されました。けれども、ヤロブアムは引き続き、金の子牛への礼拝を国家的に行い、その後の北イスラエルも偶像礼拝を続けました。13 章の最後の言葉はこうです。「このことは、ヤロブアムの家の罪となり、ついには大地の面から根絶やしにされることとなった。」北イスラエルは 722 年にアッシリアによって滅ばされました。

62. 北イスラエル王国Ⅰ「ヤロブアムが自分で犯した罪と、彼がイスラエルに犯させた罪のゆえに、主はイスラエルを捨てられるのです。」Ⅰ列王 14:16

<ヤロブアム王家>931

【ヤロブアム】北イスラエル王国(イスラエル)の最初の王はヤロブアムです。彼は預言者アヒヤによって神から十部族をゆだねられ、イスラエルの王となったにも関わらず、金の子牛の像の祭壇をベテルとダンに据え、偶像礼拝を行いました。偶像礼拝の罪は、その後イスラエルのすべての王が受け継ぎ、722年にアッシリアによってイスラエルは滅んでしまいます。アヒヤは、イスラエルが神のさばきを受けて滅びると預言し、そのとおりにになりました。ヤロブアムの治世は22年でした。

【ナダブ】ヤロブアムの死後、彼の息子のナダブが王となりました。彼は「父がイスラエルに犯させた罪の道を歩」みました。(15:26)ナダブの治世は2年で、バアシャによって殺されました。

<バアシャ王家>909

【バアシャ】バアシャは、ヤロブアムに属するすべての者を殺し、ヤロブアム王家は滅びました。バアシャは首都をシェケムからティルツァに変えました。この時の南ユダ王国(ユダ)の王は、主に従うアサでした。その時、イスラエルから多くの人がアサのもとに逃げてきました。そこでバアシャは民がこれ以上ユダに逃げないように、エルサレムの北7キロのラマまで国境を広げ、ラマからエルサレムに至る主要道路をふさぎました。これに対して、アサはアラムの王ベン・ハダドと同盟を結び、ベン・ハダドはイスラエルを攻撃しました。その結果、バアシャはラマを放棄し、イスラエルに戻りました。(Ⅱ歴代 15-16章)バアシャの治世は26年で、彼もヤロブアムの道に歩みました。

【エラ】バアシャの死後、彼の息子エラが王となりました。エラの治世は2年でした。彼が部下の家で酔っていた時にジムリによって殺されました。ジブリはバアシャの全家を根絶やしにし、こうして預言者エフーがバアシャに語った預言が成就しました。エラも父の罪の道を歩んだのです。

【ジムリ】ジムリは7日間だけ王となりました。ジムリの謀反を聞いたオムリはジムリのいるティルツァを攻め、ジムリは自ら王宮に火を放って死にました。ジムリもヤロブアムの道に歩みました。王として7日間しか治めなかったため、ジムリは支配王朝の一つとして数えられません。

<オムリ王家>885

(ティブニ)ジムリの死後、イスラエルは二派に分裂しました。民の半分はティブニに従い、彼を王にしようとし、もう半分はオムリに従い、彼を王にしようしました。この争いは4年間続きましたが、結局ティブニが死に、オムリが王となりました。

【オムリ】オムリの治世は12年で、7年目に首都をティルツァからサマリヤに移しました。彼はサマリヤを強固な都とし、周りの国々との貿易を盛んにし、巨大な富を築いた結果、イスラエルは繁栄しました。しかし、「オムリは主の目に悪であることを行い、彼以前のだれよりも悪いことをした」のです。(6:25)そして、その罪は彼の息子アハブによって、さらに大きくなりました。

【アハブ】オムリの死後、息子のアハブが王となり、22年間イスラエルを治めました。彼は父オムリがとった周辺諸国との友好政策を推進し、政治上、通商上のイスラエルの利益を拡大し、国は栄えました。さらに、シドンの王の娘イゼベルを妻とし、フェニキア人との友好関係をさらに進めました。さらに娘アタルヤをユダの王ヨラムに嫁がせることによって、ユダとの友好政策を確保しました。(Ⅱ列王 8:26)またエリコを含む多くの町々を建設し、要塞を築きました。(16:34, 22:39)その結果、イスラエルの平和が保たれ、繁栄しました。彼の宮殿は象牙で造られ、象牙の家と呼ばれて、富と力を誇示しました。

63. 北イスラエル王国 II

【アハブ】アハブの時代、イスラエルは繁栄しました。その一方で、「オムリの子アハブは、彼以前のだれよりも主の目に悪であることを行った。彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであつた」とあります。(16:30—31)具体的にはイゼベルの影響で、サマリヤにバアルの神殿を建て、バアル礼拝を行い、アシェラ像も造ってアシェラ礼拝も行いました。そして、バアルとアシェラの預言者たちがイスラエルに連れて来られました。バアルは男神で豊穡の神、アシェラは女神で、古代オリエント全域でバアルと共に礼拝されました。この霊的墮落を戒めるために、神は預言者エリヤをイスラエルに遣わしました。

エリヤは数年間雨が降らないと預言し、自らはケリテ川のほとりで鳥に養われ、川が涸れるとツアレファテのやもめに養われました。その際、かめの粉は尽きず、壺の油はなくなる奇跡が起きました。さらに、エリヤはやもめの息子を生き返らせました。干ばつ3年目に、エリヤはアハブに対して、450人のバアルの預言者と400人のアシェラの預言者をカルメル山に集めるようにと言いました。バアルの預言者たちと民衆がカルメル山に集まると、祭壇にいけにえを置き、火をもって答える神が、まことの神であると告げました。バアルの預言者たちは、自分たちのからだを傷つけながら、バアルの名を呼びますが、火は降りませんでした。次にエリヤが主の名を呼ぶと主の火が降り、いけにえを焼き尽くしました。民は「主こそ神です」を言い、バアルの預言者たちを殺しました。その後、雨が降りました。

イゼベルはカルメル山の出来事を聞き、エリヤを殺そうとしました。エリヤはそれを知って、南に逃げ、ベエル・シェバまで来た時、「もう十分です。私のいのちを取ってください」と主に祈りました。エリヤは大きな働きをした後、心身ともに燃え尽きていました。神は御使いによってパンと水を備え、エリヤはそれを食べ、よく眠って疲れを癒しました。その後、旅を続けて神の山ホレブ(シナイ山)まで来ました。そこで主の御声を聞き、バアルに膝をかがめない7千人がいることを告げられ、勇気を得ました。さらにこれからすべき3つのことを告げられました。1つ目はハザエルをアラムの王とすること、2つ目はエフーをイスラエルの王とすること、3つ目はエリシャを彼の後継者とすることです。エリヤは主に言われたとおり、エリシャを後継者としました。1つ目と2つ目のことはエリシャによって行われました。

その後、アラムとイスラエルの戦いがありました。イスラエルは2回目の戦いのときに勝利し、アラムの王ベン・ハダトはアハブに降伏しました。アハブはベン・ハダトを赦し、和平条約を結びました。それは周辺諸国と友好同盟を結ぶというアハブの外交政策に基づくものであり、さらには北のアッシリアからイスラエルを守るために、アラムを友好的緩衝国としてとどめておこうとするアハブの意図もありました。しかし、それは主のみ旨に反することでした。

エリヤとアハブの最後の出会いは、ナボテのぶどう畑で起こりました。アハブは王宮のそばにあるナボテのぶどう畑が欲しくなり、購入したいと申し出ました。けれどもナボテは先祖のゆずりの地を売ることはできないと言って、王の申し出を断りました。そのことを知ったイゼベルは、ナボテに対して偽証人を立て、ナボテは神と王への冒瀆罪で殺されました。ナボテのぶどう畑は取り上げられて、王のものとなりました。その時、エリヤはアハブに会いに行き、主の前の罪のゆえにアハブもイゼベルも彼の子孫も殺されると預言しました。アハブはそれを聞いて、主の前でへりくだり、その結果、アハブの生きている間は、わざわいは起こりませんでした。その後、イスラエルとアラムは再び戦いとなり、アラムの兵士が放った矢に打たれてアハブは死にました。アハブはこの世的には優秀な王でしたが、霊的にはイスラエル最悪の王となりました。

64. 北イスラエル王国 Ⅲ

【アハズヤ】アハブの死後、息子のアハズヤが王となり、2年間イスラエルを治めました。「彼はバアルに仕え、それを拝み、彼の父が行ったのと全く同じように行って、イスラエルの神、主の怒りを引き起こした。」(Ⅰ列王 22:53)アハズヤが自分の病が治るかどうかエクロンの神バアル・ゼブブに伺いを立てた時、エリヤは主に頼らないアハズヤは必ず死ぬと告げ、そのとおりにになりました。その後、エリヤはエリシャが見ている前で、火の戦車と火の馬が現れ、竜巻に乗って天に上って行きました。(Ⅱ列王 2:11)

【ヨラム】アハズヤには息子がいなかったため、アハブの子ヨラムが王となり、12年間治めました。「彼は主の目の前に悪であることを行ったが、彼の父母ほどではなかった。彼は、父が作ったバアルの石の柱を取り除いた。」(3:2)ヨラムの時代に活躍した預言者がエリシャです。ヨラムとユダの王ヨシヤファテがともにモアブの王と戦ったとき、水がなくなりました。その時、ヨシヤファテの求めに応じてエリシャが呼ばれ、エリシャの預言どおり翌朝エドムの方から水が流れてきました。(3:20)預言者の妻が、夫が死に債権者が子どもを奴隷にしようとしていると訴えると、エリシャは多くの壺に油を満たす奇跡を行い、家族を救いました。また子どものいない夫婦に子どもが与えられると預言し、そのとおriになると、今度はその子が死んでしまいました。エリシャはその子を生き返らせました。(4章)

アラムの王が、軍の長ナアマンのツァラアトを治してほしいという手紙を書き、それを持ったナアマンがヨラムのところにやって来ました。ヨラムはアラムが言いがかりをつけて戦いを仕掛けてくるのではないかと恐れしました。エリシャはヨラムに対して、ナアマンを自分のもとによこすようにと伝えました。ナアマンはエリシャの言ったとおりヨルダン川に7回身を浸すと、ツァラアトが癒されました。エリシャの従者ゲハジは、エリシャが断った謝礼を自分のものにしようと試み、罰としてツァラアトになってしまいました。(5章)

アラムの王ベン・ハダドは、エリシャがヨラムにアラム軍の動向を逐一教えていると聞いて怒り、エリシャを捕らえるために大軍を送りました。エリシャの従者はアラム軍を見て恐れますが、エリシャは彼の目を開いて、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちているさまを見せました。主はエリシャの祈りに応じ、アラム軍の目をくらませました。エリシャは、目が見えなくなった軍隊をサマリヤに連れて行き、ヨラムはエリシャの言う通り、彼らをもてなして帰らせました。(6章)その後、アラムの全軍がサマリヤに上って来て包囲したため、サマリヤは大飢饉になりました。ある時、エリシャは明日には有り余るほどの食物が与えられると宣言しました。そのとおり、主がアラムの全軍を追い払い、彼らが残していった多量の食糧をイスラエルは得ることができました。しかし、エリシャのことばを信じなかった侍従は、民が彼を踏みつけたので死んでしまいました。(7章)

エリシャがダマスコに行った時、病気のアラムの王ベン・ハダドが、病気が治るかどうかを、家来のハザエルを遣わして聞きました。エリシャは、病気は治るが必ず死ぬと告げ、さらにハザエルがアラムの王となり、イスラエルを苦しめると告げました。そのとおり、ハザエルは王のもとに戻ると王を殺し、自らが王となりました。このことによって、神がホレベの山でエリヤに告げられたことが成就しました。(Ⅰ列王 19:15)エリシャは、エリヤがホレベの山で主から告げられたもう一つのことを成就させるために、エフーのもとに預言者の一人を遣わして、エフーに油を注いで王としました。エフーはヨラムを殺し、ユダの王アハズヤも殺しました。さらにイゼベルも殺し、こうして預言者エリヤの言葉はことごとく成就し、オムリ王家は滅びました。(9章)

65. 北イスラエル王国 IV

<エフー王家> 841

【エフー】エフーは28年間イスラエルの王として治めました。彼はアハブの家に属するすべての者を殺しました。またバアルの信者を神殿の集めて殺し、神殿を打ち壊し、バアルをイスラエルから根絶やしにしました。主はエフーの働きをほめ、あなたの子孫は4代目まで王座に就くと言われました。そして、そのとおりにになりました。しかし、彼は主に従うことをせず、ヤロブアムの罪から離れませんでした。(10章)

【エホアハズ】エフーの死後、彼の子エホアハズが王となり、17年間治めました。彼もヤロブアムの罪を犯し続け、それから離れませんでした。そのため、主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、アラムの王ハザエルとハザエルの子ベン・ハダドがイスラエルを攻め、イスラエルは苦境に陥りました。その時、エホアハズは主に願い、主は彼の願いを聞かれて、イスラエルはアラムの支配から逃れることができました。(Ⅱ列王13章)

【ヨアシュ】エホアハズの死後、彼の子ヨアシュが王となり、16年間治めました。ヨアシュも主の目に悪であることを行い、ヤロブアムの罪を犯し続けました。エリシャが死の病をわずらっていた時、ヨアシュはエリシャのところに行きました。エリシャはアラムに対する勝利の矢を射なさいと言い、ヨアシュは3回矢を打ち、やめてしまいました。エリシャは激怒し、3回だけアラムを打つことになると言いました。そして、そのとおりヨアシュは3度アラムを打ち、イスラエルの町々を取り返しました。その後、エリシャは死んで葬られました。人々が一人の人を葬ろうとしていた時、モアブの略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓に投げ入れて去っていきました。するとその人はエリシャの骨に触れるやいなや、生き返りました。(13章)

【ヤロブアム2世】ヨアシュの次に王となったのは、彼の子ヤロブアム(2世)です。彼は41年間治めました。そのうちの12年間は父と共に治めました。ヤロブアム2世もヤロブアム1世の罪から離れず、主の前に悪を行いました。その一方で、ヤロブアム2世はイスラエルの領土を回復させ、イスラエルに平和と繁栄をもたらしました。

預言者ヨナはイスラエルの領土の回復を預言し、そのとおりにになりました。この時代のアッシリアは自国内の問題で忙しく、ヤロブアム2世の時代が終わるまで、パレスチナに進出することができなかったのです。しかし、これも主のイスラエルに対するあわれみでした。「イスラエルの苦しみが非常に激しいのを、主がご覧になったからである。・・・それで、ヨアシュの子ヤロブアムによって彼らを救われたのである。」(14:26-27)

預言者ホセアやアモスはこの時代のイスラエルに対して、彼らの罪を指摘し、主に立ち返るように語りました。「イスラエルよ。あなたの神、主に立ち返れ。あなたは自分の不義につまずいたのだ。」(ホセア14:1)そして、主に立ち返らないイスラエルは滅びると預言しました。「イスラエルよ、あなたは滅ぼされる。あなたの助け手である、わたしに背いたからだ。」(ホセア13:9)

【ゼカリヤ】ヤロブアム2世の死後、彼の子ゼカリヤが王となり、6か月間だけ治めました。彼も主の目の前に悪であることを行い、ヤロブアムの罪から離れませんでした。シャルムが謀反を企て、彼を打ち殺し、彼に代わって王となりました。(15章)こうして、「あなたの子孫は4代までイスラエルの王座に就く」と、主がエフーに告げられたことばは成就しました。エフー王家は滅び、その後は最後の王たちの時代となります。そして、わずか30年の後に、イスラエルはアッシリアによって滅ぼされるのです。イスラエルの人々は、ホセアやアモスが預言した神のさばきが間近に迫っていることを自覚せず、一時的な国の繁栄に安心し、主に立ち返ろうとしなかったのです。

66. 北イスラエル王国

<最後の諸王>

【シャルム】シャルムはゼカリヤに対して謀反を企て、彼を打ち殺し、彼に代わって王となりました。(Ⅱ列王 15 章)しかし、メナヘムによって殺され、わずか1か月の治世で終わりました。

【メナヘム】メナヘムはシャルムを殺し、彼に代わって王となり10年間治めました。彼もヤロブアムの罪から離れず、主の目に悪を行いました。この時、イスラエルの脅威となったのがアッシリアでした。前745年にティグラト・ピレセル3世(またの名はプル)が王となると、彼は征服した民を遠隔地に連れ去るという政策を取り入れ、諸国を恐れさせました。メナヘムはプルに貢ぎ物を送るため、すべての有力者たちから銀50シェケルを集めました。そして、イスラエルに来たプルに銀千タラントを与えたので、プルはアッシリアに帰りました。メナヘムは平和のうちに死に、彼の子ペカフヤが王となりました。

【ペカフヤ】父メナヘムの死後、王となったペカフヤは2年間治めました。彼もヤロブアムの罪から離れず、主の目に悪を行いました。ペカフヤは父メナヘムの政策を引き継ぎ、アッシリアに納める税を民から徴収し続けたので、民の反発を受け、反アッシリア政策を掲げるペカによって殺されました。

【ペカ】ペカフヤを殺したペカが王となり、20年間王として治めました。彼もヤロブアムの罪から離れず、主の目に悪を行いました。彼の時代に、アッシリアの王ティグラト・ピレセルが攻めて来て、イスラエル北部を占領し、その住民を捕らえ移しました。これはイスラエルの民が捕囚としてアッシリアに連れて行かれた最初の出来事です。その時、ホセアはペカに対して謀反を企て、ペカを殺して王となりました。

【ホセア】ペカを殺したホセアが王となり、9年間王として治めました。彼も主の目の前に悪を行いましたが、彼以前のイスラエルの王たちのようではありませんでした。彼の時代、すでにイスラエル北部はアッシリアに占領され、サマリアを中心とする高原地帯だけが残されていました。前727年アッシリアの王ティグラト・ピレセルが死に、シャルマヌエセルが王となりました。シャルマヌエセルがイスラエルに攻めてきた時、ホセアは彼に服従して貢ぎ物を納めました。しかし、ホセアはその後、アッシリアへの貢ぎ物をやめて、エジプトの王ソに支援を求めました。ホセアの謀反に気づいたアッシリアの王はホセアを捕らえて牢獄につなぎました。そしてサマリアに攻め上り3年間包囲し、722年にサマリアは陥落しました。アッシリアの王はイスラエル人をアッシリアに捕らえ移し、こうして北イスラエル王国は滅びました。(Ⅱ列王 17:6)

<北イスラエル王国滅亡の理由>

「こうなったのは、イスラエルの子らが、自分たちをエジプトの地から連れ上り、エジプトの王ファオの支配下から解放した自分たちの神、主に対して罪を犯し、ほかの神々を恐れ、主がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の風習、イスラエルの王たちが取り入れた風習に従って歩んだからである。…彼らの神、主のすべての命令を捨て、自分たちのために、鑄物の像、二頭の子牛の像を造り、さらにアシェラ像を造り、天の万象を拝み、バアルに仕えた。…そのため主はイスラエルに対して激しく怒り、彼らを御前から除かれた。ただユダの部族だけが残った。…こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリアに引いて行かれた。今日もそのままである。」(Ⅱ列王 17 章)聖書は、イスラエルの滅びの原因は、彼らが主を信じず、偶像礼拝を行った罪にあると教えています。神はたびたびイスラエルに預言者を遣わし、主に立ち返るようにと警告したにもかかわらず、これを聞き入れず、最後まで主に立ち返ろうとはしなかったのです。

67. 南ユダ王国 I

【レハブアム】(前 931～913) ソロモンの死後、王となったレハブアムに対してイスラエル人は減税を求めました。けれども、民の願いを聞き入れず逆に増税を宣言すると、イスラエルの十部族はヤロブアムを王とし、こうしてイスラエルは南北に分裂し、南ユダ王国(ユダ)にはユダ族とベニヤミン族だけが残りました。北イスラエル王国(イスラエル)では、ヤロブアムがベテルとダンで金の子牛の像の祭壇を築き、主の祭司たちを解任しました。すると、主の祭司たちとレビ族は自分たちの放牧地と所有地を捨て、イスラエルからユダにやって来て、主に仕えました。その結果、レハブアムは最初の3年間は主に従って歩みました。(Ⅱ歴代 11 章)

しかし、王国が確立し強くなると、レハブアムと民は主に従わなくなりました。するとエジプトの王シシャクがユダを攻め、エルサレムまで攻めて来ました。その時、預言者シェマヤが王とユダの首長たちに、「あなたがたがわたしを捨てたので、わたしもあなたがたを捨てて、シシャクの手に渡した」と言いました。これを聞いた彼らは、主の前にへりくだり「主は正しい」と言いました。王がへりくだった時、主はユダを滅ぼすことはされず、シシャクは主の宮の財宝を奪い取ってエジプトに帰りました。レハブアムの治世は17年間で、彼の死後、彼の子アビヤム(アビヤ)が王となりました。(Ⅱ歴代 12 章)

【アビヤム】(前 913～910) アビヤムは3年間王として治めました。アビヤムとヤロブアムの間には戦いがあり、ユダの人々が主に拠り頼んだので、イスラエルに対して勝利しました。しかし、アビヤムはソロモンとレハブアムが行った偶像礼拝の道を歩み、ダビデの心のように主と一つになっていませんでした。(Ⅰ列王 15 : 3) アビヤムの時代に偶像礼拝がユダ全土に広がっていきました。

【アサ】(前 910～869) アビヤムの死後、アサが王となり 41 年間治めました。アサはユダにある偶像を捨て、主に従う宗教改革を行いました。「アサは、自分の神、主の目にかなう良いことを行った。彼は異教の祭壇と高き所を取り除き、石の柱を砕き、アシェラ像を切り倒し、ユダの人々に命じて、彼らの父祖の神、主を求めさせ、その律法と命令を行わせた。彼はユダのすべての町から高き所と香の台を取り除いた。こうして王国は彼のもとに平穏であった。」(Ⅱ歴代 14:2-5) クシュ人の大軍がユダを攻めてきた時、アサが主に拠り頼んだ結果、勝利することができました。

預言者オデデとアザルヤに励まされたアサは、さらに宗教改革を徹底させました。「彼は、ユダとベニヤミンのすべての人々、およびエフライム、マナセ、シメオンからきて、彼らのもとに寄留している人々を集めた。その神、主がアサとともにおられるのを見て、イスラエルから多くの人々が彼のもとに下って来ていたのである。」(Ⅱ歴代 15:9) この状態に危機感を抱いたイスラエルの王バアシャはエルサレムの北7キロのラマに要塞を築き、エルサレムへの主要道路をふさぎました。

それに対して、アサはアラムの王ベン・ハダドに金銀を送って、イスラエルとの同盟を破棄して、ユダと同盟を結び、イスラエルを攻めるように願いました。ベン・ハダドはアサの願いを聞き入れ、ユダと同盟を結び、イスラエルを北から攻めました。その結果、バアシャはラマから手を引き、アサはラマに集められた木材や石を奪って、ゲバとミッパを建てました。

しかし、アラムとの同盟は主のみこところではありませんでした。預言者ハナニはアサに対して、主に頼らずアラムに頼ったので、これから数々の戦いが起こると伝えました。アサはハナニに対して怒りを発し、彼を牢獄につなぎました。さらに晩年、アサが両足とも病気になる時、「その病気の中でさえ、主を求めず、医者を求めた」のです。(Ⅱ歴代 16:12) ここでの医者とは病を癒す魔術師のことです。このように、アサは晩年に主から心が離れてしまいました。たとえ王であっても、預言者のことばをへりくだって聞かなければならないのです。

68. 南ユダ王国Ⅱ

【ヨシャファテ】(前 872～846) アサの次に王となったのがヨシャファテです。彼は 25 年間ユダを治めました。「ヨシャファテはその父アサの道に歩み、そこから外れることなく、主の目にかなうことを行った。」(Ⅱ歴代 20:32) 彼は主に従い、バアルの神々を求めず、高き所とアシェラ像を取り除きました。また、5 人の高官たちをレビ人、祭司たちとともにユダの町々に遣わして、主の律法を民に教えました。その結果、主の恐れが周辺諸国に及び、ユダに対して戦いを仕掛けず、貢ぎ物が送られてきました。また城塞や倉庫の町々を築き、それらの町々に軍団を駐在させ、ユダは繁栄しました。(17 章)

一方でイスラエルの王アハブが、ユダと友好関係を築くために、彼の娘アタルヤをヨシャファテの子ヨラムに嫁がせ、ヨシャファテはアハブと姻戚関係に入りました。その結果、アハブがラモテ・ギルアデを奪回するためアラムと戦う時に、ヨシャファテにも戦いに加わるように招きました。ヨシャファテが主のことはを伺うように申し出ると、アハブは王直属の 400 人の預言者を呼びました。彼らはみな、戦いに行つて勝利を得るようにと預言しました。しかし、ヨシャファテは主の預言者による確認を求めた結果、アハブは主の預言者ミカヤを呼び、ミカヤはアハブが戦いで殺されると預言しました。これを知つてアハブは変装し、ヨシャファテは王服を着て戦いに行きましたが、ヨシャファテは主に助けられ、アハブは流れ矢に当たつて死にました。(18 章)

エルサレムに戻つたヨシャファテに対して、預言者エフーが主を憎むアハブを助けたため主の怒りが下ると告げました。するとヨシャファテはエフーの言葉を素直に受け入れ、彼自らユダの全土を回つて主に立ち返るようにと民を励ましました。また正しい裁判を行うために裁判官を任命しました。(19 章) その後、モアブ人とアンモン人がユダを攻めてきました。その時ヨシャファテは主を求め、ユダの人々も集まつてきて、主の助けを求めました。すると、主の救いが与えられ戦いに勝つとの主の約束をいただくことができ、民は主を賛美して戦いに向かいました。敵は混乱に陥り同士討ちで滅びました。(20 章)

晩年になりヨシャファテはイスラエルの王アハズヤと同盟を結びました。そして、ともに貿易を栄えさせるためにエツヨン・ゲベルで船団を造りました。その時預言者エリエゼルがヨシャファテに向かつて、主が船団を打ち壊されると伝え、そのとおり、船は難破しました。アハズヤは再び船を出そうと提案しましたが、ヨシャファテは断りました。(20 章) このように、アサとヨシャファテの時代は、王も民も主を求め主に従つた結果、国も繁栄しました。

【ヨラム】(前 848～841) ヨシャファテの後にヨラムが王となり、8 年間治めました。「彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道を歩んだ。アハブの娘が彼の妻だったからである。彼は主の目に悪であることを行つた。」(Ⅱ歴代 21:6) ヨラムはユダの防備の町々に住んでいた 6 人の兄弟と首長たちの数人を殺し、自分の王位を確立させようとしてしました。また、父ヨシャファテが取り除いた高き所と偶像礼拝を復興させました。これはヨラムの妻となつたアハブとイゼベルの娘アタルヤの影響が大きかつたためです。

預言者エリヤはヨラムに手紙を書き、厳しく非難しました。そして、主がヨラムの罪のためにユダの民とヨラムの家族と全財産を打つこと、さらにヨラムは不治の病になると告げました。その後、ペリシテ人とアラビア人がユダとエルサレムを攻め、王宮のすべての財産と彼の子や妻たちも奪い去り、ヨラムの子エホアハズ(またの名はアハズヤ)以外は一人も残されませんでした。またエドムとリブナもユダの支配から脱しました。ヨラムは不治の内臓の病で死に、王たちの墓に埋葬されることもありませんでした。(21 章)

【アハズヤ】(前 841) ヨラムは王となった時、すべての兄弟を殺しましたが、ヨラムの子たちもアハズヤを除いてアラビア人によって殺されました。そこでヨラムの死後アハズヤが王となり一年間治めました。彼の母アタルヤはアハブとイゼベルの娘であり、母がアハズヤの助言者となったため、彼もアハブの家の道に歩み、主の目の前に悪であることを行いました。アハズヤはイスラエルの王ヨラムとともにアラムの王ハザエルと戦いました。この戦いでヨラムは傷を負い、ヨラムを見舞うためにアハズヤはイズレエルに行きました。その時、エフーはヨラムとアハズヤを殺しました。こうしてエフーはイスラエルの王となり、ユダではアハズヤの母アタルヤが王となりました。(Ⅱ歴代 22 章)

【アタルヤ】(前 841～835) アタルヤは息子アハズヤが死んだと知った時、直ちに王の一族全員を殺し、自分が王となりました。けれどもアハズヤの妹で祭司エホヤダの妻エホシエバがアハズヤの息子ヨアシュを小部屋に隠したので、アタルヤは彼を殺せませんでした。ヨアシュは祭司エホヤダの保護のもと、神殿で身を隠しました。アタルヤは 6 年間ユダを治め、バアル礼拝を行いました。7 年目になり、祭司エホヤダは奮い立ち、神殿内でアハズヤの子として唯一残されたヨアシュに油を注いで王としました。そして、アタルヤをとらえ王宮で殺しました。

【ヨアシュ】(前 835～796) ヨアシュは 7 歳で王となり 40 年間治めました。ヨアシュが王になることによって、ユダの王は再びダビデの子孫が受け継ぎました。「エホヤダは彼らに言った。『見よ。主がダビデの子孫について約束されたとおり、王の子が王になる。』」(23:3) ヨアシュが即位した時には幼かったため、祭司エホヤダが生きている間、ヨアシュのもとで国を治めました。エホヤダは王と民が主に仕えるという契約を立てました。そして、バアル礼拝を取り除き、主に仕えました。ヨアシュとエホヤダは神殿礼拝を復興させるために、主の宮を修理し、民は多くのささげ物をしました。エホヤダが生きている間は主の宮では絶えず全焼のいけにえがささげられました。エホヤダは 130 歳で死にました。「彼はダビデの町に王たちとともに葬られた。彼がイスラエルにおいて、神とその宮に対して良いことを行ったからである。」(24:16)

エホヤダの死後、ユダの首長たちがヨアシュにアシェラと偶像に仕えるように説得し、ヨアシュは彼らの言うことを聞き入れました。その結果、ユダは再び偶像礼拝を行うようになりました。祭司エホヤダの子ゼカリヤが、「主に従わない民を主も捨てられた」と警告した時、ヨアシュはゼカリヤを殺しました。やがてアラムの軍勢がユダとエルサレムを攻め、ヨアシュは重傷を負いました。その時、彼の家来が謀反を企てヨアシュを殺しました。これは神のさばきでした。

【アマツヤ】(前 796～767) ヨアシュの死後、彼の息子アマツヤが王となり、29 年間治めました。アマツヤは王になった当初、主に従いました。彼がエドムを打つためにイスラエルから 10 万人の勇士を雇いました。けれども、預言者がイスラエルの軍勢を一緒に行かせてはならないと告げたので、イスラエルの兵を解雇し、ユダの軍隊だけでエドムと戦い勝利しました。ところがその時、エドムから持ち帰った偶像をアマツヤは礼拝するようになり、預言者の警告にも耳を傾けませんでした。

アマツヤの心は高慢になり、イスラエルの王ヨアシュに戦いを挑みました。ヨアシュはユダの敗北を警告しますが、アマツヤは聞き入れませんでした。戦いの結果ユダは敗北し、アマツヤは捕らえられてしまいました。「しかし、アマツヤは聞き入れなかった。それは神から出たことであって、彼らを敵の手に渡すためであった。彼らがエドムの神々を求めたからである。」(25:20) その後アマツヤは解放されますが、謀反が起きてアマツヤは殺されました。(25 章)

70. 南ユダ王国Ⅳ

【ウジヤ(アザルヤ)】(前 791～740)アマツヤがイスラエルの捕虜となった時、ウジヤは王となり、52 年間治めました。しかし、アマツヤが解放された後、アマツヤも王として治めたので、ウジヤが単独で王として治めたのは 17 年間だけでした。ウジヤが王となった時、ユダはイスラエルに敗北し、アマツヤも捕虜になってしまい、ユダの国力は弱くなっていました。けれども、ウジヤが主に従った結果、主は彼を栄えさせ、領土を広げ、経済的にも栄えました。「彼は、すべて父アマツヤが行ったとおりに、主の目にかなうことを行なった。神を認めることを教えたゼカリヤが生きていた間、彼は神を求めた。また彼が主を求めていた間、神は彼を栄えるようにされた。」(Ⅱ歴代 26:4-5)

しかしウジヤが強くなると、彼の心は高ぶり、神殿に入って香の壇の上で香をたこうとしました。その時、祭司アザルヤが他の祭司たちと入って来てウジヤに言いました。「ウジヤよ。主に香をたくのはあなたのすることではありません。香をたくのは、聖別された祭司たち、アロンの子らのことです。聖所から出てください。あなたは主の信頼を裏切りました。あなたには主の誉れは与えられません。」(26:18)これを聞いたウジヤは激しく怒りました。その時、主がウジヤを打たれ、彼はツァラアトに冒されて、死ぬまで隔離された家に住みました。

【ヨタム】(前 750～732)ウジヤがツァラアトになった時、ウジヤの子ヨタムが摂政となりました。その後王となり 16 年間治めました。「彼はすべて父ウジヤが行ったとおりに、主の目にかなうことを行なった。ただし、主の神殿に入ることはしなかった。民は依然として滅びに向かっていた。」(27:2)民は偶像礼拝に走りまわりました。ヨタムはアンモン人と戦って勝利し、勢力を増し加えました。

【アハズ】(前 732～716)ヨタムの死後、彼の子アハズが王となり 16 年間治めました。「彼はその父祖ダビデとは違って、主の目にかなうことを行わず、イスラエルの王たちの道に歩み、その上、バアルの神々のために鋳物の像を造った。」アハズは偶像礼拝を行い、異教の習慣に従って自分の子に火の中を歩かせました。(Ⅱ歴代 28 章)この頃アッシリアの圧制に苦しんでいたイスラエルの王ペカとアラムの王レツィンが、ヨラムに対して三国同盟を結んでアッシリアに対抗しようと申し出ました。しかしアハズが拒否すると、イスラエルとアラムの軍隊がエルサレムに向かって攻めてきました。ユダの人々はこの事態に動揺しました。その時イザヤがアハズに対して、主に信頼すればイスラエルとアラムに勝つことができると伝え「あなたの神、主に、しるしを求めよ」と告げました。

しかし、アハズは「私は求めません。主を試みません」と言い、主に信頼することを拒みました。その時、イザヤは言いました。「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神まで煩わすのか。それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」国家存亡の危機と処女降誕の約束は一見無関係のように思えますが、ダビデの家の不信仰という危機的状況に対する神のしるしとしての救いの約束が語られたのです。処女降誕の約束は、救い主イエス・キリストの誕生によって成就しました。(イザヤ 7 章)

一方、アハズは主に救いを求めず、アッシリアの王ティグラト・ピレセルに助けを求めました。アッシリアはアハズの願いを聞き、アラムを攻めレツィンを殺しました。ユダはその後アッシリアの圧制を受け、重い貢物を納め続けることになりました。一方、イスラエルとアラムはエルサレムを攻め、12 万人のユダの人々が殺されました。さらに 20 万人が捕虜となってサマリアに連れて行かれそうになりました。けれども預言者オデデの勧めにより、捕虜は解放されました。アハズはその後、ダマスコの神々の祭壇をエルサレム神殿に置き、偶像礼拝を推し進めました。アハズの時代の前 722 年に北イスラエル王国はアッシリアによって滅ぼされました。

7 1. 南ユダ王国 V

【ヒゼキヤ】(前 729～696)アハズの死後、アハズの子ヒゼキヤが王となり、29 年間治めました。「彼は、すべて父祖ダビデが行ったとおりに、主の目にかなうことを行なった。」(Ⅱ歴代 29:2)ヒゼキヤは北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされる姿を目撃し、その原因が主に対する不信仰であることを自覚しました。そこで、父アハズが行った偶像礼拝をやめ、主に信頼して宗教改革を行いました。彼は高き所を取り除き、偶像を切り倒し、モーセが作った青銅の蛇も砕きました。それは人々が青銅の蛇に犠牲をささげていたからです。「彼は主に堅くつき従って離れることなく、主がモーセに命じられた命令を守った。」(Ⅱ列王 18:6)

また神殿礼拝を再開するために、神殿を修理し、神殿をきよめて、過越のいけにえをささげました。その時、アッシリアの捕囚を免れた北イスラエルに住む民にも呼びかけ、主を求める人たちがエルサレムにやって来て、過越を祝いました。祭司とレビ人たちに導かれて民は犠牲をささげ、喜びつつ賛美し、主を礼拝しました。

ヒゼキヤはアッシリアの脅威に対抗するために城壁を強化し、エルサレムが包囲されても十分な水を確保するために、ギホンの泉から 533 メートルのトンネルを造ってシロアムの池とつなぎました。1880 年にこのトンネルが発見され、ヒゼキヤトンネルと呼ばれ、今日も見ることができます。今も泉からの水がシロアムの池に注がれ続けています。イエスは盲人にシロアムの池で洗いなさいと命じ、そのとおりにすると盲人の目はいやされ、見えるようになりました。(ヨハネ 9:7)

ヒゼキヤの第 14 年に、ついにアッシリアの王センナケリブがユダに攻めてきました。ヒゼキヤはセンナケリブに金銀を送り、アッシリア軍の退却を願いました。けれども、アッシリア軍は退却せず、ヒゼキヤをおどして降伏を求めました。その時、ヒゼキヤはイザヤに祈りを要請し、自らも祈りました。イザヤは主がエルサレムを救うと告げ、そのとおり、主の御使いがアッシリア軍を滅ぼしました。(Ⅱ列王 19 章、イザヤ 36-37 章)

ヒゼキヤが病気になった時、イザヤは最初、「あなたの病気は治らない」とヒゼキヤに告げました。その直後、ヒゼキヤの寿命に 15 年加えるとの主のことばがイザヤにあり、イザヤはそのことをヒゼキヤに告げました。さらに、しるしとして日時計の影が十度進むか戻るか、どちらが良いかと告げました。ヒゼキヤが十度戻ることを求めると、イザヤは主に祈りました。「預言者イザヤが主に祈ると、主はアハズの日時計に落ちた日時計の影を十度後に戻された。」(Ⅱ列王 20:11、イザヤ 38 章) 日時計はアハズの宮殿の屋根に上る階段を指し、午前は東側の壁の影が東向きの階段を下り、午後は西側の壁の影が西向きの階段を上って、時刻を示す構造になっていました。この現象が起きたのは、地球の自転が急に反転したということではなく、理由はわかりませんが、何らかの神の奇跡の働きによって、影が十段上の所まで戻ったと考えることができます。

ヒゼキヤは干しいちじくを腫物の上に塗ると、病がいやされました。ところがヒゼキヤは主の恵みに応えようとせず、高慢の罪を犯しました。バビロンの王メロダク・バルアダンが病気の回復を祝って使者たちをヒゼキヤに遣わしました。その時ヒゼキヤは、彼らに王宮と宝物倉の中のあるすべての物を見せびらかして、神に栄光を帰さなかったのです。この時、イザヤが神の怒りを伝えるためにヒゼキヤのもとに遣わされ、それらの財宝がバビロンに奪い去られ、子どもたちも捕虜となることを告げました。この時、ヒゼキヤは心の高ぶりを捨ててへりくだり、エルサレムの住民も共にへりだったので、神のさばきは延ばされました。(Ⅱ歴代 32:26)ヒゼキヤは主から与えられた寿命を全うした時、ユダとエルサレムの住民はヒゼキヤのために榮譽ある葬儀を行いました。ヒゼキヤの時代はアッシリアの脅威はあったものの、平和が保たれました。

7.2. 南ユダ王国Ⅵ

【マナセ】(前 796～642)ヒゼキヤの死後、その子マナセが王となり 55 年間治めました。「彼は、主がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の忌み嫌うべき慣わしをまねて、主の目に悪であることを行った。そして、父ヒゼキヤが取り壊した高き所を築き直し、バアルのためにいくつもの祭壇を築き、アシェラ像を造った。また、彼は天の万象を拝んでこれに仕えた。」(Ⅱ歴代 33:2, 3) このように父ヒゼキヤの宗教改革による信仰復興の時代は、マナセによってことごとく破壊され、霊的暗黒時代に突入しました。子どもを偶像に献げる人身犠牲が行われ、ト占、まじない、呪術、霊媒などが認められ、神殿にはアシェラ像が置かれました。また偶像礼拝に反対した多くの人々が殺されました。イザヤもこの時に殉教したと考えられています。

主は、ご自身に逆らうマナセに対してアッシリア軍を送り、彼らはマナセを捕らえてバビロンに引いていきました。マナセはバビロンでの苦しみの中で罪を悔い改め、へりくだって主を認め、神に祈ったので、神はマナセをエルサレムに戻しました。エルサレムに戻ったマナセは、自分が置いた偶像をことごとく取り除き、主の祭壇を築き直し、自ら主に仕えるとともに、ユダの民にも主に仕えさせました。

【アモン】(前 642 年～ 640 年)マナセの死後、その子アモンが王となり 2 年間治めました。「彼はその父マナセが行ったように、主の目に悪であることを行った。」(Ⅱ歴代 33:22)アモンは父マナセの悔い改めを無視し、マナセが長い間行った偶像礼拝を復活させました。その結果、ユダは背信の時代に逆戻りしていきました。前 640 年に家来たちが宮殿でアモンを殺害しました。

【ヨシヤ】(前 640 年～ 609 年)父アモンが殺害されると、8 歳のヨシヤが王となり、31 年間治めました。「彼は主の目にかなうことを行い、父祖ダビデの道に歩み、右にも左にもそれなかった。彼の治世第 8 年、まだ若いころに、彼は父祖ダビデの神を求めることを始め、第 12 年にユダとエルサレムをきよめて、高き所、アシェラ像、刻んだ像、および鑄造を除き始めた。」(Ⅱ歴代 34:2, 3) ヨシヤは 16 歳の時に宗教改革を始めました。徹底的に偶像を取り除き、異教の習慣を廃止しました。

彼の改革はユダだけでなく北イスラエルにも及びました。ベテルにあるヤロブアムが立てた祭壇と高き所を打ち壊しました。アッシリア軍によってすでに金の子牛は取り除かれ、代わりにアシェラ像が置かれていたので、アシェラ像は焼かれました。そして、墓から骨を取り出し、祭壇の上に焼いて祭壇を汚れたものとししました。こうしてヤロブアムを非難したユダの預言者の預言は成就しました。「祭壇よ、祭壇よ、主はこう言われる。『見よ、ひとりの男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちを、いけにえとしておまえの上に献げ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』」(Ⅰ列王 13:2) その時、ヨシヤはヤロブアムを非難したユダの預言者の石碑に気づきました。ヨシヤは神の人の墓をそのままにしておきました。

ヨシヤは神殿での礼拝を再開するために、補修工事を始めました。その時祭司ヒルキヤが神殿の中から律法の書を発見しました。律法の書がヨシヤの前で読まれた時、ヨシヤは自分の衣を裂き、ヒルキヤを女預言者フルダのもとに遣わしました。フルダは、ユダの王も民も律法を守らなかったため、律法に記されているすべての災いをユダの地と住民にもたらすことを告げました。そして、ヨシヤに対しては、彼が心を痛めて神の前にへりくだっているのです。彼は災いを見ることなく平安のうちに先祖のもとに集めると告げました。これを聞いたヨシヤはユダの住民に律法の書のことばを読み聞かせました。そして、主の前に契約を結び、主に従って主の命令を守ることを誓いました。ヨシヤが生きている間、ユダの民は主に従う道から外れませんでした。そして、神殿で過越のいけにえをささげました。(つづく)

73 . 南ユダ王国Ⅶ

【ヨシヤ】(つづき)ヨシヤの時代は、国際情勢にも動きがありました。ヨシヤが北イスラエルにまで宗教改革を行えたのは、アッシリアの勢力が衰えたからでした。アッシリアの都市アッシュルは前 614 年にメディアによって陥落しました。また首都のニネベは前 612 年にメディアとバビロンの同盟軍によって陥落しました。さらに前 609 年にアッシリアは戦いに敗れ、ハランに追放されました。その結果、ユダはアッシリアの属国の地位を脱し完全な自由を獲得しました。

一方、エジプト王ネコはアッシリアを援助するためにパレスチナを通して進軍しました。ヨシヤはアッシリアの存続を願わなかったので、エジプト軍を阻止しようとメギドに出陣しました。ネコは、「今はユダと戦うつもりはないので、軍を引くように」と伝えました。しかしヨシヤはネコの警告を聞かず、変装して戦いに出ました。そしてエジプト軍によって致命傷を負い、エルサレムで死にました。エレミヤはヨシヤのために哀歌を作り、全ユダはヨシヤのために喪に服しました。(Ⅱ歴代 35 章)

【エホアハズ】(前 609 年)ヨシヤの死後、彼の子エホアハズが王となり 3 か月間だけ治めました。彼は主の目の前に悪を行いました。エジプト王ネコはエホアハズを王位から退け、囚人としてエジプトに連れて行きました。そしてユダに科料を課しました。そして彼の兄弟エホヤキムを王として立てました。(Ⅱ歴代 36:1-4)

【エホヤキム】(前 609 年～598 年)エジプト王ネコによって王となったエホヤキムは 11 年間治めました。彼も主の前に悪を行いました。預言者エレミヤは神殿の庭に立って、住民にはバビロン捕囚を預言しました。神殿が破壊されるとエレミヤが預言すると、指導者たちはエレミヤを殺そうとしました。(エレミヤ 26 章)しかし、長老たちの何人かがエレミヤを弁護し、さらに優秀な政治家アヒカムがエレミヤを助けた結果、エレミヤは助かりました。一方、同じように預言をしたウリヤは王によって殺されました。

エホヤキムの第 4 年に、エレミヤの巻物が王の前で読まれました。すると、エホヤキムは巻物を切り裂き、火の中に投げ込みました。エホヤキムは悔い改めることをせず、主の警告を拒みしました。エホヤキムの第 4 年(前 606 年)に第 1 回バビロン捕囚が行われました。バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムを包囲しました。そして、神殿の器の一部と捕虜を連れてバビロンに戻って行きました。第 1 回捕囚でダニエルたちがバビロンに連れて行かれました。(ダニエル 1 章)エホヤキム自身もバビロンに引いて行かれそうになりましたがエルサレムに残り、やがてバビロンに反逆し、戦いで死んだと考えられています。(Ⅱ列王 24:1-2、Ⅱ歴代 36:6)

【エホヤキン】(前 598 年)エホヤキムの死後、彼の子エホヤキンが王となり、3 か月間治めました。彼も主の目の前に悪を行いました。彼の治世の時に第 2 回バビロン捕囚が行われました。ネブカドネツアルは神殿と王宮の財宝と 1 万人以上の民を捕囚としてバビロンに連れて行きました。エホヤキン自身も捕らえられ、この時の捕囚の中にはエゼキエルもいました。(エゼキエル 1 章)

【ゼデキヤ】(前 597 年～586 年)南ユダ王国最後の王がゼデキヤです。彼は 11 年間治めました。彼も主の目の前に悪を行い、エレミヤが告げる主のことばを拒否しました。エレミヤはバビロンの王に降伏して仕えれば、エルサレムの破壊は免れ、王も民も生きることができると預言しました。しかし、バビロンに反逆するように勧める偽預言者や指導者のことばにゼデキヤは従い、その結果、ネブカドネツアルがエルサレムを攻め、神殿も町も破壊され、ゼデキヤも剣を逃れた民もバビロンに捕らえ移されました。これが第 3 回バビロン捕囚です。こうして前 586 年に南ユダ王国は滅び、エルサレムの町は廃墟となりました。バビロンの王は残りの民を治めるためにゲダルヤを総督として立てました。しかしゲダルヤは殺され、バビロンを恐れる民はエレミヤを連れてエジプトに逃れました。(エレヤ 43:6-7)

7 4. アッシリア帝国 (前 934～605 年)

北イスラエルは前 722 年にアッシリアによって滅ぼされ、アッシリア捕囚となりました。また、南ユダは前 586 年にバビロンによって滅ぼされ、バビロン捕囚となりました。そして、前 538 年にペルシアのキュロス王によってユダヤ人の帰還が始まりました。このようにイスラエルは周りの帝国の影響を大きく受けました。神はそれらの国を用いてイスラエルをさばき、またイスラエルを再建されました。この時代の世界情勢を理解することによって、聖書の出来事をよりよく理解することができますので、アッシリア、バビロニア、ペルシアの 3 つの帝国を見てみましょう。まずアッシリア帝国です。

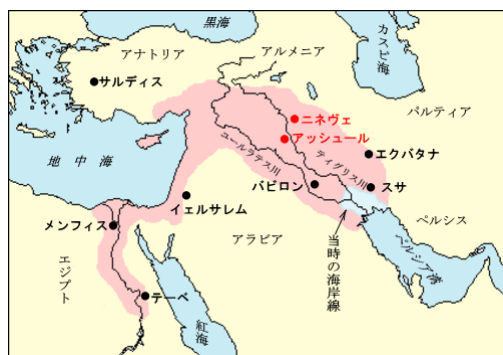
前 8 世紀にメソポタミアとエジプトを支配したアッシリアは、最初の世界帝国となりました。ティグラト・ピレセル 3 世(前 745～727)は、強大な軍事力を整えて領土拡大に努め、服従した国は属国として支配し、抵抗した国は滅ぼして属州としました。また、征服した民を遠隔地に連れ去るという政策を取り入れ、軍事力による過酷な支配を行い、諸国を恐れさせました。

前 732 年にはアラムを征服し、前 729 年にはバビロンを征服してメソポタミアを統一しました。ティグラト・ピレセル(プル)がイスラエルに攻めて来た時、メナヘムは銀千タラントを与えたのでプルはアッシリアに戻りました。プルはペカの時代にイスラエル北部を占領し、住民の一部を捕囚としました。(Ⅱ列 15 章)次にシャルマネセル 5 世(前 727～722)が王となり、ホセアの時代にイスラエルに攻めて来ました。そして、サルゴン 2 世(前 722～705)が王になった前 722 年にサマリアが陥落し、北イスラエルは滅びました。イスラエルの民は捕囚となってアッシリアに連れて行かれ、代わりに支配地の諸民族をサマリアに移住させました。(Ⅱ列 17 章)

センナケリブ(前 705～681)が王になると、南ユダに攻めて来ました。この時の王がヒゼキヤでした。ヒゼキヤはイザヤに祈りを要請し、ヒゼキヤも神に助けを祈りました。神は祈りに応えてくださり、主の御使いがアッシリア軍を滅ぼしました。(Ⅱ列 19 章)アッシュール・バーン・アプリ(前 669～631 年)がエジプトを征服したことによって、全オリエント世界が統一的に支配され、メソポタミアとエジプトという二大文明圏を含む、最初の世界帝国を完成させました。この間、南ユダにとってもアッシリアは脅威でした。マナセはアッシュール・バーン・アプリが王の時に、アッシリアに捕らえられたと考えられています。(Ⅱ歴 33:11)

アッシュール・バーン・アプリの死後、アッシリアは急速に衰えていきます。理由は、アッシリアの軍事力による支配が過酷だったので、被支配者の諸国民が反発していったからです。バビロンにはカルデア人による新バビロニアが台頭し、東部のイラン高原にはメディアが自立し、エジプトでも第 26 王朝が復興しました。そして、前 612 年、新バビロニアとメディアの連合軍によってアッシリア帝国の首都ニネベが陥落しました。アッシリアはその後ユーフラテス河畔のカルケミシュに遷都しました。エジプトはアッシリアと同盟を結び、バビロニアと戦うために南ユダを通過しようとしています。ファラオ・ネコ 2 世はヨシヤに通過の許可を得ようとしませんが、ヨシヤは許可せず、メギドでネコと戦います。そして、ヨシヤは戦死しました。この戦いが前 609 年のメギドの戦いです。(Ⅱ歴 35 章)

前 605 年、ネブカドネツアル 2 世が率いる新バビロニア軍は、アッシリア・エジプト連合軍とカルケミシュで戦い、バビロニアが勝利し、こうしてアッシリアは滅びました。この戦いはカルケミシュの戦いと言います。この戦いの後、エジプトは大国として再び浮上することはありませんでした。



75. 新バビロニア帝国(前 626～538 年)

アッシリア滅亡後、オリエント世界を支配したのが新バビロニア帝国です。聖書におけるバビロンとは新バビロニア帝国を指しています。バビロンは新バビロニア帝国の首都なので、新バビロニア帝国はバビロンと呼ばれました。前 626 年にナボポラッサル(前 626～605 年)がバビロンの王になり、バビロニアの都市をアッシリアから徐々に奪い返していきました。そして、前 612 年にメディア王国と同盟を結んでアッシリアの首都ニネベを陥落させました。これをニネベの戦いと呼びます。前 605 年、ナボポラッサルは長男ネブカドネツアル 2 世をシリア・パレスチナ制圧のために送ります。ネブカドネツアルが率いるバビロン軍は、アッシリア・エジプト連合軍とカルケミシュで戦い、バビロンが勝利し、こうしてアッシリアは滅びました。この戦いはカルケミシュの戦いと言います。

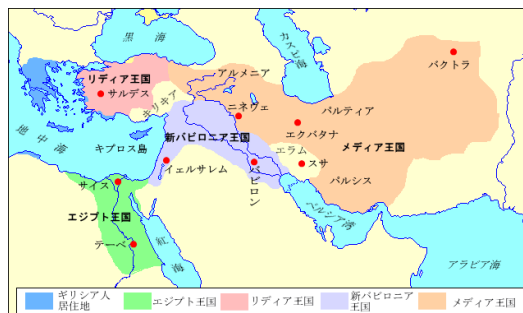
前 605 年にナボポラッサルは急死し、ネブカドネツアル(前 605～562 年)がバビロンの王に即位しました。ネブカドネツアルはその後も、シリア・パレスチナ制圧のために遠征を繰り返し、次々に掌握していきます。前 606 年、エホヤキムの第 4 年にネブカドネツアルはユダを攻め、第 1 回バビロン捕囚が行われました。この時の捕囚でダニエルたちがバビロンに連れて行かれました。ダニエルはネブカドネツアル、ベルシャツアル、ダレイオスに仕えました。(ダニエル書) また神殿の器の一部がバビロンに持って行かれました。また、エホヤキム自身もバビロンに連れて行かれそうになりますがエルサレムに残り、やがてバビロンに反逆し、戦いで死んだと考えられています。(Ⅱ列王 24:1-2、Ⅱ歴代 36:6)

エホヤキンが王になると再びネブカドネツアルがエルサレムを包囲して攻めました。エホヤキンがネブカドネツアルに降伏したため、エホヤキンはじめ一万人以上の民が捕囚となり、神殿と王宮の財宝とともにバビロンに連れて行かれました。これが前 598 年の第 2 回目のバビロン捕囚です。この時の捕囚の民の中にエゼキエルがいました。(エゼキエル 1 章)

ゼデキヤが王になるとバビロンに反逆しました。そこで、ネブカドネツアルは全軍を率いてエルサレムに攻めてきました。そして前 586 年ネブカドネツアルはエルサレムの神殿、王宮、およびすべての家を焼き、エルサレムは陥落しました。ゼデキヤは捕らえられ、ユダの住民とともに捕囚の民となってバビロンに連れて行かれました。これが第 3 回バビロン捕囚です。この時、神殿の器はすべてバビロンに持っていかれました。ネブカドネツアルはゲダルヤを総督として任命し、ユダを治めさせました。しかし、ゲダルヤは殺され、バビロンを恐れる民はエレミヤを連れてエジプトへ逃げました。(エレミヤ 43:6-7)

ネブカドネツアルの時代が新バビロニア帝国の最盛期でした。ネブカドネツアルの死後、バビロンは政治的に不安定な状態になりました。ネブカドネツアルの息子アメル・マルドゥク(前 562～560 年)が即位しますが、2 年後にネブカドネツアルの娘婿ネリグリッサルに暗殺されました。ネリグリッサル(前 560～556 年)が治めた後、彼の息子が即位しますが、ナボニドゥスによるクーデターで暗殺されました。

ナボニドゥス(前 556～536 年)は即位後 10 年間アラビアに滞在し、その間息子のベルシャツアルにバビロンを治めさせました。前 541 年頃バビロンに戻ると神殿改革を行い、月神シンをバビロニアの神マルドゥクの代わりに最高神としたことが、バビロニア住民の反感を買いました。そして、アケメネス朝ペルシアのキュロス 2 世が、この住民の反感を利用し、ナボニドゥスは部下に捕らえられ、前 539 年にバビロンに無血入城することができました。そして前 538 年に約 90 年続いた新バビロニア帝国は滅びました。



7 6. アケメネス朝ペルシア (前 550～330 年)

ペルシア人のアケメネス家のキュロス 2 世(前 550～529 年)が、前 550 年にそれまで服従していたメディア王国を滅ぼし独立しました。それ以後、前 330 年まで続くアケメネス朝ペルシアがペルシア帝国とも呼ばれ、聖書に出て来るペルシアはアケメネス朝ペルシアのことです。キュロスは前 546 年に現在のトルコを支配していたリディア王国を滅ぼしました。次いで前 538 年に新バビロニア帝国を滅ぼしました。そして、新バビロニア帝国によってバビロン捕囚となったユダヤ人を解放し、ユダヤに帰還して神殿を再建することを許可しました。

それまでオリエントを支配したアッシリアやバビロニアは、征服した民を遠隔地に連れ去るという政策を取り入れ、軍勢力による過酷な支配を行いました。しかし、ペルシアの王となったキュロスは、被征服民が忠誠を誓うかぎり、彼らが自分たちの習慣や宗教に従うことを許す宥和政策を取りました。彼はバビロンに捕囚となっていた諸国民を解放し、持ち込まれていた偶像をそれぞれの地方の神殿に返しました。ユダヤ人に対しては神殿器具を持ってエルサレムに帰り、神殿を再建することを許しました。(エズラ 1 章)このキュロスによる解放をイザヤは名指しで預言し、エレミヤも捕囚の解放を預言し、そのとおり成就しました。(イザヤ 45 章、エレミヤ 29 章)

キュロスの息子のカンビュセス(前 529～521 年)は前 525 年にエジプトを征服し、ペルシアの支配がオリエント全土に及びました。ダレイオス 1 世(前 521～486 年)の時、ペルシアは全盛期を迎えます。ダレイオスはそれまで中断していたエルサレム神殿再建の許可を与え、その結果、神殿が完成しました。(エズラ 6 章)クセルクセス(アハシュエロス 前 486～465 年)の王妃となったのがエステルです。ハマンによるユダヤ人虐殺計画をエステルはやめさせ、逆にユダヤ人の敵を滅ぼすことができ、その勝利をプリム祭として祝うようになりました。(エステル記)

アルタクセルクセス(アルタシャスタ 前 464～424 年)の時に、学者エズラがバビロンからエルサレムにやって来て、ユダヤに帰還した民に律法を教えました。またネヘミヤはアルタクセルクセスの献酌官でしたが、王に願ってエルサレムに戻り、総督として城壁再建を行い、エズラとともに主に仕えました。それ以降、ペルシアの支配者とユダヤ人との間の記録は残っていません。ユダヤはペルシア帝国の一つの州として総督によって統治されました。

ペルシア帝国は中央集権体制を取り、国内を 20 の州に分け、総督(太守)のもとで統治しました。ペルセポリスとスサが首都とされ、ペルセポリスでは主な宗教行事を行い、スサは実際の政治の中心となりました。東西に幹線道路の王の道を設け、港湾を整備し、貨幣の鑄造、度量衡の統一などを行いました。ゾロアスター教を信仰しましたが、各地の他宗教に対しても寛容でした。また他民族の文化や生活習慣にも寛容で、公用語はペルシア語でしたが、様々な言語と文字が使用されていました。(エステル 3:12)また商業活動に従事したアラム人が使用するアラム語とアラム文字も、広く共通語、共通文字として使用されました。アラム語はやがてユダヤ人の日常語となり、イエスの時代もユダヤで使用されていました。

前 334 年に始まるマケドニアのアレクサンドロス大王の東方遠征が始まると、ペルシア軍は劣勢に立たされました。ダレイオス 3 世が率いるペルシア軍は前 333 年のイッソスの戦い、前 331 年のアルベラの戦いで敗れ、前 330 年にはペルセポリスが陥落し、ダレイオスは捕らえられて殺害され、こうして前 330 年にペルシア帝国は滅亡しました。



7.7. 捕囚がユダヤ人の生活と宗教的思想に与えた影響

(わかりやすい旧約聖書の思想と概説〈中〉西満著 pp. 208～214 より抜粋)

バビロン捕囚がユダヤ人の生活と宗教的生活に与えた影響で、見過ごすことができないことが5つあります。

1. ユダヤ人は偶像礼拝の罪とその罪の重さを知らされた。

国が破れ、神殿が破壊され、王も貴族も祭司も主だった者がすべてバビロンに捕囚の身となったのは、自分たちの偶像礼拝と主に逆らった罪のためであったことを悟りました。バビロンに連れて来られた彼らは、かつてのエルサレムの栄光と神殿のすばらしさを思い出して泣きました。(詩 137 篇)そして、そこから真の悔い改めが始まりました。第2回捕囚でバビロンに連れて来られたエゼキエルは、バビロンの地で預言しました。エルサレムが陥落すると、ユダの復興に対する神のご計画に目を向けて、神の恵みにすがって生きることと、律法を守って生きることの大切さを教えました。

2. 聖なる文書の収集とその正典化への道が始まった。

捕囚の民は、神のみ旨を正しく知るために、モーセ五書の収集と研究を始めました。またイザヤ、エレミヤ、エゼキエルその他の預言者たちの書いた巻物も熱心に読むようになりました。ダニエル 9:2 には、すでにこの時代にエレミヤ書の写しが、バビロンやペルシアに出回っており、ダニエルも読んだことが記されています。歴史書や詩篇も収集され、読まれました。最終的な旧約聖書の完成まではもう少しの時間の経過が必要でしたが、捕囚期に聖霊の導きにより、正典の結集が始まり、完成へと導かれていきました。

3. 学者階級の出現を促し、律法学者が出現した。

聖なる文書の収集とその正典化の過程で、律法を研究する律法学者が出現しました。ユダヤにはもともと律法や歴史などを筆写する書記が存在しました。神殿がなくなった後は祭司たちも職を失い、書記の仕事を行うようになりました。律法回帰運動の中で、書記たちの仕事も増え、彼らは律法を筆写するとともに、真剣に律法を研究し、その中から律法学者が生まれました。エズラはこのような律法学者の中でも群を抜いた学者でした。「このエズラがバビロンから上って来たのである。彼はイスラエルの神、主がお与えになったモーセの律法に通じている学者であった。」(エズラ 7:6)

4. ユダヤ人の日常使う言葉がアラム語になった。

国がなくなり、捕囚の生活をバビロンで送ることになって、日常生活ではヘブル語が使われなくなり、アラム語が用いられるようになりました。その結果、ヘブル語が口語から文語になったのです。このことは聖書の文体の保存という点で大きな役割を担うことになりました。聖書の言語が文語になることによって固定されることになったのです。口語は時代によって言語の表現が変わっていきますが、文語であれば時代によって変化することはなくなるからです。それによって神のことばが記録されている聖書が原文のまま保存されやすい状態になりました。

5. 会堂の制度が出現した。

神殿がなくなることによって、祭儀中心の宗教から律法を中心とする宗教に移行していきました。そして、律法や預言書などを教え、朗読し、神を礼拝する場所として会堂が各地に建てられるようになりました。ユダヤ人は安息日ごとに会堂に集まり、神を礼拝しました。また会堂は子どもたちへの聖書教育を施す教育の場として用いられました。ユダヤ人子弟への聖書教育は、ユダヤ教が幾多の厳しい迫害を乗り越えて、今日まで残るほど強固なものとなる要因となったのです。また会堂は、旅人に宿を提供し、コミュニティの交わりの中心的存在となりました。このように彼らの宗教は、会堂での律法を中心とする宗教に移行していきました。その後、エルサレムに第二神殿が建設されても、再び祭儀だけの宗教に戻ることはありませんでした。それは旧約の宗教がユダヤ教へと変化していくための大きな第一歩となったのです。

78. エルサレム再建 「あなたがた、だれでも主の民に属する者には、その神がともにいてくださるよう。その者はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。」(エズラ 1:3)

前 538 年にバビロニアを滅ぼしたキュロスは、ペルシア帝国の王となりました。キュロスはアッシリアやバビロニアとは違い、被征服民に対する宥和政策を取り、捕囚となっていた諸国民を解放しました。そしてバビロンに持ち込まれていた偶像をそれぞれの地方の神殿に返しました。ユダヤ人に対しては神殿器具を持ってエルサレムに帰り、神殿を再建することを許しました。こうしてイザヤ 45:13 のキュロスによる捕囚解放の預言が成就しました。

捕囚解放後の聖書の記述は、年代順には次のようになります。(1)エルサレム再建 エズラ 1-6 章(前 539-515 年頃)、(2)王妃エステル エステル記 1-10 章(前 483 年頃)、(3)改革者エズラ エズラ 7-10 章(前 457 年頃)、(4)総督ネヘミヤ 1-13 章(前 444 年頃)今から年代順に見ていきましょう。

まずエルサレムと神殿の再建についてです。エズラ 2 章の記録によると、キュロスの勅令を受けてエルサレムに戻った民は約 5 万人でした。大多数のユダヤ人はすでに生活が安定していたため、引き続きペルシアに残りました。キュロスは帰還民に神殿の器具を持たせました。ただし契約の箱はエルサレムの滅亡の際に失われたため、ありませんでした。契約の箱についての聖書の言及は、ヨシヤが宗教改革の際に神殿に据えた出来事以降はありません。(Ⅱ歴代 35:3)

エルサレムに戻った民はエルサレム近郊に定住しました。そして祭壇を築き、全焼のいけにえをささげ、礼拝を再開しました。翌年 2 月にゼルバベルとヨシュアの監督のもとに神殿再建工事を開始しました。それは第 1 神殿(ソロモン神殿)が破壊されてから 50 年目になります。工事が始まるとサマリアの役人たちが神殿を建てさせないように妨害しました。彼らの嫌がらせは、キュロス、カンビュセス、ダレイオスの時代まで続き、約 18 年間工事は中断されました。

ダレイオスの時代に、預言者ハガイとゼカリヤに励まされたゼルバベルとヨシュアは工事を再開しました。すると神殿再建を好ましく思わない総督タテナイたちが、ユダヤ人が主張するようにキュロス王が神殿再建の許可を与えたのかどうか調べてほしいと、ダレイオスに訴えました。ダレイオスが調べると確かにキュロスが許可を与えたことを保管文書で確認しました。そこで、ダレイオスはタテナイたちの妨害を禁止し、神殿工事を続けること、工事に必要な費用をシリヤ州の収入から割り当てるように命じました。またエルサレムの祭司たちがペルシア王の繁栄を祈るように日々の犠牲を十分に提供するように命じました。

こうして神殿は 5 年(前 520-515 年)かかって完成しました。神はキュロスとダレイオスというペルシア王の支援を用いられました。さらに帰還したユダヤ人の信仰によって、神殿が再建されました。この神殿は第 2 神殿またはゼルバベル神殿と呼ばれます。神殿内にはバビロンから持って来た器具を設置しましたが、至聖所には契約の箱はありませんでした。契約の箱は神殿が破壊された時に焼失したか、紛失してしまいました。ですから、毎年宥めの日(贖罪の日)には、大祭司が契約の箱のあった場所を示す石の板の上に、香の壇を置いたとのこと。十戒が納められた契約の箱が失われたことは、旧約時代から新約時代に移行するために準備期間ととらえることができ、ここにも神の摂理を覚えます。

神殿完成後、民は神殿奉獻式を行い、その後律法に従って祭司とレビ人が神殿での通常の務めを始め、翌月には過越の祭を守りました。神殿奉獻と過越の祭は、エルサレムの歴史的な出来事となりました。民はエジプトからの解放とともにバビロン捕囚からの解放を同時に喜びました。第 2 神殿は前 37 年にローマ軍によって破壊されますが、前 20 年頃からヘロデ大王によって修復工事が始まり完成まで 50 年程かかりました。イエスの時代はヘロデの修復した神殿が建っていました。

79. 王妃エステル「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

「私は王のところに参ります。私は、死ななければならないのでしたら死にます。」エステル4:14, 16

エステル記は、第2神殿がすでに完成し、エズラがエルサレムに帰還する約30年前の前483年頃の出来事です。ペルシアにはエルサレムに帰還しないユダヤ人が各地に住んでいました。エステルは神の摂理の中でクセルクセス(アハシュエロス)の王妃となりました。クセルクセスはギリシアと戦い、前480年のサラミスの海戦やスパルタとの戦いで敗れ、ペルシアに逃げ帰った王です。

ペルシアはペルセポリスとスサの二つの都を持ち、クセルクセスはスサの城ですべての首長や家臣たちを集めて大宴会を催しました。それはギリシア遠征を前にしての会議や家臣の士気を鼓舞するためでした。その際、王は酒の勢いで王妃ワシュティに王冠をかぶらせ、首長たちの前に出るようにと命じました。しかしワシュティは王妃としての威信を危うくすることを拒んで、王の命令を無視しました。王は怒りに燃え、側近の進言を受け、ワシュティを王宮から追放しました。

その後、新たな王妃を選ぶためにペルシア全国から娘たちが選ばれて、スサの城に連れて来られました。その中にエステルもいました。モルデカイはエステルに、自分の民族も生まれも明かしてはならないと命じました。それは反ユダヤ感情やそれから来る陰謀を引き起こさないための配慮でした。そしてついにエステルが王妃に選ばれました。モルデカイは、王宮の仕事に関わっていた人でした。ある時、王の暗殺計画を二人の宦官が立てていることを知ったモルデカイはエステルにそのことを伝えました。エステルはそのことをモルデカイの名で王に伝え、事実が明らかになり、二人は処刑されました。

王宮ではハマンが王の側近のだれよりも昇進し、王の命令によって王の家来はみなハマンに対して膝をかがめ、ひれ伏しました。しかし、モルデカイはハマンに対して膝をかがめず、ひれ伏しませんでした。理由はこのような行為が、支配者を神として認める意味があったからだと考えられます。怒りを燃やしたハマンは、モルデカイがユダヤ人であると知ると、ユダヤ人抹殺計画を立てました。そして王にユダヤ人が危険な民族であることを訴え、王の許可を得て、王の名によってユダヤ人抹殺の日を、各州の文字と各民族の言語でペルシア全土に伝えました。ユダヤ人抹殺の日はプル、すなわちくじによって選ばれました。

王の法令を知ったモルデカイは、着物を引き裂き、粗布をまとい、灰をかぶって悲しみました。また法令が届いたどの州においても、ユダヤ人に嘆きが起きました。エステルはモルデカイから、ハマンが作ったユダヤ人抹殺計画を知りました。モルデカイはエステルに対して王の所に行って、自分の民族のためにあわれみを求めるように訴えますが、エステルは王の招きなしに王の所に行くことの危険性を伝えました。モルデカイはエステルに対して、このような時のために王妃になったことの神の摂理を伝え、エステルはいのちをかけて王の所に行く決心をしました。

エステルが王のもとに行った時、王の好意を得ることができ、王とハマンを食事に招待しました。その日エステルは自分の願いを伝えず、翌日の食事にも招待し、その時に話すと王に伝えました。ハマンはその日モルデカイの処刑のための柱を作らせました。一方、その夜王は眠れず、年代記を読ませました。するとモルデカイが王の暗殺計画を伝えたことが読まれ、王はこのことでモルデカイにほうびを与えていないことを知りました。ちょうどその時やって来たハマンに対して、王が榮譽を与えたいと願うモルデカイに王服を着せ、王の馬にのせて、町を歩くようにと命じました。

その後、王とハマンは再びエステルの食事会に行きました。その時、エステルはハマンが自分と自分の民族を殺す計画を立てていることを王に伝えました。王は怒り、モルデカイを処刑するためにハマンが立てた柱にハマンをかけました。そして、ハマンが付けていた王の指輪をモルデカイに与えました。ユダヤ人抹殺の命令は、事実上取り消され、ユダヤ人が自分たちの敵に報復できる法令を全土に送りました。こうしてユダヤ人は滅びを免れただけでなく、自分たちの敵に対しても報いることができました。ユダヤ人はこの勝利を記念して、プル(くじ)にちなんでプリム祭を制定し、今日までプリム祭が祝われています。エステル記には神の名前が出て来ませんが、神の摂理とエステルやモルデカイの信仰によって、ユダヤ人が救われたことが記されています。

80. 改革者エズラ「このエズラがバビロンから上って来たのである。彼はイスラエルの神、主がお与えになったモーセの律法に通じている学者であった。彼の神、主の御手が彼の上にあったので、王は彼の願いをすべてかなえた。」エズラ 7:6

エズラ 6 章と 7 章の間には 58 年の時が経過しています。ペルシアの王は、エステルが王妃となったクセルクセスからアルタクセルクセスに変わっていました。祭司であり学者であるエズラはアルタクセルクセスの第 7 年(前 457 年頃)にバビロンを出発し、4 カ月かけてエルサレムに到着しました。エズラとともに約 1800 人の男子とその家族、38 名の祭司と 220 名の神殿奉仕者が帰還しました。エズラ 7-10 章は、1 年以内に起こった出来事が記されています。

アルタクセルクセスは、エズラのエルサレム帰還を支持し、エズラを支援する命令を与えました。王はエズラに対して、王からの贈物と捕囚の民からのささげ物をエズラに持たせました。さらに、神殿の務めに必要であれば王家の金庫から支出する権利を与えました。また、川向こうの州の役人たちに対して、エズラが求める必要を与え、神殿奉仕者に対する税を免除することを命じました。さらにエズラに対してさばき人(行政官)や裁判官を任命し、エズラが教える神の律法と王の法律を守らない者には刑を執行することができる権限も与えました。エズラは王の絶大な信頼を得て、エルサレムに帰還しました。

エズラの一行は、神殿のために献げる多額の金銀を運ぶことになっていました。金 100 タラント(3.6t)、銀 650 タラント(22t)、その他たくさんの金や青銅の器がありました。1600 キロの道中を援護なしで行くことは大変危険でした。しかし、エズラは王に軍隊の護衛を求めることを恥じ、道中の神の保護を求めるために出発前にアワハ川のほとりで全員で断食をして祈りました。神は彼らの祈りを聞き、無事エルサレムに着くことができました。「私たちの神の御手が私たちの上にあり、その道中、敵の手、待ち伏せする者の手から私たちを救い出してくださった。」8:31 エルサレムに着いた一行は全焼のいけにえをささげ、神を礼拝しました。そして王の命令書を総督たちに渡し、彼らはエズラとユダヤ人への援助を与えました。

その後エズラのもとに、指導者たちがやって来て、民や指導者が異国人の妻を迎えていることが知らされました。エズラは、自分の想像以上に帰還民が堕落している状況を知り、深い悲しみを表すために衣服を裂き、道義的な憤りと怒りを示すために髪の毛を抜いて、夕方までひざまずき、涙ながらに祈りました。「私の神よ。私は恥じています。私の神よ。私はあなたに向かって顔を上げることを恥ずかしく思います。私たちの咎は増し、私たちの頭より高くなり、私たちの罪過は大きく、天にまで達したからです。」9:6

エズラが泣きながら祈っていると、大勢の群衆が加わって共に泣きました。その時民の代表がエズラの改革に協力することを申し出ました。「立ち上がってください。このことはあなたの肩にかかっています。私たちはあなたに協力します。勇気を出して、実行してください。」10:4 エズラはこの言葉に励まされ、立ち上がって指導者たちに服従の誓いをさせました。そして、3 日後に全会衆を集め、彼らの罪を指摘し、異国人の妻を追い出すようにと伝えました。全会衆は、エズラの言うとおりにすると答えました。しかし雨季であったので、エズラは代表を立て、彼らによって罪ある者を調べさせることにしました。

調査の結果、111 名ほどの人が異国人の妻をめとっていたことが分かりました。その中には大祭司ヨシュアの息子たちもいました。また異国人の妻との間に子をもうけていた人たちもいました。エズラはこれらの妻と子たちを追い出しました。ユダヤ人が神の民として、偶像から切り離された生活を守るためには、思い切った改革が必要だったのです。そうしなければ、ユダヤ人は再び神のさばきを受けて国を追われることになることをエズラは知っていました。離婚問題の解決はエズラの改革の手始めでした。エズラの最終目的は「主の律法を調べ、これを実行し、イスラエルで掟と定めを教える」ことにあり(7:10)、彼の働きはネヘミヤ記で継続しています。

8 1. 総督ネヘミヤ「わが神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくださった。」
ネヘミヤ 2:8

ネヘミヤが前 444 年にエルサレムに到着した時、エズラはすでにエルサレムで 13 年過ごしていました。それまでネヘミヤは、アルタクセルクセスの献酌官として王に仕えていました。アルタクセルクセスはエズラに帰還の許可と寛大な支援を与えた王です。また献酌官とは、王の食卓に出される酒や食事の毒見役であるとともに、王の信頼を得る高い地位にある王の側近です。ある時、ユダヤから数人のユダヤ人がやって来て、ネヘミヤにエルサレムの窮状を伝えました。それを聞いたネヘミヤは数日間嘆き悲しみ、断食してイスラエルの罪を告白して祈りました。

3 か月後、王の給仕をしていた時に、王がネヘミヤの顔が沈んでいるのに気づき、理由を尋ねました。ネヘミヤは自分の郷里の都エルサレムが廃墟となったままであることを告げ、黙祷した後、エルサレムに戻って町を再建させてほしいと王に願いました。神の御手がネヘミヤにあったので、王はネヘミヤの願いをかなえ、町の再建に必要な資材を与えるように川向こうの総督たちに命じる手紙を書いてくれました。ネヘミヤはユダ州の総督として任命され、軍の高官たちと騎兵たちに守られてエルサレムに到着しました。

ネヘミヤは町を視察した後、民に対して城壁再建を呼びかけ、民は仕事に着手しました。しかし、サンバラテ、トビヤ、ゲシエムという周りの州の指導者たちは、城壁再建を良く思わず、妨害し始めました。まず王に反逆していると非難しました。次に予想以上に工事が進んでいると知ると、彼らはエルサレムを攻撃する計画を立てました。そのため、ネヘミヤは見張りを配置し、警備体制を強化しながら、工事を進めました。さらにネヘミヤをおびき出して彼のいのちをねらおうと何度も試みましたが、失敗しました。すると今度は偽預言者をとおして神殿の中に誘い込もうとしましたが、ネヘミヤはこれを見破り、誘いに応じませんでした。

問題は内側からも起こりました。城壁工事中、貧しい人たちは経済的困難に陥りました。工事に携わりながら、生活費を稼ぎ、税金や利息を払い、家族を養うことが困難になりました。ある人たちは、子どもを奴隷として売らなければならないほどになり、強い抗議の声が上がりました。ネヘミヤは民を集め、有力者や代表者を非難し、利息分を返すように訴えました。彼らは利息分を返す約束をし、貧しい人たちの生活が守られました。またネヘミヤも貧しい人たちに貸していたものを帳消しにし、12 年間総督としての手当てを受け取りませんでした。

こうして工事は順調に進み、52 日間で完成しました。ユダヤ人の敵は面目を失い、周囲の国々は、この工事が神によって成されたことを知りました。城壁完成後、エズラとレビ人たちが民の前で律法を朗読し、その意味を説明しました。律法の意味を理解した民はみな泣きました。ネヘミヤとエズラは「悲しんではならない。主を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ」と民に言い、喜ぶように伝えました。そして、仮庵の祭りときよめの祭り、そして罪の告白が行われました。

ネヘミヤは民の指導者たちと律法を守る盟約を結びました。その中で安息日の順守と神へのささげ物を行って神殿をなおざりにしないことが約束されました。またエルサレムに住む者が少なかったため、くじによって人口の十分の一がエルサレムに住むようにしました。そして、城壁の奉獻式が盛大に行われました。二組の聖歌隊が城壁を一周し、神殿で一つになり、大合唱が行われ主を賛美しました。喜びの声ははるか遠くまで聞こえました。

ネヘミヤは城壁再建 12 年後に、エルサレムを離れしばらくバビロンに戻りました。そして王にいとまを乞い、再びエルサレムに戻ると、恐るべき反動が起きていました。大祭司エルヤシブが城壁再建を邪魔したトビヤに神殿の一室を提供していたのです。ネヘミヤはトビヤを追い出し、神殿をきよめました。また安息日が守られず、物が売り買いされていたので、これもやめさせました。さらに異国人の妻をめとっている人たちもいたため、彼らを責めました。ネヘミヤ記は「私の神よ。どうか私を覚えて、いつくしんでください」というネヘミヤの祈りで終わっています。ネヘミヤは絶えず祈りながら、改革を進めました。

82. ヨブ記「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを。」19:25

ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌の5つの書物は、旧約聖書の詩書に分類されます。有名な書物ですが、ヨブと友人の長い論争があり、読みづらい書物でもあります。ヨブは実在した人物で、エゼキエル14:14, 20にノアとダニエルとともに記されていますが、ヨブ記には時代背景は記されていません。ヨブ記の内容からヨブは族長時代の人物であり、ソロモン時代にヨブ記としてまとめられたと考えられています。

ヨブ記は、正しい者がなぜ苦しむのかという普遍的なテーマをヨブという個人的な経験から取り上げています。しかし、その問いに対する答えは、明確に記されていません。ヨブ記を通して教えられることは、苦難の意味を「なぜ」と問うても、人間には隠されているということです。しかも主権者なる神は、人間にその意味を説明する必要はありません。けれども、神は苦難の中にある人を覚えておられ、人は苦難の中でも神に信頼すべきであり、苦難の中で神の語り掛けを聞く時に、人生の解決を与えられるということです。苦難の中で問うべきは「なぜ」ではなく「どのように生きるべきか」です。そしてその答えを神に祈り、聖書から聞くことです。ヨブは最後に神のことばを聞いて、神の前に悔い改め、神はヨブの人生に2倍の祝福を与えられました。

ヨブ記の構成は、序論:ヨブの苦しみの始まり(1-2章)、本論:ヨブと友人の論争と神の語り掛け(3章-42:6)、結論:ヨブの後半の人生の祝福(42:7-17)です。序論ではサタンが神に「ヨブは理由もなく神を恐れているのでしょうか。」と言い、ヨブは神の祝福を受けているので神を信じているのであり、彼の財産を打てばヨブは神をのろうと訴えました。神はサタンにヨブの財産を打つことを許可します。神はヨブの神への真実な信仰を知っておられたからです。サタンがヨブの財産と子どもたちを打つと、ヨブは「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」と言って、神に信頼し神を賛美しました。

サタンは次にヨブのからだを打つことの許可を神から受け、ヨブの全身は悪性の腫物で打たれました。妻はヨブに「神を呪って死になさい」と言いますが、「私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざも受けるべきではないか」と言って、神に信頼しました。サタンは人間の信仰は突き詰めればみなご利益信仰であり、神の栄光のためにのみ神を信じる信仰はあり得ないと考えました。しかし、神はヨブの信仰を通して、神の栄光のためにのみ神を信じる信仰はあり得ることをサタンに示されたのです。

その後、ヨブと3人の友人エリファズ、ビルダテ、ツォファルとの論争が3回繰り返されます。友人たちの主張は、ヨブの苦しみの原因はヨブの罪にあるとし、罪を告白し悔い改めるように説き続けます。友人たちの苦難の理解は因果応報でした。罪の結果として苦難があるとの考えで、そこから離れることができませんでした。それはイエスの時代にもユダヤ人の中にありました。(ヨハネ9:1-3)それに対してヨブは自分の潔白を主張し、だれにも理解されずに苦しむことのつらさを訴えます。ヨブは自分の生まれた日を呪いますが、神を呪うことはありませんでした。ヨブと3人の論争はついに行き詰まり、ヨブのことばも終わりました。最後に若者エリフが語ります。エリフのことばは他の3人とは違い、神は教師として人を訓練されると語りますが、依然としてヨブをさばく側に立ちました。

ヨブが19章で語る言葉によって、聖書の「贖い」の真理がより明確にされました。ヨブは「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを」と語りました。ヨブが語った「贖う方」は、ルツ記では「買い戻しの権利のある親類」と訳され、原語は共にゴエールです。ヨブのような状況にあっては、買い戻しの権利のある親類がどんなにお金を払ってくれても何の役にも立ちません。ヨブにとっての贖う方、ゴエールは神以外にはいませんでした。しかも、その贖う方は、ついには土のちりの上に立たれるとヨブは言いました。「ついには」とは終末の日のことで、「ちり」は墓を表しています。これはやがて墓からよみがえらせる贖い主イエスを預言しているのです。ヨブ記は、イエスこそ私のゴエール、贖い主という新約の救いの計画につながっているのです。ヨブの贖う方への信仰は、私たちの贖い主イエスへの信仰に通じるのです。

83. 詩篇

詩篇は、旧約聖書のどの書よりも多くの人に好まれ、公同礼拝においても用いられてきました。詩篇の記者が個人的なこととして語り、祈ることは、私たちに共通する事柄であり、詩篇を通して神への信仰を教えられ、神への祈りと賛美に導かれます。詩篇は 150 篇から成り、次の 5 区分に分けられています。第 1 巻：1～41 篇、第 2 巻：42～72 篇、第 3 巻：73～89 篇、第 4 巻：90～106 篇、第 5 巻：107～150 篇。これらの区分の最後は頌栄で終わり、最後の 150 篇は詩篇全体の結びの頌栄となっています。

150 の詩篇のうち、約 3 分の 2 が表題によって作者がわかります。残りは作者不明です。73 篇がダビデ、12 篇がアサフ、10 篇がコラ人、2 篇がソロモン(72, 127)、1 篇がヘマン(88)、1 篇がエタン(89)、1 篇がモーセ(90)の作です。表題はその詩篇の成立の時や場所に関する情報や礼拝時の音楽上の指示を与えています。なおヘブル語聖書では表題から 1 節が始まります。新共同訳や聖書協会訳はヘブル語聖書と同じ節の付け方となっています。一方、新改訳、口語訳、文語訳は表題には節を付けず、本文から 1 節が始まります。新改訳などは英語訳聖書と同じ節の付け方をしています。

表題からもわかることは、詩篇は旧約時代の歴史的出来事の中で作られ、またイスラエルの礼拝の目的のために作られました。ですから、それらを新約の視点から、すなわちキリストによる救いの成就の視点から理解して読む必要があります。例えば都上りで歌われた「エルサレムの平和のために祈れ」は、クリスチャンにとっては共に礼拝を献げる教会の平和を祈ることに適用することができます。詩篇は内容によって主題別に次のように分類することができます。

①義人の祈り 17, 20, 25, 28, 40, 42, 55 篇ほか

「主よ。聞いてください。正しい訴えを。耳に留めてください。私の叫びを。耳に入れてください。私の祈りを。これらは欺きの唇から出たものではありません。」17:1

義人が神の助けを求めて祈ります。不安、心配、危険、弁解したい感情、信仰復興の願いに迫られて、身を低くして神を慕いあえぎ求めます。

②悔い改めの詩篇 6, 32, 38, 51, 102 篇ほか

「神へのいけにえは、砕かれた霊、打たれ、砕かれた心。神よ、あなたはそれをさげすまれません。」51:17
悔い改めの詩篇の多くがダビデのもので、彼は率直に自分の罪を告白して、神の赦しを祈りました。神は砕かれ悔いたたましいを受け入れ、罪を赦されました。

③賛美の詩篇 65, 95-100, 111-118, 146-150 篇

「ハレルヤ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。私は生きている限り、主をほめたたえる。いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌う。」146:1-2

詩篇の中で、賛美の詩篇が最も多くあります。神の創造のみわざを観察して神を賛美します。(8, 19 ほか) また収獲の感謝(65)、祭りの祝い(111-118)、「大ハレル」(146-150)などが神を賛美する歌として礼拝で用いられました。

④都上りの歌 120-134 篇

「『さあ、主の家に行こう。』人々が私にそう言ったとき、わたしは喜んだ。エルサレムよ。私たちの足は、あなたの門のうちに立っている。」122:1-2

イスラエルの三大祭り(過越の祭、仮庵の祭、七週の祭:ペンテコステ)の時、イスラエルの民がエルサレムに巡礼する時に歌われました。彼らは神殿で礼拝することを心から喜びました。

⑤歴史の詩篇 78, 105, 106 篇ほか

「エジプトは彼らが出て行ったとき喜んだ。エジプトに彼らへの恐怖が下ったからだ。主は、雲を広げて仕切りの幕とし、夜には火を与えて照らされた。」105:38-39

神が過去にイスラエルを取り扱われたことを回顧し、イスラエルに与えられた奇跡的な救いや神の恵みを覚えます。またイスラエルの罪を思い出して、教訓とします。

⑥メシア詩篇 22, 110 篇ほか

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」22:1

作者の経験から作られた詩篇が、神の靈感のもとでメシアを預言する内容となっています。やがてイエスが来られた時に、イエスにあって成就したことが分かりました。

⑦アルファベット詩篇 25, 34, 111-112, 119 篇ほか

「幸いな人よ、全き道を行く人々。主のみ教えに歩む人々。」119:1

ヘブル語のアルファベット順に書かれている詩篇です。その中でも 119 篇は 22 のアルファベットが順番にそれぞれ 8 節からなる 1 組を作り、全体で 176 節(8 節×22)となっています。

84. 箴言

箴言は、神の民が律法に従ってどのように生きて行けばよいかを、知者の格言によって教えています。箴言の各部分に記されている表題によって、著者がわかります。①ソロモンの箴言 1 章～22:16 ②知恵ある者たちのことば 22:17～24 章 ③ソロモンの知恵 25～29 章 ④アグルのことば 30 章 ⑤レムエルのことば 31 章。なお 25 章～29 章のソロモンの知恵は、「ユダの王ヒゼキヤのもとにある人々が書き写したものである」と 25:1 にあります。ヒゼキヤの治世は前 728～686 年です。一方ソロモンの治世は前 971～931 年ですので、ソロモンよりも 200 年以上後に書かれました。箴言の大部分を書いたソロモンは、神から豊かな知恵と英知を与えられ、三千の箴言を語り、千五百首の歌を歌いました。(1 列王 4:29, 32)

箴言が書かれた目的が 1:2-6 に記されています。「これは、知恵と訓戒を知り、悟りのことばを理解するため、義とさばきと公正において、訓戒を受けて、さとなるため、浅はかな者を賢くし、若い者に知識と思慮を得させるためのもの。知恵のある者は聞いて洞察を深め、分別のある者は導きを得る。」そして 1:7 に箴言のキーワードが出てきます。「主を恐れることは知識の初め。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」9:10 にも「主を恐れることは知恵の初め」とあります。「初め」は出発点または本質という意味を持つ言葉です。箴言が教える真の知恵は、神との正しい関係から始まり、そこに知恵の本質があります。本当の知者は、この世界の主権者なる神を恐れ、神への信仰を土台としてすべてのことを正しく位置付けている人です。ですから、神を恐れない人は知恵のない愚か者なのです。

1:8-9:18 は知恵が擬人化され、父が子に教えるように「わが子よ」と呼びかけて若者を教えます。愚かな道に行かないように警告し、性的罪、悪友、その他の誘惑の危険を指摘します。そして主に頼り頼み、主を認めて生きる知恵の幸いを教えます。「わが子よ。私の教えを忘れるな。心に私の命令を保つようにせよ。…心を尽くして主に頼り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの道をまっすぐにされる。」3:1, 5, 6

10:1-22:16 には 375 節のソロモンの箴言が記されています。富、誠実、律法の順守、話しぶり、正直、傲慢、刑罰、報酬、政治、いろいろ、社会、家庭、名声、性格など人生のあらゆる局面が教えられています。また多くの節が対句を成す並行法が用いられ、覚えやすくなっています。10-15 章は主に反意的並行法が用いられています。「知恵のある子は父を喜ばせ、愚かな子は母の悲しみとなる。」(10:1) 16-22 章では同義型並行法も用いられています。「人の口のことは深い水。知恵の泉は湧いて流れる川。」(18:1) また 20:13 のような合成型並行法もあります。「眠りを愛するな。貧しくならないために。目を開け。そうすればパンに満ち足りる。」

22:17-24:34 は教訓的な三十句を中心に教えられています。圧制の危険、王の食卓での礼儀、愚か者を教える愚かさ、神への恐れ、酩酊、知恵の益などが、それまでの対句より長い文章で、教師対生徒形式で教えられています。「心のうちで罪人をうらやんではならない。いつも、ただ主を恐れていよ。あなたには確かに将来がある。あなたの望みは絶たれることがない。」23:17-18(三十句の 14 番目) 26:11 は比喩的並行法を用いています。「犬が自分の吐いた物に戻って来るように、愚かな者は自分の愚かさを繰り返す。」

25-29 章のヒゼキヤの属する人々によって収集された箴言は、セナケリブの敗北とヒゼキヤの宗教改革による影響があったと考えられます。それらの箴言は愚か者の行動を取り上げ、王や家臣に対して忠告を与えています。人生のいろんな機会に愚か者は愚かさを表す一方、知恵のある人は知恵を表します。「事を隠すのは神の誉れ、事を探るのは王たちの誉れ。」(25:2) 「愚かな者は感情のすべてをぶちまけ、知恵のある人はそれを内に治める。」(29:11)

30 章は無名の著者アグルの言葉です。アグルは人間の限界と神のことばの導きの必要を説きます。彼は二つ、三つ、四つものをあげて実際の教訓を与えます。「地は三つのことによって震える。いや、四つのことに耐えられない。奴隷が王となり、愚か者がパンに満ちたり、嫌われた女が夫を得、女奴隷が女主人の代わりとなることだ。」(30:21-23)

31 章はマサの王レムエルが母から受けた戒めの言葉です。母は息子の王に対して、王の責務についての教訓を教えています。「レムエルよ。これは王がすることではない。ぶどう酒を飲むことは王がすることではない。強い酒を飲むことは君主がすることではない。」(31:4) 31:10～31 はヘブル語の 22 のアルファベット順に語られるいろは歌の形式による、しっかりした妻についての教えです。箴言には悪い女がしばしば登場しますが、最後は主を恐れる知恵を持つ女性が描かれます。「麗しさは偽り。美しさは空しい。しかし、主を恐れる女はほめたたえる。」(31:30)

85. 伝道者の書

この書のタイトルは1:1の「エルサレムの王、ダビデの子、伝道者のことば」です。伝道者はヘブル語ではコヘレトと言い、新共同訳と聖書協会訳は本書を「コヘレトの言葉」と呼びます。コヘレトは「集会を招集し、演説する人」という意味があり、そこから講演者、教師、伝道者という言葉が出てきます。けれども、今日の教会における「伝道者」とは違うことを理解しておく必要があります。著者はエルサレムの王、ダビデの子なのでソロモンです。この書はソロモンが神を抜きにして人生の満足を得ようとした彼の自伝です。そしてソロモンは、自分の経験を通して、神を抜きにして人生の満足を求めることの愚かさをこの書で教えました。

この書の構成を3つに分けることができます。序論：神なき人生の空しさ 1:1-3、本論：人生の意味と満足の探求 1:4-12:12、結論：神を恐れ、神の命令を守れ 12:13-14 序論では鍵となる言葉が二つ出てきます。一つは「空」です。「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。」「空」は37回出てきます。これは神なき人生の空しさを伝える言葉です。一方、般若心経にある「色即是空」という仏教の教えとは意味が違います。「色」は「この世のすべてのもの」、「即是」は「すなわち」、「空」は「何も無い」という意味で、この世のすべての物は実体がないことを表します。一方、聖書は、神も神が造られたすべての被造物も実体があると教えています。本書が教えることは、人は神から離れて、自分の力や知恵で人生の満足を得ようとしても、決して満足を得ることができず空しいということです。

もう一つの鍵のことばは「日の下で」です。「日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。」「日の下で」は29回出てきます。伝道者は地上のこと限定で人生の満足を追求しようとしていました。神を抜きにして人生を考えれば、死んだら自分の存在もおしまいとなります。そこで、伝道者は日の下で生きている間で、人生の満足を得ようと試みました。けれども、日の下の事柄だけに取り組んでも、人は空しさを感じます。なぜなら私たちには死後の永遠の世界があるからです。

伝道者は、神抜きでこの世の満足を得ることができるかを様々な方法で試しました。そのことが、本論に記されています。1章：自然界や歴史、知恵、2章：快樂、物質主義、3章：神の定めた時、人と獣、4章：社会の不正、孤独、5章：宗教、富、6章：富、この世の矛盾、7-12章：道徳規範 そして伝道者は、どんな方法によって探求しても、神を抜きにしては空しいことがわかりました。そこで伝道者は、12:13-14で経験を通して得た彼の結論を教えます。「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。」

人間が空しい人生から解放されるためには、この世界を造り自分を造られた神を信じることがどうしても必要なのです。神を信じなかったら、人は日の下の見えるこの世の現象によってのみ、人生を見ることになります。そこには真の満足がありません。けれども、隠れたところを見ておられる神がおられ、人生の矛盾も社会の不正も、やがて神が正しくさばかれることを知るなら、この世で解決できないことも神にゆだねて生きることができます。そして自分の知恵や欲望に従って生きるのではなく、神の命令を守り、神が喜ばれる人生を歩む者となります。そして、この世の人生が終わって神の前に出る時には、神のさばきを逃れることができます。これが伝道者の結論でした。

伝道者の書は、確かに私たちの心を造り主なる神に向けてくれます。人生の空しさの原因が神抜きの人生から来ていることを私たちに教えてくれます。けれども「神を恐れ、神の命令を守る」だけでは、空しさから解放されないのも事実です。旧約の教えはキリストに導く養育係としての働きをしているのです。神を恐れ、神を信じることは必要です。けれども神の命令を守ろうとしても完全に守れず、むしろ神の前に罪人であることが示されます。そうすると私たちは神のさばきを受けることになります。そこで私たちにはイエス・キリストを信じる信仰による救いが必要であることが分かります。伝道者の書を通して、神抜きの人生の空しさを知り、神に対する悔い改めと、主イエスに対する信仰を持つ者は、人生の満足を得ることができるのです。

86. 雅歌

この書の書名は、ヘブル語聖書は「歌の中の歌」です。これは「最も優れた歌」という意味です。英語聖書ではソング・オブ・ソングズ(歌の中の歌)やソング・オブ・ソロモンとなっています。日本語聖書は漢訳聖書に倣って「雅歌」となっています。1:1に「ソロモンの雅歌」と記されていますので、伝統的にソロモンが著者であると考えられています。ソロモンの名前は7か所出てきます。王宮の贅沢な装いや広範囲なイスラエルの地名の言及なども、ソロモンの時代背景を表していると考えられます。ユダヤの伝承では、ソロモンは青年時代に雅歌を書き、壮年時代に箴言を書き、この世の生活に飽きた時に伝道者の書を書いたと言われています。

雅歌は聖書の中で最も解釈が難しい書物です。男女の愛の歌であり、神の名が用いられず、信仰的な内容もほとんどないため、様々な解釈が試みられてきました。主な解釈として次のものが挙げられます。①比喩的解釈：男女の愛の歌は実話ではなく、神とイスラエルの関係やキリストと教会の関係を教えるたとえ話である。②劇詩的解釈：雅歌を劇の脚本として解釈する。2人説(ソロモンとシュラムの女)と3人説(ソロモンとシュラムの女と女の真の恋人である羊飼いの若者)がある。③字義的解釈：ソロモンとシュラムの女の間に実際に起こった出来事と認め、神が与えた結婚関係の愛を語る詩歌として文字通り解釈する。

雅歌の解釈として、第3の字義的解釈が最もふさわしい解釈法と考えられます。神が結婚を制定されたことを覚える時、聖書の中に男女の愛と結婚が教えられていることはふさわしいことです。一方で字義的解釈においても、アウトラインやだれがどの個所を話しているかについては異なった理解があります。新共同訳や聖書協会訳は、話し手を記していますので参考になります。以下は新聖書注解におけるアウトラインです。

①1:1-2:7 花嫁と花婿の互いの愛情

婚礼の日の出来事が歌われます。花嫁シュラムの女と花婿ソロモンが互いに愛情を表す会話をしています。シュラムの女はぶどう畑の番人をしているために日焼けをしています。しかし、ソロモンは彼女の美しさをたたえます。彼女はソロモンを慕い、「あの方がわたしに口づけしてくださいたらよいのに」と言って、ソロモンとの婚礼の日を過ごします。2:7は3:5と8:4にも出て来る場面の移り変わりを示す言葉です。「エルサレムの娘たち。私は、もしかや野の雌鹿にかけてお願いします。揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛がそうしたいと思う時まで。」神は結婚した夫婦に性の喜びを与えられました。結婚まで待つことが神のみこころです。

②2:8-3:5 春の訪れ、花嫁の夢

婚約時代の出来事が歌われます。ソロモンはシュラムの女の住むガリラヤを訪れ、彼女に語りかけます。「わが愛する者、私の美しい人よ。さあ立って、出ておいで。」3:1-5はシュラムの女の夢です。彼女は夢の中でソロモンを探しますが、見つかりません。そしてついにソロモンを見つけ、自分の母の家に連れ帰ります。

③3:6-6:3 婚礼の行列、花嫁の第2の夢、エルサレムの娘たちと花嫁の対話

まず婚礼の行列が歌われます。そして王宮に着くと花婿は花嫁の美しさをほめます。5:2-6:3は花嫁の悪夢です。花婿は花嫁から去り、どんなに探しても見つからず、花嫁は夜回りたちに傷つけられます。そして夢から覚め、彼を見つけてほっとします。

④6:4-8:4 花婿と花嫁賛歌

花婿と花嫁は互いに愛を伝えます。7:11-8:3は花嫁が花婿にガリラヤに行って二人の愛を深めようと伝えます。「さあ、私の愛する方よ。私たちは野に出て行って、村で夜を過ごしましょう。」

⑤8:5-14 互いの愛の告白

二人は最初に出会った場所、ガリラヤのぶどう園で愛を確かめ合います。「愛は死のように強く、ねたみはよみのように激しいからです。その炎は火の炎、すさまじい炎です。大水もその愛を消すことができません。奔流もそれを押し流すことができません。」このような愛は、神の愛しかありません。夫婦の愛は神の愛を絶えずいただきながら、互いに育み合っていくのです。そして完全な夫婦の関係としてキリストと教会の関係が示されています。(エペソ5章)

87. イザヤ書（1）使信と使者 1章～6章

イザヤ書は多くの救い主の預言があり、旧約の福音書とも呼ばれ、旧約の中で最も多く新約に引用されています。1:1に「アモツの子イザヤの幻」とあるように、イザヤ書はイザヤが書いた書物です。また1:1でイザヤの預言者としての活躍は「ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代」であることが分かります。ここではイザヤ書の内容を「旧約聖書概観(シュルツ著)」のアウトラインに沿って8つに分けて見ていきます。

I. 使信と使者 1:1-6:13

1章から6章はイザヤ書の序文であり、後に展開する主題のほとんどが、まずここで語られています。この序文を理解することによって、残りの部分の理解を助ける基礎ができます。1章はイスラエルの罪深い道徳的状態を描いています。「天よ、聞け、地も耳を傾けよ。主が語られるからだ。『子どもたちはわたしが育てて、大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。』」(1:2)彼らの礼拝は形式的であり、彼らのささげ物には神への信仰が伴いません。彼らは信仰によって神のもとにあれば神の赦しを受ける希望があるが、神に反逆したままでは神のさばきを受けます。「さあ、来たれ。論じ合おう。―主は言われる―たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」(1:18)

2:1-5は終わりの日における絶対的平和が約束されています。その時エルサレムは回復し、平和と正義がシオンからすべての民に至ります。「多くの民族が来て言う。『さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてください。私たちはその道筋を歩もう。』それはシオンからみおしえが、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない。ヤコブの家よ。さあ、私たちも主の光のうちを歩もう。」(2:3-5)

2:6～3章は、再び偶像に信頼するイスラエルの現状を語ります。彼らが偶像に信頼し、罪の中に生活する限り、先に語られた希望は彼らに当てはまらず、神のさばきが待っています。「その地は偽りの神々に満ち、彼らは自分の手で造った物を、指で造った物を拝んでいます。こうして人間はかがめられ、人は低くされます。彼らを赦さないでください。」(2:8-9)

4章は、残りの者に対する救いが語られます。主に信頼する者は神のさばきときよめの過程を経て、残りの者としての神の祝福を受け、シオンの栄光にあずかる者となります。4:2で救い主を預言する「主の若枝」が出てきます。最終的には残りの者は救い主によって神の祝福を受け、シオンの栄光にあずかるのです。「その日、主の若枝は麗しい者となり、栄光となる。…シオンに残された者、エルサレムに残った者は、聖なる者と呼ばれるようになる。」(4:2-3)

5章はぶどう畑のたとえを通してイスラエルに対する神のさばきが語られます。ぶどう畑はイスラエルのことで、神はイスラエルに愛とあわれみを施しました。けれどもイスラエルは神に背き、不正を行い、神に立ち返りません。神の期待に背き、酸いぶどうができたのです。神はついにぶどう畑であるイスラエルをさばき、神の怒りがイスラエルに下ります。「彼はそこを掘り起こし、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。ところが、酸いぶどうができてしまった。」(5:2)「彼らが万軍の主のおしえをないがしろにし、イスラエルの聖なる方のことばを侮ったからだ。それゆえ、主の怒りはその民に向かって燃え、これに御手を伸ばして打つ。」(5:24-25)

6章はイザヤの預言者としての召命です。この箇所は序文のクライマックスです。イザヤはウジヤ王が死んだ年に、御座に着いておられる主を見ました。セラフィムが「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる」と主を賛美していました。イザヤは聖なる神の前で自分の罪を示され、死んでしまうとしました。するとセラフィムが祭壇の上から取った燃えさかる炭をイザヤの唇に触れさせ、あなたの罪は赦されたと言いました。主はイザヤに言われました。「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか。」イザヤは答えました。「ここに私がおります。私を遣わしてください。」イザヤの召命は神のイスラエルに対するあわれみを示しています。神はイザヤを遣わして、罪に対する神のさばきとともに、神に立ち返り、神の救いを受けるようにと民に告げられました。

88. イザヤ書(2) 王国の展望—当時と未来 7章～12章

7:1-16 レツインとペカからの早急の救い

前 734 年にアラムの王レツインとイスラエル(エフライム)の王ペカはアッシリアと対抗するために同盟を築きました。そしてユダの王アハズにも加盟を求めますが、アハズはこれを拒否しました。すると、アラムとイスラエルはユダに宣戦布告をし、エルサレムに上ってきました。恐れるアハズに対してイザヤは、アラムとイスラエルはエルサレムを占領できないことを告げ、主に信頼せよと伝えます。そして主がユダを救われるしるしを求めよと告げました。しかし、アハズは主に信頼することを拒み、しるしを求めませんでした。

それに対してイザヤはアハズに言いました。「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神までも煩わすのか。それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」(7:13-14) イザヤはユダ王国と対照させて、永遠の王国を築く救い主を預言しました。

7:17-8:8 切迫するアッシリアの侵入

アハズは主に信頼せず、アッシリアに助けを求めました。イザヤは、アッシリアがアラムとイスラエルを攻めるとともに、アッシリアの勢力は強くユダにも及ぶと預言しました。事実、アッシリアはアラムとイスラエルを攻めて滅ぼしました。一方、ユダは滅ぼされませんでした。アッシリアの属国となり、圧制に苦しみました。

8:9-9:7 完全な救いの約束

イザヤはアッシリアに攻撃されるゼブルンとナフタリの地(ガリラヤ地方)の苦しみと、後の時代の希望を預言します。そしてこの希望はイエスのガリラヤ伝道によって成就します。「しかし、苦しみのあったところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝かがやく。」(9:1-2 マタイ 4:15-16)

そしてさらにダビデの王座に就く絶対的平和を築く救い主を預言します。「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。一人の男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなくダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。」(9:6-7)

9:8-10:34 エフライム、アラム及びアッシリアのさばき

神はアッシリアを用いて、エフライム、アラムそしてユダをさばかれます。一方、アッシリアは「神の怒りのむち」として用いられますが、神を恐れず残虐行為を行いました。そこで神はアッシリアをさばかれます。「主はシオンの山、エルサレムで、ご自分のすべてのわざを成し遂げる時、アッシリアの王の思い上がった心の果実、その高ぶる目の輝きを罰せられる。」(10:12)

11:1-12:6 平和と祝福の状態

イザヤは再び救い主の預言を語ります。「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、主を恐れる、知識の霊である。この方は主を恐れることを喜びとし、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。正義がその腰の帯となり、真実がその胸の帯となる。」(11:1-5) 「その日になると、エッサイの根はもろもろの民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のとどまる場所は栄光に輝く。」(11:10)

さらに救い主が完成させる絶対的平和の王国は、墮落以前のエデンの園のようになることを預言します。「狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。」(11:6) これは救い主が永遠の御国で完成させる絶対的平和を預言するとともに、キリストの平和を受けた神の民が平和をつくる者となることを教えています。

89. イザヤ書(3) 諸国家の全景 13章～23章

イザヤの時代からエルサレム陥落までの一世紀半に、周辺諸国の興亡があり、イザヤはそのことを預言しました。神はイスラエルを含めてどんな国も個人も、神に逆らい高ぶる者をさばかれます。しかし、神はご自分の民イスラエルをあわれみ、さばきに後に、悔い改めた残りの者を起こされます。そして、彼らによってイスラエルは復興し、さらに救い主の誕生によって永遠の御国を完成されることが預言されます。

13:1-14:27 バビロンとその支配者の運命 14:28-32 ペリシテの陥落

イザヤの時代、バビロニア帝国はまだ大帝国として台頭していませんでした。けれども、神はアッシリアをさばかれたように、高慢なバビロンをさばくと預言されます。「こうして、諸王国の誉れ、カルデア人の輝かしい誇りであるバビロンは、神がソドム、ゴモラを滅ぼした時のようになる。」13:19 14:12-15はバビロンの王に対する神のさばきが記されていますが、引照としてルカ 10:18の「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました」というイエスのことばが挙げられています。そこで「明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか」とは、サタンのことを教えていると考えられています。

15:1-16:14 高ぶりを罰せられるモアブ 17章ダマスコとイスラエルへのさばき

モアブとイスラエルの関係は、ルツ記のように良い時もありました。けれども、その後対立していきます。そして神はモアブをさばくと預言されます。その中で 16:5で救い主の預言が語られます。「一つの王座が恵みによって堅く立てられる。ダビデの天幕で真実をもってそこに座すのは、さばきをし、公正を求め、速やかに義を行う者。」さらにダマスコ(アラム)と北イスラエルへのさばきが預言されます。

18章クシュへのメッセージ 19章エジプトへのさばき

クシュ(エチオピア)は当時強国として恐れられていました。クシュはアッシリアの滅びが神によることを認め、シオンに主への贈物を持参すると預言されます。また神は、偶像に頼るエジプトをさばくと預言します。しかしさばきの後、エジプト人とアッシリア人が主を知り、イスラエルと共に主に仕えたと預言されます。これは永遠の神の国の完成の姿の預言です。「わたしの民エジプト、わたしの手で造ったアッシリア、わたしのゆずりの民イスラエルに祝福があるように。」

20章エジプトとクシュに対するさばき 21章バビロン、ドマ(エドム)、アラビアへのさばき

アッシリアの王がエジプトとクシュを滅ぼすことが預言されます。21章の海の荒野とはバビロンのことで、バビロンに対するさばきが語られます。21:9の「倒れた。バビロンは倒れた」は黙示録 14:8で引用され「倒れた。倒れた。大バビロンが」と言われます。黙示録のバビロンは一次的にはローマ帝国を指しており、さらには神に逆らうこの世の国を指しています。さらにドマ(エドム)とアラビアに対するさばきが預言されています。

22章ユダと執事シェブナへのさばき エルヤキムへの祝福

22:1の幻の谷はユダとエルサレムのことです。エルサレムはヒノムの谷とキデロンの谷で三方が囲まれ、神殿があるので安心だとユダの民は考えていました。それに対してイザヤは神のさばきを宣告します。22:15からヒゼキヤの執事であり書記のシェブナに対するさばきが語られます。神は高ぶったシェブナをさばかれます。22:20からは宮廷長官エルヤキムへの預言です。彼は主に信頼する忠実な人で、神に用いられました。22:22-23のエルヤキムへのことばは、イエスへの預言となっており、黙示録 3:7で引用されます。「わたしはまた、彼の肩にダビデの鍵を置く。彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。わたしは彼を杭として、確かな場所に打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。」

23章ツロへのさばきと回復

ツロは地中海沿岸の海洋貿易の主要地で、地中海西南のタルシシュの船が寄港しました。ツロがくしゃみをすれば地中海沿岸の都市は風邪を引くと言われるほど、ツロは重要な都市でした。しかし神は、ご自分に逆らうツロをさばかれます。しかし70年の後ツロは回復し、商業で得た富を今度は神のみこころにかなって用いると預言されます。歴史を支配される神は、神を知らない民であっても神のみ旨にかなう謙虚な歩みをする限り、その民を祝福されます。

90. イザヤ書（4）世界の中のイスラエル 24-27章

この箇所は、歴史におけるイスラエルに対する神のさばきと救いの預言と、終末における神のさばきと永遠の救いの預言が重なって記されています。北イスラエルをさばかれた神は、南ユダもさばかれます。しかし、主に信頼する残りの者を起こし、捕囚の民がエルサレムに帰還し、再びエルサレムで礼拝がささげられ、イスラエルが復興するという希望が語られます。さらにそこから、終末における神のさばきと永遠の御国の完成が重なって預言されています。

エルサレムの滅亡 24:1-24:13a

「見よ。主は地を荒れ果てさせ、その面をくつがえし、住民を散らされる。」24:1「その都にはただ荒廃だけが残り、城門は打ち砕かれて荒れ果てる。」24:12 イザヤはエルサレムの滅亡を預言します。エルサレムは廃墟となり、民は捕囚となって連れて行かれます。その理由は「彼らが律法を犯して定めを変え、永遠の契約を破ったからである。」24:5 これは前586年のバビロン軍の攻撃によって現実となりました。

残りの者の救いと悪しき者のさばき 24:13b-23

神はイスラエルの残りの者を地の果てから集められ、救われます。「ぶどうの収穫の後に、取り残しの実を集めるようなことが起こる。彼らは声を上げて喜び歌い、西の方から主の威光をたたえて叫ぶ。」24:13b-14 そして悪しき者への主のさばきが行われます。「その日、主は天では天の大軍を、地では地の王たちを罰せられる。」24:21 これはイスラエルを滅ぼした国々に対する神のさばきの預言であると同時に、終末のさばきの日における神のさばきの預言でもあります。そして神の救いが完成します。「月は辱めを受け、太陽も恥を見る。万軍の主がシオンの山、エルサレムで王となり、栄光がその長老たちの前にあるからである。」24:23 イザヤ書は私たちにも、永遠の滅びか永遠の救いかの選択を迫っています。

贖われた者の賛美 25:1-26:6

この箇所は、贖われた者の神への感謝と賛美です。それは捕囚から帰還した民の賛美であると同時に、イエスの贖いによって救われた者の賛美でもあります。「主よ、あなたは私の神。私はあなたをあがめ、御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、真実に成し遂げられました。」25:1 神はご自分に信頼する者を守り、救ってくださいます。「志の堅固なものを、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。いつまでも主に信頼せよ。ヤハ、主はとこしえの岩だから。」26:3-4 ヤハはヤハウエの省略形で、主はヘブル語でヤハウエです。

残りの者の祈 26:7-19

主に信頼する残りの者は苦難の中で神に祈ります。「子を産む時が近づいた妊婦が産みの苦しみで、もたえ叫ぶように、主よ、私たちは御前でそのようでした。」26:17 しかし神は悪しき者をさばかれます。「彼らは死人であって、生き返りません。彼らは死者の霊であって、よみがえりません。」26:14 これは神のさばきによる永遠の滅びの預言です。一方、26:19は永遠の救いの預言です。「あなたの死者は生き返り、あなたの屍は、よみがえります。覚めよ、喜び歌え。土のちりの中にとどまる者よ。」「わたしはよみがえります。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです」と言われるイエスによって、永遠の救いが成就しました。

救いとシオンの山への帰還 26:20-27:13

神のさばきとイスラエルの救いが語られ、同時に終末のさばきと永遠の救いが預言されています。「その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタンを、曲がりくねるレビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」27:1 このさばきの預言は、まずアッシリア、バビロン、エジプトに対する神のさばきのことです。同時にこれは、終末における悪魔と悪霊に対する神のさばきの預言です。「こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼と共に投げ落とされた。」黙示録12:9 神は捕囚の民を各地から拾い上げ、エルサレムに戻し、彼らは主を礼拝します。「イスラエルの子らよ、あなたがたは一人ひとり拾い上げられる。その日、大きな角笛が鳴り渡り、アッシリアの地にいる失われていた者や、エジプトの地に追いやられていた者たちが来て、エルサレムの聖なる山で主を礼拝する。」27:13

9 1. イザヤ書（5）シオンにおける真の希望と偽りの希望 28－35章

神の計画が広く行き渡る 28-29 章

28 章は、エフライム（北イスラエル）の滅びを見ながら、自己保身と酒宴に明け暮れる南ユダの政治家への警告のメッセージです。ユダの住民も指導者も祭司も預言者も酒に酔い、イザヤの預言に耳を傾けません。「ツァウにツァウ、カウにカウ、あっちにゼエル、こっちにゼエル」とは、堅苦しく融通の利かないやつだと言うイザヤに対するあざけりの言葉です。しかし主は同じ言葉をユダの民に告げて、神のことばをあざけるユダの滅びを告げられます。28:26 は救い主の預言です。「見よ、わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは試みを経た石、固く据えられた礎の、尊い要石。これに信頼する者は慌てふためくことがない。」ローマ 9:33 と 10:11 でイエスに当てはめて引用されています。主に信頼しないユダの民に対して、神は救い主を与えると約束されました。

29 章はエルサレムへのさばき、エルサレムを滅ぼす国へのさばき、残りの者の救いを語っています。「わたしはアリエルを虐げるので、そこにはうめきと嘆きが起こり、わたしにとっては祭壇の炉（アリエル）のようになる。」アリエルはエルサレムの詩的呼称で、祭壇の炉という意味です。エルサレムは祭壇の炉のように燃やされ、滅ぼされるとイザヤは預言しました。同時に、エルサレムを滅ぼす国々も神によって滅ぼされます。そして、捕囚の民を神は顧みて、救ってくださるのです。

エジプトとの同盟の空しさ 30-31 章

「わざわざいだ、頑なな子ら。-主のことば-彼らははかりごとを巡らす、わたしによらず、同盟を結ぶが、わたしの霊によらず、罪に罪を増し加えるばかりだ。彼らはエジプトに下って行こうとするが、わたしの支持を仰がない。」30:1-2 アッシリアがエルサレムに攻めてきた時、ユダは主に信頼せず、エジプトと同盟を結ぼうとします。しかしエジプトは助けにならないとイザヤは伝えますが、ユダの指導者はイザヤの警告を聞きません。神は不信仰なユダの民に対してさばきを宣告されます。同時に、さばきを通して悔い改める残りの者に対する救いの祝福を語られます。「それゆえ主は、あなたがたに恵みを与えようとして待ち、それゆえ、あわれみを与えようと立ち上がられる。主が義の神であるからだ。幸いなことよ、主を待ち望むすべての者は。」30:18「あなたが右に行くにも左に行くにも、うしろから『これが道だ。これに歩め』という言葉、あなたの耳は聞く。」30:21 この救いの祝福は救い主イエスを信じるすべての者に与えられます。

神に信頼する者の祝福 32-33 章

「見よ。一人の王が義によって治め、首長たちは公正によって支配する。」32:1 義によって治める一人の王とは救い主の預言です。救い主を信じる首長たちは公正によって国を治め、平和が実現します。「しかし、ついに、いと高き所から私たちに霊が注がれ、荒野が果樹園となり、果樹園が森とみなされるようになる。…私の民は、平和な住まい、安全な家、安らかな憩いの場に住む。」32:15, 18 しかし、神の救いが訪れる前に、神のさばきがなされます。イザヤ書はさばきと救いが交互に語られ、ユダの民に悔い改めて神の救いを得よと伝え続けます。32:20-24 は新天新地における救いの完成の預言です。「私たちの祝祭の都、シオンを見よ。あなたの目は、安らかな住まい、移ることのない天幕、エルサレムを見る。…しかもそこには威厳ある主が私たちとともにいてくださる。そこには多くの川があり、幅の広い川がある。」イザヤの救いの預言は、直近ではバビロン捕囚からの解放とエルサレムの復興であり、その後の救い主イエスによる救いの完成であり、最後に終末における神のさばきと新天新地まで語られます。

さばかれる国々―シオンに回復されるイスラエル 34-35 章

34 章は神の民に敵対するエドム（エサウの子孫）に対する神のさばきと、終末における神に敵対するすべての民に対する神のさばきが重なり合って預言しています。「まことに、天でわたしの剣は血に浸されている。見よ。これがエドムの上に、わたしが聖絶すると定めた民の上に下る。」34:5 そして神のさばきの後、神の救いが残りの者に与えられます。「荒野と砂漠は喜び、荒れ地は喜び踊り、サフランのように花を咲かせる。盛んに花を咲かせ、歓喜して歌う。これに、レバノンの栄光と、カルメルやシャロンの威光が授けられるので、彼らは主の栄光、私たちの神の威光を見る。…そこには大路があり、その道は『聖なる道』と呼ばれる。贖われた者たちだけがそこを歩む。」この預言は最終的に新天新地において成就します。

92. イザヤ書(6) 延期されるエルサレムのさばき 36-39章

アッシリアからの奇跡的救出 36-37章

36-39章は「ヒゼキヤの書」とも呼ばれる箇所です。Ⅱ列王 18-20章とⅡ歴代 32章に並行記事があります。36:1の「ヒゼキヤ王の第14年」は前701年です。この時「アッシリアの王センナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々に攻め上り、これを取った」とあります。そして36:2で「アッシリアの王は、ラブ・シャケを大軍とともにラキシュからエルサレムのヒゼキヤ王のところに送った」とありますが、これは前689-688年のことですので、1節と2節の間には12,3年の年月が経過しています。ラブ・シャケは「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリアの王がこう言っておられる。『いったい、おまえは何により頼んでいるのか』』と言って降伏を迫りました。そして、エジプトに抛り頼んでも無駄であり、主に抛り頼んでも無駄だと言いました。さらにラブ・シャケはエルサレムの民に対しても、降伏すれば良い土地に移住できると言い、民の心を揺さぶりました。

37章で、ヒゼキヤはこれを聞くと側近をイザヤのもとに遣わし、祈りを要請しました。イザヤは側近に伝えました。「あなたがたの主君にこう言いなさい。『主はこう言われる。あなたが聞いたあのことは、アッシリアの王のわたしをののしった、あの言葉を恐れるな。今わたしは彼のうちに霊を置く。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしはその国で彼を剣で倒す。』」その後、再び使者たちがアッシリアの王の手紙を持って来て、「おまえが信頼するおまえの神にだまされてはいけない」と伝えました。ヒゼキヤはその手紙を主の前に開いて祈りました。それに対して主はイザヤを通して、センナケリブに対するさばきとエルサレムへの神の救いを伝えました。そして主は御使いを遣わし、アッシリア軍を打ち殺しました。センナケリブはニネベに帰り、その後息子たちによって殺されました。主のことは聞き従うことが救いとなるのです。

ヒゼキヤの回復と賛美の歌 38章

38章のヒゼキヤの病と回復の出来事は、前701-700年頃のセンナケリブがユダの城壁の町々を占領していった時代のことです。病と回復は39章のバビロン捕囚の預言とつながっているので、この箇所に置かれたと考えられます。ヒゼキヤが病で死にかかっていた時、イザヤが来て「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。治らない」と主のことは告げました。それに対してヒゼキヤは大声で泣いて祈りました。すると主は再びイザヤを遣わし、「わたしはあなたの祈りを聞いた。あなたの涙も見た。わたしはあなたの寿命にもう15年を加える。」と言われ、しるしとして日時計の影を十度戻されました。

ヒゼキヤが回復した時、38:10-20で感謝の歌を記しました。前半は病の中の絶望的な現実を語ります。「私は言った。生涯の半ばで私はよみに入る。私は残りの年を失ってしまったのだ。」しかし16節で主に祈ります。「主よ、…どうかわたしを健やかにし、私を生かしてください。」そして17節からは祈りの答えとして回復した感謝と賛美を歌いました。「主は私を救ってください。私たちは生きている日々の間、主の宮で琴を奏でよう。」神は私たちの涙を見、祈りを聞いてくださるお方です。祈ればすべての病が癒されるわけではありませんが、神はこの時ヒゼキヤを癒し、ヒゼキヤを用いてアッシリアからエルサレムを守られました。

バビロン捕囚の預言 39章

ヒゼキヤの回復を聞いたバビロンの王メロダク・バルアダンはヒゼキヤのもとに使者を遣わし、手紙と贈り物を届けました。ヒゼキヤは、アッシリアの圧迫の中で、病気の回復を祝って近づいてきたバビロン王に好感を持ち、使者を歓迎し宝物倉の物をすべて見せてしまいました。イザヤはバビロンの使者を歓迎したヒゼキヤに対して、主のことは伝えました。「見よ。あなたの家にある物、あなたの父祖たちが今日まで蓄えて来た物がすべて、バビロンへ運び去られる日々が来る。何一つ残されることはない—主は言われる—また、あなたが生む、あなた自身の息子たちの中には、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者がいる。」この時はアッシリア全盛期であり、バビロンが覇権を取る75年前のことでした。しかし、前586年にこの預言は成就し、ユダの民はバビロン捕囚となりました。神のことは確かにそのとおり成就するのです。

9 3. イザヤ書（7）神の解放の約束

40 章から 66 章まではイザヤ書の後半部分であり、神の救いの預言が 3 つの局面で語られます。それらは、キュロスのもとでのイスラエル捕囚民の帰還、救い主による罪からの救い、究極的な神の救いの完成です。また鍵の言葉としての「しもべ」が 20 回出てきます。しもべはイスラエルを指す場合と、理想のしもべである救い主を指す場合があります。救い主は 53 章で民の罪を贖う「苦難のしもべ」として預言され、イエス・キリストによって成就しました。

神への信仰による慰め 40 章

「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。—あなたがたの神は仰せられる—エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを主の手から受けている、と。」40:1,2 神のさばきは終わり、救い主により咎が償われ、神より十分な祝福が約束されたという慰めの言葉から、イザヤ書後半が始まります。「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。』」40:3 この預言は救い主の道備えをしたバプテスマのヨハネによって成就しました。「草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことは永遠に立つ。」40:8 神のことは確かであり、預言は必ず成就するのです。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れない。」40:31 このみことばは、昔も今も苦難を経験する者にとっての力強い神のメッセージです。

神の選ばれたしもべ 41 章

「だれが一人の者を東から起こし、その行く先々で勝利を治めさせるのか。だれが彼の前に国々を渡し、王たちを踏みじらせるのか。…主であるわたしだ。」41:2-4 主が東から起こす「一人の者」とは、バビロンを滅ぼし、捕囚の民を解放するキュロス王のことです。25 節の「北から起こす人」もキュロスのことです。キュロスに対する預言は 44 章、45 章で名指しで預言されます。「だがイスラエルよ。あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ。」「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」41:8,10 神はご自分が選んだ契約の民イスラエルを見捨てず、彼らの罪を贖って祝福されます。理想のしもべと罪深いしもべ 42 章

「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。…傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯心を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。」42:1,3 神は「わたしのしもべ」である救い主を遣わされ、救い主によって真実なさばきを行われます。そのさばきは神の民にとっての救いでもあります。「耳の聞こえない者たちよ、聞け。目の見えない者たちよ、目を凝らして見よ。わたしのしもべほど目の見えない者が、だれかほかにいるだろうか。」42:18,19 ここでの「わたしのしもべ」はイスラエルのことです。イスラエルは、主のことに聞き従わず、偶像を礼拝している。その結果、神はイスラエルをさばかれるのです。

バビロンからの解放 43 章

「だが今、主はこう言われる。ヤコブよ、あなたを創造した方、イスラエルよ、あなたを形作った方が。『恐れるな。わたしはあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたは、わたしのもの。』」43:1 主のことに耳を傾けなかったイスラエルに対して、「だが今は違うのだ」と主は呼びかけ、イスラエルを贖うと約束されます。これはバビロン捕囚からの解放の預言であり、救い主による救いの預言でもあります。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」43:4 神はご自分に背く民をなお愛し、救われます。「あなたがたのために、わたしはバビロンに使いを送り、彼らをことごとく逃亡者として下らせる。」43:14 神はバビロンを滅ぼし、イスラエルを救われます。

キュロスによる解放 44 章

「キュロスについては、『彼はわたしの牧者。わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。エルサレムについては、『再建される。神殿はその基が据えられる』という。」44:28 このキュロスによるバビロン捕囚解放の預言は、まだアッシリアが世界を支配する時代です。バビロンは小国で、バビロン捕囚もバビロンを滅ぼすペルシアの台頭もない時に語られました。神は歴史を支配され、未来をご存じであり、神のことは必ず成就します。

9 4. イザヤ書（7）神の解放の約束 2

油注がれた者キュロス 45 章

44 章に引き続き、バビロン捕囚からの解放者としてキュロスが名指しされます。この預言が語られた時はアッシリアが世界を支配する時代で、バビロンは小国で、バビロンを滅ぼすペルシアも台頭しない時代です。キュロス王の誕生はイザヤの預言の 150 年も後のことです。44:28 でキュロスは「彼はわたしの牧者」と呼ばれ、45:1 では「油注がれた者」と呼ばれます。この「肩書き」は主なる神が、イスラエルを救うためにキュロスに与えられました。「彼がわたしの都を建て直し、わたしの捕囚の民を解放する。」45:13 預言はさらに全世界の民の救いのメッセージとなります。「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神だ。ほかにはいない。」45:22 やがて来られる真の牧者、真の油注がれた者キリスト・イエスによって、全世界の人々の救いが成就します。

神の計画の成就 46 章

ベルはバビロンの神であり、ネボはベルの使者で共に偶像です。これらの偶像は運ばれて行き、バビロンは滅びます。偶像は人間によって運ばれる神ですが、まことの神はイスラエルを運び、救い出してくださいのお方です。「胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になってもわたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。」46:4 イザヤの預言によって表わされた神の計画は必ず成就します。「わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる。」46:10

バビロン滅亡の預言 47 章

「おとめ、娘バビロンよ。下って行って、土の上に座れ。娘カルデア人たちよ。王座のない地面に座れ。あなたはもう、優しい上品な女と呼ばれないからだ。…わたしは復讐をする。だれ一人容赦しない。」47:1,3 神はバビロンを用いてイスラエルをさばきました。けれども、バビロンは神を認めず高慢になり、捕囚の民を苦しめました。そこで神は今度はバビロンを滅ぼされます。「わたしは、わたしの民を怒って、わたしのゆずりの民を汚し、彼らをあなたの手に渡したが、あなたは彼らをあわれまず、老人にもひどく重いくびきを負わせた。」47:6

バビロン捕囚からの解放 48 章

「わたしは今から、新しいことを、あなたの知らない秘め事をあなたに聞かせる。」48:6 その秘め事とはバビロン捕囚からの解放です。神はイスラエルをさばき、イスラエルを試練に会わせました。「わたしは苦しみの炉であなたを試した。」48:10 しかし、神はイスラエルを滅ぼし尽くすことをせず、試練の後にイスラエルを救われます。「主に愛された者が、主の喜ばれることをバビロンに行く。主の御腕はカルデア人に向かう。」48:14 「主に愛された者」とはバビロンからイスラエルを解放するキュロスのことです。「バビロンから出よ。カルデアから逃れよ。…『主が、そのしもべヤコブを贖われた』と言え。」48:20 イスラエルの民にとって必要なことは、神に信頼し、神のこばに導かれて歩むことです。「わたしはあなたの神、主である。わたしはあなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。」48:17

イスラエルを忘れない神 49 章

イスラエルは「わたしのしもべ」であり、神はご自分の民を忘れず、神のさばきを受けても、必ず救うと約束されます。「しかし、シオンは言った。『主は私を見捨てた。主は私を忘れた』と。『女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとえ女たちが忘れても、このわたしは、あなたを忘れない。』」49:15 「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、わたしはあなたを助ける。」49:8 このバビロンからの解放の預言は、イエス・キリストによる救いによって、完全に成就します。「見よ。今は恵みの時、今は救いの日です。」Ⅱコリント 6:2

主のしもべ 50 章

50 章は救い主の預言です。「あなたがたのうちで主を恐れ、主のしもべの声に聞き従うのはだれか。闇の中を歩くのに光を持たない人は、主の御名に信頼し、自分の神により頼め。」50:10 「主のしもべ」とは救い主のことです。「打つ者に背中を向け、ひげを抜く者にほおを任せ、侮辱されても、つばをかけられても、顔を隠さなかった。」50:6 主のしもべは苦難に会いますが、主のしもべの声に聞き従う者は救われます。

95. イザヤ書（7）神の解放の約束3

イスラエルへの慰め 51章

「あなたがたが切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ」51:1 神は民に、アブラハムを選び、彼を祝福してご自分の民とされたという、イスラエルの民の起源に目を留めよと語られます。そして神にさばかれてバビロン捕囚になっても、イスラエルを慰め、再びシオンに戻すと約束されました。「主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭には、とこしえの喜びをいただく。…わたし、わたしこそ、あなたがたを慰める者」51:11-12 そして、神はバビロンをさばくと語られます。「あなたはわたしの憤りの大杯をもう二度と飲むことはない。わたしはこれを、あなたがたを悩ます者たちの手に渡す。」51:22-23

イスラエルへの良い知らせ 52章

「良い知らせを伝える人の足は、山々の上にあつて、なんと美しいことか。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、『あなたの神は王であられる』とシオンに言う人の足は。」バビロン捕囚からの解放の良い知らせを伝える人が、平和、幸い、救いを告げ知らせると預言されます。その時、神ご自身がイスラエルの王とされます。この良い知らせは、救い主イエスの福音を預言し、ローマ10:15に引用され、近代宣教学のモットーとなりました。

52:13 から 53 章につながる「苦難のしもべ」の歌が始まります。主のしもべである救い主は、苦難を受けて民の罪の贖いを成し遂げ、よみがえり、天に上って私たちのためにとりなすことが明確に預言されます。「見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められて上げられ、きわめて高くなる。」52:13 救い主は昇天し、神と等しい高さまで引き上げられます。しかし、そのためにまず苦しみを受けられます。「多くの者があなたを見て驚き恐れたように、その顔だけは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。そのように彼は多くの国々に血を振りまく。」救い主の苦しみは顔や姿が変わってしまうほどのものです。しかし、救い主は流されるご自身の血によって、人々をきよめます。

苦難のしもべ 53章

救い主の苦しみの預言は、イエスの十字架の苦難と死によって成就しました。「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔をそむけるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」53:3 すべての人がイエスを蔑み、尊ばない。それほど私たちの神に対する罪の大きさが表されています。しかし主は、神を無視して自分勝手に生きる私たちの罪を背負って、身代わりに神のさばきを受けて、救いの道を開いてくださいました。「しかし、彼は私たちの背きの罪のために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」53:5,6

救い主の苦しみと死は、主のみこころでした。救い主の身代わりの死によって、すべての人の罪が贖われ、救いが成就するからです。救い主は死からよみがえり、ご自分を信じて救われる民を見ることができるので、苦しみの後を見て満足します。「しかし、彼を砕いて病を負わせることは主のみこころであった。彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、未長く子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。『彼は自分のたましいの激しい苦しみのもとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。』」53:10,11

「それゆえ、わたしは多くの人を彼に分け与え、彼は強者たちを戦勝品として分かち取る。彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする。」53:12 救い主の死は敗北ではなく勝利であったことが、戦勝品を取るといふたとえによって語られます。救い主イエスの死を自分の罪のためと信じる者は、イエスの救いを受け、イエスの弟子、キリスト者とされます。イエスは今、天において大祭司となって、罪人の救いのためにとりなしておられます。苦難のしもべの預言は、イエスの十字架の死と復活、昇天と神の右の御座でとりなす大祭司イエスによって、すべて成就しました。

96. イザヤ書（8）神の解放の約束 4

エルサレムの回復 54 章

54 章は、バビロン捕囚からの解放とエルサレムの回復の預言です。「子を産まない不妊の女よ、喜び歌え。産みの苦しみを知らない女よ。喜び叫べ。」54:1 神のさばきを受けて崩壊したエルサレムに対して、主の救いがあるので喜べと神は語られます。「あなたの天幕の場所を広げ、住まいの幕を惜しみなく張り、綱を長くし、杭を強固にせよ。」54:2 エルサレムは再び人の住む場所として回復します。「たとえ山が移り、丘が動いても、わたしの真実の愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。一あなたをあわれむ方、主は言われる。」54:10 神のさばきにより、エルサレムは崩壊しましたが、それでも神の真実の愛と平和の契約は変わらないと、神はエルサレムに語り掛けます。この変わるここのない神の愛の真実と平和の契約は、私たちにも当てはまります。

神の恵みの招き 55 章

55 章は、主のしもべである救い主によってもたらされる神の恵みの招きのメッセージです。「ああ、渴いている者はみな水を求めて出て来るがよい。金のない者も。」55:1 イエスは言われました。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」ヨハネ 7:37「見よ。わたしは彼を諸国の民への証人とし、諸国の民の君主とし、司令官とする。」55:4 諸国の民への証人、君主、司令官となる「彼」は救い主を指しています。「天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたよりも高く、わたしの思いはあなたがたの思いよりも高い。」55:9 バビロン捕囚による神のさばきと解放の預言は、やがて来られる救い主による救い、さらには永遠の救いという神の思いを伝えているのです。

すべての民の救い 56 章

56 章は救い主によってもたらされる救いは、イスラエルだけでなくすべての人に与えられることが預言されます。「主はこう言われる。公正を守り、正義を行え。わたしの救いが来るのは近いからだ。わたしの義が現れるのも。」56:1 救い主による救いが近づいている今、イスラエルは公正と正義を守り、神を礼拝し、悪事から離れよと神は語られます。この救いは、神を信じ愛する異邦人にも与えられます。「なぜならわたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ。」56:7 一方、イスラエル人であっても、自分勝手な罪の道を歩む者には与えられません。「神の見張り人は目が見えず、みな何も知らない。」56:10

イザヤ書（9）神の世界的王国の確立 1

神の救いとさばき 57 章

57 章は、神の救いは無条件に与えられるのではないことを教えています。すなわち、罪を悔い改めて神に信頼する者は救われるが、神を恐れず悪の道に歩み者はさばかれると告げます。「義人は、わざわざを前にして取り去られる。その人は平安に入り、まっすぐ歩む人は、自分の寝床で休むことができる。」57:1,2 義人は死に際しても平安が与えられます。「わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。へりくだった者たちの霊を生かし、砕かれた人たちの心を生かすためである。」57:15 罪を悔い改め、へりくだる者に神は永遠のいのちを与えて生かしてください。一方、偶像を拝み、高ぶる者を神はさばかれます。「悪しき者には平安がない。一私の神はそう仰せられる。」57:21

主を喜びとする生き方 58 章

58 章はイスラエルの偽善的信仰を指摘し、悔い改めて主を喜びとする生き方をするようにというメッセージです。「見よ。あなたがたが断食するのは、争いのけんかのためであり、不当に拳で殴るためだ。あなたがたが今のように断食するのでは、いと高き所に、その声は届かない。」58:4「わたしが好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。」58:6 神が喜ばれる生き方は、律法を形式的に守ることで、律法を無視して自分勝手に生きることでもありません。心から断食し、安息日を喜びの日として守り、主を喜びとすることです。「もし、あなたが安息日に出歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を喜びの日とし、主の聖日を栄えある日と呼び、これを尊んで、自分の道を行かず、自分の好むことを求めず、無駄口を慎むなら、そのとき、あなたは主をあなたの喜びとする。」58:13, 14

97. イザヤ書 (10) 神の世界的王国の確立 2

罪の除去の必要 59 章

神と人との正常な関係を妨げる原因は、神にあるのではなく、人の罪にあります。「見よ。主の手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」59:1-2 神はイスラエルを罪のゆえにさばかれます。「主は彼らの仕切りに応じて報い、はむかう者に憤り、敵に報復し、島々にも報復される。」59:18 しかし主は、悔い改める者のところに贖い主として来られます。「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中の、背きから立ち返る者のところに。―主のことば。」59:20 これは救い主がシオン、エルサレムに来られるという預言です。

21 節は聖霊と神のことばをいただく神の民としての教会の姿が預言されています。教会は神から託された神のことばを聖霊の力によって全世界に宣べ伝えます。「これは、彼らと結ぶわたしの契約である―主は言われる―。あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしの言葉は、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、子孫の子孫の口からも、今よりとこしえに離れない―主は言われる。」59:21

新しいエルサレム 60 章

「起きよ。輝け。まことに、あなたの光が来る。主の栄光があなたの上に輝く。」60:1 これはエルサレムの回復におけるイスラエルの民への命令だけでなく、新しいエルサレムの民となるすべての贖われた神の民への命令です。「わたしは世の光です」と言われたイエスは、「あなたがたは世の光です」とも言われました。神の民は神の栄光を現して輝く使命が与えられました。「目を上げて、あたりを見渡せ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。」60:3 神の民の光を見て、人々が世の光イエスのもとに来るのです。「太陽はもはや、あなたの昼の光とはならず、月の明かりもあなたを照らさない。主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの輝きとなる。」60:19 これは新しいエルサレムの預言です。神は地上における神の民を祝福してくださるだけでなく、やがて天に招き、永遠の祝福を与えてくださいます。

イエスによる成就 61 章

「神である主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、心の傷ついた者をいやすため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年、われらの神の復讐の日を告げ、すべての嘆き悲しむ者を慰めるために。」61:1-2 イエスはナザレの会堂でこのみことばを読み、「今日この聖書のことばが実現しました」と言われました。「彼らは昔の廃墟を建て直し、かつての荒れ跡を復興し、廃墟の町々、世々の荒れ跡を一新する。」61:4 エルサレム復興の預言です。そしてこの復興は、単にイスラエルの国の回復だけでなく、救い主による神の民の祝福を預言します。「わたしは真実をもって彼らのわざに報い、永遠の契約を彼らと結ぶ。…私は主にあって大いに楽しみ、私のたましいも私の神にあって喜ぶ。主が私に救いの衣を着せ…花嫁のように宝玉で飾ってくださるからだ。」61:8, 10

エルサレムの回復 62 章

バビロンによるエルサレム陥落と捕囚の後、神はエルサレムを回復させます。エルサレムは再び神の栄光を現す都となります。そして、この預言は永遠の都エルサレムの栄光の姿としての預言でもあります。「シオンのために、わたしは黙っていない。エルサレムのために沈黙はしない。その義が明るく光を放ち、その救いが、たいまつのように燃えるまでは。」62:1 エルサレムに置く見張り番は、神のことばを語り続ける使命が与えられています。これは教会に与えられた使命です。「エルサレムよ。わたしはあなたの城壁の上に見張り番を置いた。終日終夜、彼らは、ひと時も黙ってはいはならない。」62:6

エルサレムには、主の救いが来て、彼らは聖なる民、主に贖われた者とされます。これも捕囚からの帰還民に対する神の祝福であるとともに、救い主イエスを信じるすべての神の民に対する祝福の預言です。「見よ、主は地の果てに聞かせられた。『娘シオンに言え。見よ、あなたの救いが来る。見よ、その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある』と。彼らは聖なる民、主に贖われた民と呼ばれ、あなたは、追い求められる者、見捨てられることのない都と呼ばれる。」62:11-12

98. イザヤ書(11) 神の世界的王国の確立3

イザヤのとりなしの祈り 63章

63章は、まずエドムに対するさばきの預言から始まります。「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着てくる方は。」63:1 エドムは暴虐で血を流すことを好み、シオンから来る者に対立します。神はエドムをさばき、そのさばきはシオンの救いとなります。「復讐の日がわたしの心のうちにあり、わたしの贖いの年が来たからだ。」63:4 神はイスラエルをご自分の民として愛し、救われます。けれどもイスラエルが神に逆らった結果、神はイスラエルをさばかれました。「主は言われた。まことに、彼らはわたしの民、偽りのない子たちだと。…しかし彼らは逆らって、主の聖なる御霊を悲しませたので、主は彼らの敵となり、自ら彼らと戦われた。」63:8, 10 イザヤは 14 節後半からイスラエルの救いのために神にとりなします。「主よ、あなたは私たちの父です。あなたの御名は、とこしえから私たちの贖い主。…あなたのしもべたち、あなたのゆずりの部族のために、どうかお帰り下さい。」63:16-17

イザヤのとりなしの祈り 64章

64章は引き続きイザヤのとりなしの祈りです。審判者である神の前にイザヤはイスラエルの罪を告白します。「しかし、あなたの御名を呼ぶ者はなく、奮い立って、あなたにすがる者もいません。あなたは私たちから御顔を隠し、私たちの咎によって、私たちを弱められました。」64:7 そして神に訴えます。「しかし、今、主よ、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの御手のわざです。…どうか今、私たちがみな、あなたの民であることに目を留めてください。」64:8-9 旧約聖書では、神を父と呼ぶことはまれですが、イザヤは自分たちの創造者を父と親しく呼んで、神に救いを訴えました。新約聖書では、イエスが神を父と呼ばれ、イエスが父なる神から遣わされた子なる神であることを表されました。さらに、イエスを信じる者は神の子どもとされるので、クリスチャンにとって神は天の父となりました。

新天新地 65章

65章から 66章はイザヤの祈りに対する神の応答です。イスラエルの民が神に反逆した結果、神の愛と救いの御手は異邦人に向けられることになりました。「わたしを尋ねなかった者たちに、わたしは尋ね求められ、わたしを探さなかった者たちに、わたしは見出された。わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、わたしはここだ、わたしはここだと言った。」65:1 しかし、神はイスラエルを滅ぼし尽くすことはせず、悔い改める者を残し、彼らを祝福されます。「わたしは、ヤコブから子孫を、ユダから、わたしの山々を所有する者を生まれさせる。わたしの選んだ者がこれを所有し、わたしのしもべたちがそこに住む。」65:9 神の救いはやがて新天新地において完成します。「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。…わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこではもう、泣き声も叫び声も聞かれない。」65:17, 19 イザヤが預言した新天新地は、ヨハネが黙示録で見た新天新地です。神の救いが新天新地によって完成します。神はすべての民が悔い改めて、神に立ち返り、新天新地の永遠の祝福に入ることを望まれます。

審判と祝福 66章

イザヤ書はアッシリアの圧迫のもので書かれました。そしてエルサレムの崩壊、その回復、救い主の来臨による救い、天地創造から新天新地に至る神の救いの完成が預言されました。66章は預言のまとめです。神が願われるのは、民を祝福することです。その祝福は神の前にへりくだる者に与えられます。「わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の碎かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」66:2 神は形式的に律法を守っても、内実が伴わない者をさばかれます。しかし、神はへりくだり悔い改めるイスラエルの民を祝福し、エルサレムは回復します。エルサレムには神の栄光が輝き、国々の民が神を礼拝するためにエルサレムにやって来ます。その祝福は、来るべき新天新地において完成します。「わたしが造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くのと同じように、一主のことば—あなたがたの子孫とあなたがたの名もいつまでも続く。」66:22 そしてそのような神の祝福にあずかるために、神を信じない者に対する神のさばきと永遠の滅びの警告を与えて、イザヤ書は終わります。「彼らは出て行って、わたしに背いた者たちの屍を見る。そのうじ虫は死なず、その火も消えず、それはすべての肉なる者の嫌悪的となる。」66:24

99. エレミヤ書(1) 預言者とその民 1 1-6 章

イザヤは前 740 年～690 年頃の 50 年間、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に活躍しました。一方エレミヤは、前 627 年～583 年頃の 44 年間、ユダの王ヨシヤ、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤの最後の 5 人の王の時代に活躍しました。エレミヤは、イザヤの時代より神のさばきが切迫している中で、エルサレムの滅亡とバビロン捕囚を預言しました。その結果、王や民から憎まれ、迫害を受けました。しかし、彼の預言どおり前 586 年にエルサレムはバビロン軍によって滅ぼされ、神殿も破壊され、民はバビロンに捕囚の民となって連れて行かれました。エレミヤはエルサレムに残った民によってエジプトに連れて行かれ、その地でも預言した後、エジプトで亡くなったと考えられます。

預言者としての召命 1 章

「次のような主のことばが私にあった。『わたしは、あなたを胎内に形造る前からあなたを知り、あなたが母の胎を出る前からあなたを聖別し、国々への預言者として定めていた。』私は言った。『ああ、神、主よ。ご覧ください。私はまだ若くて、どう語ってよいか分かりません。』主は言われた。『まだ若いと言うな。わたしがあなたを遣わすすべてのところへ行き、わたしがあなたに命じるすべてのことを語れ。彼らの顔を恐れるな。わたしがあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。一主のことば。』」1:4-8 神はエレミヤが生まれる前から預言者とする計画を持っておられました。そしてヨシヤ王の第 13 年、ヨシヤ 21 歳の時、エレミヤは預言者としての召命を受けました。

エレミヤは神のことばに戸惑いますが、神の召命によって預言者となりました。エレミヤはユダの民に神のさばきのメッセージを語らなければなりません。その結果、ユダの民の反感を受けることになりますが、神がエレミヤと共にいて救い出すので、彼らを恐れるなどの神の約束を受けました。その時、エレミヤは二つの幻を見ます。一つはアーモンドの枝です。アーモンドは毎年春になると花を咲かせます。そのように神のことばは必ず実現します。もう一つは北からこちらに傾く煮え立った釜を見ます。それは北からバビロンが攻めて来て、ユダに対する神のさばきが行われるというしるしです。エレミヤが神のことばを忠実に語るなら、神は迫害者からエレミヤを守られます。

イスラエルの背信の状態 2 章-6 章

「かつて、自分の神々を、神々でないものと取り替えた国民があっただろうか。ところが、わたしの民は自分たちの栄光を役に立たないものと取り替えた。…わたしの民は二つの悪を行った。いのちの水の泉であるわたしを捨て、多くの水溜めを自分たちのために掘ったのだ。水を溜めることのできない、壊れた水溜めを。」2:11、13 イスラエルは、すべての祝福の源、いのちの水の泉である神を捨て、役に立たない水溜めである外国の神々を信じる罪を犯しました。

「背信の女イスラエルが姦通したので、わたしは離縁状を渡して追い出した。しかし、裏切る女、妹のユダが恐れもせず、自分も行つて淫行を行ったのをわたしは見た。」3:8 前 721 年に北イスラエルは神のさばきを受け、アッシリアに滅ぼされました。ところがこの神のさばきを見ながら、南ユダも同じように偶像礼拝を行いました。その結果、神はユダも滅ぼされます。しかし、神は捕囚の民に「わたしのもとに帰れ」と呼びかけます。そして神の声に従い、罪を悔い改める民を再びエルサレムに戻されます。『「背信の子らよ。立ち返れ。わたしがあなたがたの背信を癒そう。』「今、私たちはあなたのもとに参ります。あなたこそ、私たちの神、主だからです。』」3:22

「耕地を開拓せよ。茨の中に種を蒔くな。ユダの人とエルサレムの住民よ。主のために割礼を受け、心の包皮を取り除け。そうでないと、あなたがたの悪い行いのゆえに、わたしの憤りが火のように出て燃え上がり、消す者もないだろう。」4:3、4 頑なな心を柔らかくし、心の中にある罪を取り除けと、エレミヤは神のことばを民に伝えますが、民は聞きません。「なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得を貪り、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを言っているからだ。彼らはわたしの民の傷をいい加減に癒やし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。」6:13-14 神のさばきは間近に迫っています。けれども民は平然と利得を貪り、預言者や祭司は「平安だ」と偽り、エレミヤが警告する神のさばきを否定しました。それゆえ、神はユダをさばかれます。「この国よ、聞け。見よ、わたしはこの民にわざわいをもたらす。これは彼らの企みの実。彼らがわたしのことばに注意を払わず、わたしの律法を退けたからだ。」6:19

100. エレミヤ書(2) 預言者とその民 2 7-12 章

諸神殿と偶像への信仰の非難 7 章-10 章

「あなたがたの生き方と行いを改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの場所に住ませる。あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮だ』という偽りのことばに信頼してはならない。」7:3, 4 民は主の神殿が破壊されることはないと考え、エレミヤの警告を無視します。しかし、エレミヤはそのような偽りのことばに信頼せず、悔い改めて主に立ち返るようにと語りました。そして、かつて幕屋があったシロが、民の罪のために滅ぼされた出来事を覚えて、エルサレムにも同様のことが起こると警告しました。「わたしはシロにしたのと同様のことを行う。」7:14

主はエレミヤに民のために祈ってはならないと言われます。もはやとりなしの祈りによっても神のさばきは変わることがないほど、ユダが墮落したからです。「子どもたちは薪を集め、父たちは火をたき、女たちは麦粉をこねて、天の女王のために供えのパン菓子を作り、また、ほかの神々に注ぎのぶどう酒を注いで、わたしの怒りを引き起こそうとしている。」7:18 古い契約の内容が 7:23 にあります。「わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。あなたがたが幸せになるために、わたしが命じるすべての道に歩め。」7:23 「しかし、彼らは聞かず、耳を傾けず、頑なで悪い心のはかりごとによって歩み、前進どころか後退した。」7:24 民は神の声である律法に従わなかったので、祝福ではなくさばきを受けました。

「ああ、私の頭が水であり、私の目が涙の泉であったなら、娘である私の民の殺された者たちのために昼も夜も、泣こうものを。」9:1 エレミヤは神の救いがないことを悟り、できれば昼も夜も民のために泣きたいと願います。エレミヤは涙の預言者と呼ばれます。彼は民の悲しみと一体となって涙を流します。この涙はエルサレムのために泣かれたイエスの涙と同じです。エレミヤもイエスも共に民の罪による神のさばきがあることを知りながら、さばかれる民のために泣かずにはいられなかったのです。「エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。」ルカ 19:41

エレミヤはユダの民が行う偶像礼拝の愚かさを指摘し、主なる神に立ち返るように呼びかけます。「彼らはみな間抜けであり、愚かなことをする。空しい神々の訓戒—それは木にすぎない。…しかし、主はまことの神、生ける神、とこしえの王。その御怒りに地は震え、その憤りに国々は耐えられない。」10:8, 10 エレミヤは民と一体となって、神に対して、御怒りによる滅びではなく、公正すなわち愛に基づく懲らしめによる回復を求めました。「主よ、私を懲らしめてください。御怒りによらないで、ただ、公正をもって。そうでなければ、私は無に帰してしまいます。」10:24

服従なき契約は無益 11 章-12 章

エレミヤは民が神のことばを聞かず、神の契約に従わなかったので、神は彼らをさばかれると繰り返し語ります。「それゆえ—主はこう言われる—一見よ、私は彼らにわざわいを下す。彼らはそれから逃れることができない。彼らがわたしに叫んでも、わたしは聞かない。ユダの町々とエルサレムの住民は、自分たちが犠牲を供えている神々のもとに行って叫ぶだろうが、これらは彼らのわざわいの時に、決して彼らを救わない。」11:11-12 エレミヤの出身地アナトテの人々もエレミヤのことばを聞かず、かえってエレミヤを脅します。それに対して神は彼らをさばくと告げられました。「それゆえ、主はアナトテの人々について、こう言われる。『彼らはあなたのいのちをねらい、主の名によって預言するな。われわれの手にかかって、あなたが死なないように』と言っている。それゆえ—万軍の主はこう言われる—一見よ、わたしは彼らを罰する』」11:21-22

エレミヤは、郷里の人たちの陰謀を覚え、悪者の繁栄を神に訴えます。すると神は、これからさらに大きな困難に直面するエレミヤを励まして言われます。「あなたは徒歩の者と競争して疲れるのに、どうして馬と走り競うことができるだろうか。平穏な地で安心して過ごしているのに、どうしてヨルダンの密林で過ごせるだろうか。あなたの兄弟や、父の家の者さえ、彼らさえ、あなたを裏切り、彼らでさえ、あなたのうしろから大声で叫ぶ。だから彼らがあなたに親切そうに語りかけても、彼らを信じてはならない。」12:5-6 エレミヤの行く手にはさらなる困難があります。けれどもエレミヤには、人ではなく神に信頼して、神のことばを宣べ伝える使命が与えられています。

101. エレミヤ書(3) 預言者とその民3 13-18 章

捕囚の二つのしるし 13 章

神はエレミヤに二つのことを行って、それを捕囚のしるしとするように命じられました。一つは亜麻布の帯を買い、それをユーフラテス川の岩の割れ目に隠します。そして、日を経てその帯を取り出すとぼろぼろになっていました。神は言われました。「わたしはこのように、ユダとエルサレムの大きな誇りをぼろぼろにする」13:9 もう一つは、エレミヤが酒壺を取り、「酒壺には酒が満たされる」と民に言いました。そして神が言われました。「わたしは、この地の全住民を…酔いで満たし、彼らを互いにぶつけて砕く。父も子も、ともに一主のことば—わたしは容赦せず、惜しまず、あわれみをかけずに、彼らを滅ぼす。」13:13, 14 ユダの民は自分たちの罪を悔い改めません。そのため、神は彼らをさばかれます。「クシュ人がその皮膚を、豹がその斑点を、変えることができるだろうか。それができるなら、悪に慣れたあなたがたも善を行うことができるだろう。わたしは彼らを、荒野の風に吹きとばされるわらのように散らす。」13:23, 24

とりなしの祈りは無用 14-15 章

日照りによって民も動物も苦しみました。エレミヤは再び民のために罪を告白してとりなしました。けれども主は言われました。「この民のために幸いを祈ってはならない。彼らが断食しても私は彼らの叫びを聞かない。…かえって、剣と飢饉と疫病で、彼らを絶ち滅ぼす。」14:11, 12 エレミヤは続けて祈ります。「御名のために、私たちを退けないでください。あなたの栄光の御座を辱めないでください。私たちとあなたの契約を覚えていて、それを破らないでください。」14:21 しかし主はエレミヤに言われました。「たとえモーセとサムエルがわたしの前に立っても、わたしの心はこの民に向かわない。この民をわたしの前から追い出し、立ち去らせよ。」15:1 神は、厳しい神のさばきを民に伝えるエレミヤを守ると約束されました。「わたしがあなたとともにいて、あなたを救い、あなたを助け出すからだ。」15:21

切迫する捕囚のしるし 16-17 章

主は、ユダの滅亡が間近に迫っていることを伝えるために、エレミヤに言われました。「あなたはこの場所で、妻をめとるな。息子や娘を持つな。」16:2 さらに主はバビロン捕囚を告げられます。

「それで、わたしはあなたがたをこの地から放り出し、あなたがたも先祖も知らなかった地に行かせる。」16:13 しかし同時に主は、バビロン捕囚からの解放という希望も伝えられます。「ただ『イスラエルの子らを、北の地から、彼らが散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる』と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。」16:15

主は、人間に信頼する者に対するのろいと、主に信頼する者の祝福を対比させ、主に信頼するようにと民に呼びかけました。「人間に信頼する者はのろわれよ。肉なる者を自分の腕とし、心が主から離れている者は。」17:5 「主に信頼する者に祝福があるように。その人は主を頼みとする。その人は水のほとりに植えられた木。流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って日照りの時にも心配なく、実を結ぶことをやめない。」17:7, 8 「わたしから離れ去る者は、その地に名が記される。いのちの水の泉である主を捨てたからだ。」17:13

陶器師の家での教訓 18 章

エレミヤは陶器師が製作中の器をこわして、ほかの器に作り替えるのを見ました。そして主は言われました。「イスラエルの家よ、わたしがこの陶器師のように、あなたがたにすることはできないだろうか—主のことば—一見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたはわたしの手の中にある。」18:6 神がイスラエルにさばきをもたらすのは、彼らが神に聞き従わず、悪の道から立ち返らないからでした。エレミヤのさばきの預言に反発する民は、エレミヤを殺そうとしました。それに対してエレミヤは神に、彼らをさばくようにと訴えます。「主よ、あなたはみなご存じです。私を殺そうとする彼らのはかりごとを。どうか彼らの咎を赦さず、彼らの罪を御前からぬぐい去らないでください。彼らを御前で打ち倒し、御怒りの時に、彼らに報いてください。」18:23 神のことばを伝えるエレミヤを殺そうすることは、神に真正面から敵対することです。エレミヤは、神の怒りを自分の怒りとして、神のさばきを訴えました。

102. エレミヤ書(4) 預言者と指導者 1 19-24 章

祭司と長老 19-20 章

エレミヤはベン・ヒノムの谷に民の長老と祭司とともに行き、ユダとエルサレムの滅びを告げました。そして持って行った焼き物の器を砕いて言いました。「万軍の主はこう言われる。陶器師の器が砕かれると、二度と直すことはできない。このようにわたしはこの民と、この都を砕く。人々はトフェトに空き地がないまでに葬る。」19:11 ベン・ヒノムの谷にあるトフェトでは子どもを全焼のささげ物としてバアルにささげるための祭壇が築かれていました。神はバアル礼拝をする民を滅ぼされます。エレミヤの預言に怒った祭司パシュフルはエレミヤを打ち、一晚足かせにつながしました。翌日足かせを解かれたエレミヤは、ユダの民も財宝もバビロンに引いて行かれ、パシュフルもバビロンで死ぬと預言しました。

エレミヤは預言者としての苦しみを神に訴えました。「私は、語るたびに大声を出して『暴虐だ。暴行だ』と叫ばなければなりません。主のことばが、一日中、私へのあざけりのもととなり、笑いぐさとなるのです。私が『主のことばを宣べ伝ええない。もう御名によっては語らない』と思っても、主のことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて、燃えさかる火のようになり、私は内にしまっておくのに耐えられません。もうできません。」20:8-9 どんなにエレミヤが語っても民は神の声を聞かず、むしろあざけりの的となりました。エレミヤは自分の生まれてきた日を呪い、苦しみを神に訴えました。

ゼデキヤの相談 21 章

ゼデキヤはユダの最後の王ですので、20 章から 21 章の間には 17 年の隔たりがあります。ゼデキヤはエレミヤに、バビロン軍がエルサレムに向かって来る状況下で主が救ってくださるか尋ねました。エレミヤは神がユダをさばくためにバビロンを用いておられることを伝えました。そして、いのちの道と死の道を伝えました。「主はこう仰せられる。見よ、わたしはあなたがたの前に、いのちの道と死の道を置く。この都にとどまる者は、剣と飢饉と疫病によって死ぬ。出て行ってあなたがたを囲んでいるカルデア人に降伏する者は生き、自分のいのちを戦勝品として得る。…この都は、バビロン王の手に渡され、彼はこれを火で焼く。」21:8-10

王と偽預言者たちの捕囚 22-24 章

「父ヨシヤに代わって王となった、ヨシヤの子、ユダの王シャルムについて、主はまことにこう言われる。『彼はこの場所から出て行って、二度とここには帰らない。彼は引いて行かれた場所で死に、再びこの地を見ることはない。』」22:11 シャルムとはエホアハズのことです。エホアハズはファラオ・ネコによってエジプトに幽閉されました。彼は再びユダに帰ることはありませんでした。ファラオ・ネコはヨシヤの子エホヤキムを王としました。(Ⅱ列王 23:33-34) エホヤキムは主の目に悪を行い、ユダの滅びを早めることになりました。彼の死をだれも嘆くことなく、ろばのように葬られます。「彼はエルサレムの門の外へ引きずられ、投げ捨てられ、ろばが埋められるように埋められる。」22:19 さらにエレミヤは、エホヤキムの子エホヤキン(エコンヤ)はバビロン捕囚にあり、その地で死ぬと預言しました。

23 章ではまず、当時の祭司や預言者たちは民を迷わせる偽牧者だと非難されます。「わざわざ。わたしの牧場の群れを滅ぼし散らしている牧者たち一主のことば。…あなたがたはわたしの群れを散らし、これを追い散らして顧みなかった。見よ、わたしはあなたがたの悪しき行いを罰する。」23:1-2 次にエレミヤは、救い主による平和と正義の時代が来ることを預言しました。「見よ。その時が来る。一主のことば一そのとき、わたしはダビデに一つの正しい若枝を起す。彼は王となって治め、栄えて、この地に公正と正義を行う。彼の時代にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。『主が私たちの正義』。それが、彼の呼ばれる名である。」この預言はイエス・キリストによって成就しました。

24 章では、前 597 年の第 2 回バビロン捕囚の際に、捕囚を免れた人がその事実を誇りました。それに対してエレミヤは、良いいちじくと悪いいちじくのかごを指して次のように預言しました。「バビロンに連れて行かれた人たちは良いいちじくであり、神は彼らを幸せにする。一方、捕囚を免れた人たちは悪いいちじくであり、神は彼らにわざわいを下す。」

103. エレミヤ書(5) 預言者と指導者2 25-29 章

すべての国々に対する怒りの杯 25 章

ヨシヤの子、エホヤキムの第4年、エレミヤは自分が預言活動を始めてからの23年間、ユダの民が神のことばを無視してきたことを民に語りました。そしてその結果として、神はバビロンの王ネブカドネツアルを用いてユダの国を廃墟にし、民は捕囚となってバビロンに連れて行かれ、70年間バビロンの王に仕えたと伝えました。さらに70年の終わりに、神はバビロンを罰するとの神の計画を伝えました。「この地はすべて廃墟となり荒れ果てて、これらの国々はバビロンの王に70年仕える。70年の終わりに、わたしはバビロンの王とその民を一主のことば—またカルデア人の地を、彼らの咎のゆえに罰し、これを永遠に荒れ果てた地とする。」25:11-12

70年の捕囚期間については2つの理解があります。まず70年とは1世代を表し、完全数でもあるので、神が定めた捕囚期間はおおよそ70年であるという理解です。もう一つは正確に70年の期間という理解です。この理解にもいくつかの数え方があります。まずダニエルたちが連れて行かれた第1回捕囚(前605年/606年)からエルサレム神殿再建開始(前536年/535年)の70年間。次にエルサレム陥落時の第3回捕囚(前586年)から神殿完成(前516年)などがあります。いずれにしても神の計画は確かに成就しました。

アヒカム、エレミヤを殉教から救う 26 章

エホヤキムの治世の初めに、エレミヤは神殿で主のことばを伝えました。それは民が神に従わなかったので、シロが廃墟になったように、エルサレムも神にさばかれて廃墟となるとという警告です。それを聞いた祭司と預言者とすべての民はエレミヤを捕らえ、エレミヤを死刑にしようとしてしました。「主が民全体に語れと命じられたことをみな、エレミヤが語り終えたとき、祭司と預言者とすべての民は彼を捕らえて言った。『あなたは必ず死ななければならない。』」26:8 エレミヤは、神が自分を遣わされたのだから、自分を殺せば血の責任をあなたがたが負わなければならないと告げました。すると指導者たちは、エレミヤを殺すべきではないと論じました。さらに長老たちの何人かが、かつて預言者ミカがヒゼキヤ王にエルサレムの破壊を預言した時、ミカを殺さなかったと語り、その結果、エレミヤのいのちは救われました。エレミヤを救った人たちの中にアヒカムがいました。一方、エレミヤと同じ預言をした預言者ウリヤはエホヤキム王によって捕らえられ殉教しました。

エルサレムとバビロンの偽預言者 27-29 章

27 章では、バビロンに反逆しようとするゼデキヤのもとに周辺諸国の使者が集まりました。エレミヤは縄とかせを首につけて彼らの前に現れ、神がこれらすべての地をネブカドネツアルの手に与えると宣言しました。「今わたしは、これらすべての地域をわたしのしもべネブカドネツアルの手に与え、野の生き物も彼に与えて彼に仕えさせる。」27:6 そして、ゼデキヤと外国の使者に偽預言者に聞き従うなど警告しました。また神殿に残されている器は、すべてバビロンに運ばれると預言しました。

28 章では、エレミヤの預言を聞いた偽預言者ハナンヤが、前597年にバビロンに持ち去られた器や捕囚民をネブカドネツアルが2年のうちに返還すると預言しました。それに対してエレミヤは言いました。「平安を預言する預言者については、その預言者のことばが成就して初めて、本当に主が遣わされた預言者だ、と知られるのだ。」28:9 しかしハナンヤは、エレミヤの首からかせを取り、それを砕いて、二年のうちにネブカドネツアルのくびきをすべての国々の首から砕くと言いました。エレミヤはハナンヤの死を預言し、そのとおりその年にハナンヤは死にました。

29 章では、エレミヤは捕囚の民に手紙を書きました。その中で民に対して、バビロンで家を建てて生活し、子を産み増えるように、またその町の平安を祈るようにと伝えました。そしてバビロン捕囚からの解放という神の計画を伝えました。「バビロンに70年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにいつくしみの約束を果たして、あなたがたをこの場所に帰らせる。わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている。—主のことば—それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」29:10-11 そして、手紙の中でエレミヤは、早期帰還を預言する偽預言者を信じてはならないと警告しました。

104. エレミヤ書(6) 回復の約束 30-33 章

回復される残りの者—新しい契約 30-31 章

30 章でエレミヤはイスラエルの回復を預言します。「見よ、その時代が来る一主のことば一。そのとき、わたしはわたしの民イスラエルとユダを回復させる一主は言われる一。わたしは彼らを、その父祖に与えた地に帰らせる。彼らはそれを所有する。」30:3 さらに預言は捕囚からの解放を飛び越えて、救い主による新しい神の国を預言します。「彼らは彼らの神、主と、わたしが彼らのために立てる彼らの王ダビデに仕える。」30:9「彼らの王ダビデ」とはダビデの子と呼ばれるキリストを指しています。

31 章でもイスラエルの回復が預言されます。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに真実の愛を尽くし続けた。おとめイスラエルよ。再びわたしはあなたを建て直し、あなたは建て直される。」31:3-4 イエスの誕生の時、ヘロデがベツレヘムの2歳以下の男の子を殺しました。それは31:15のエレミヤの預言の成就でした。「ラマで声が聞こえる。嘆きとむせび泣きが。ラケルが泣いている。その子らのゆえに。慰めを拒んでいる。その子らのゆえに。子らがもういないからだ。」

エレミヤは新しい契約を神が民と結ばれることを預言します。「見よ。その時代が来る一主のことば一。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。…これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである。一主のことば一。わたしはわたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。…わたしは彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」31:31-34 この箇所はヘブル書に引用され、キリストの血による贖いによって成就したことが教えられました。エレミヤの不動産購入 32 章

32 章はエレミヤの不動産購入によって、イスラエルの回復が預言されます。ゼデキヤの第10年、エルサレム陥落の前年、前587年、エルサレムはすでにバビロン軍によって包囲され、エレミヤは監視の庭に監禁されていました。エレミヤは神から、いとこのハナムエルがアナトテの土地を買ってほしいとやって来るから、買うようにと言われました。そのとおり、ハナムエルがエレミヤのもとにやって来たので、エレミヤは彼の土地を買い、正副の購入証書を土の器に入れて保管するように書記バルクに命じました。そして彼は言いました。「再びこの地で、家や畑やぶどう畑が買われるようになるからだ。」32:15 土地の購入はイスラエルの回復のしるしでした。

33 章もイスラエルの回復の預言です。エルサレム陥落が近づく中で、神はイスラエルの回復を約束されます。「わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答え、あなたが知らない理解を越えた大いなることをあなたに告げよう。…見よ。わたしはこの都に回復といやしを与え、彼らを癒す。そして彼らに平安と真実を豊かに示す。」33:3-6 さらにイスラエルの回復は、救い主による回復につながります。「その日、その時、わたしはダビデのために義の若枝を芽生えさせる。彼はこの地に公正と義を行う。その日、ユダは救われ、エルサレムは安らかに住み、こうしてこの都は、『主は私たちの義』と名付けられる。」33:15-16

王国の崩壊 34-36 章

不忠実な指導者たち 34 章

バビロン軍がエルサレムを攻める中で、エレミヤはゼデキヤ王にエルサレムの滅亡を預言します。一方、ゼデキヤもバビロンに連れて行かれるが、剣で死ぬことはないと伝えます。ゼデキヤはエルサレムの民と契約を結び、すべてのヘブル人奴隷の解放を宣言しました。民は宣言に従い、奴隷を解放しました。ところが後になって、彼らは心を翻し、自由の身とした奴隷を連れ戻し、再び奴隷として働かせました。奴隷の解放は、一見すると主に従う行為に見えますが、実はそうではなかったと考えられます。奴隷を解放した時は、バビロン軍に包囲された結果、奴隷を持つことが負担になったためです。その後バビロン軍がエジプトと戦うためにエルサレムを離れると、再び奴隷を連れ戻したからです。エレミヤは彼らの不信仰を責めました。「あなたがたはわたしに聞き従わず、各自、自分の同胞や隣人に開放を告げなかったの、…剣と疫病と飢饉の解放を宣言する。」34:17

105. エレミヤ書(7)

不信仰な民と王 35-36 章

35 章はレカブ人とユダの民の対比です。エレミヤは主のことばに従って、レカブ人に酒を飲ませようとしてしました。けれどもレカブ人は酒を飲みませんでした。それは、レカブ人は先祖レカブの子ヨナダブの命令に従い、一生ぶどう酒を飲まないからでした。主はエレミヤを通して言われました。「レカブの子ヨナダブが、酒を飲むなと子らに命じた命令は守られた。彼らは先祖の命令に聞き従ったので、今日まで飲んでいない。ところが、わたしがあなたがたにたびたび語っても、あなたがたはわたしに聞き従わなかった。」35:14 神はユダの民にはわざわいを、レカブ人には祝福を与えと言われました。

36 章は神に敵対するエホヤキム王の出来事です。エレミヤは書記バルクに神のことばを巻物に書き記させました。バルクはその巻物を主の宮で読みました。それを聞いたミカヤは首長たちのもとに行き、バルクが読んだ主のことばを伝えました。彼らはバルクを呼び、巻物を受け取り、王に報告しました。またバルクもエレミヤも身を隠すように伝えました。巻物は王の前で読まれました。すると王は巻物を焼いてしまいました。「ユディが三、四段を読むごとに、王は書記の小刀でそれを裂いては、暖炉の火に投げ入れ、ついに、巻物をすべて焼き尽くした。」36:23 首長たちは巻物を焼かないようにと懇願しましたが、王は聞き入れず、逆にバルクとエレミヤを捕らえるように命じました。しかし、主は二人を隠されました。エホヤキムの行為は神に対するあからさまな敵対行為でした。神はエホヤキムに対するさばきを宣告されました。一方、燃やされた巻物の内容に新たな言葉を加えた新たな巻物がエレミヤとバルクによって作られました。

エルサレムの包囲期間中の出来事 37-38 章

37～38 章では、ゼデキヤ王の動揺が記されています。37 章ではエレミヤに祈りを要請し、エレミヤが首長たちによって捕らえられて地下牢に入れられていた時には、彼を呼び出し、王宮の監視の庭に入れて保護しました。38 章では首長たちからエレミヤを死刑にするようにと言われると、首長たちにエレミヤを引き渡しました。エレミヤは穴に投げ込まれました。けれども、クシュ人の宦官エベデ・メレクがエレミヤを救うようにと王に嘆願すると、王はエベデ・メレクに命じてエレミヤを穴から引き揚げ、監視の庭にとどませました。

王はエレミヤに助言を求めました。その時、エレミヤはゼデキヤに主のことばを伝えました。「もし、あなたがバビロンの王の首長たちに降伏するなら、あなたのたましいは生きながらえ、この都も火で焼かれず、あなたもあなたの家も生きながらえる。あなたがバビロンの王の首長たちに降伏しないならば、この都はカルデア人の手に渡され、火で焼かれ、あなた自身も彼らの手から逃れることができない。」38:17-18 ゼデキヤは主のことばに従わず、降伏せず、エルサレムは火で焼かれ、ゼデキヤも捕らえられました。

エルサレムの占領 39 章

「ユダの王ゼデキヤの第 9 年、第 10 の月に、バビロンの王ネブカドネツアルは、その全軍勢を引いてエルサレムに攻めて来て、これを包囲した。ゼデキヤの第 11 年、第 4 の月の 9 日に、都は破られ、バビロンの王のすべての首長たちが入って来て、中央の門のところに座を占めた。」39:1-3 39:1-2 は前 588 年 1 月から前 586 年 7 月までの 2 年半のエルサレムの包囲の期間が記されています。39:3 の前 586 年 7 月、バビロン軍はついにエルサレムに侵入し、攻撃しました。ゼデキヤとすべての戦士はエルサレムを脱出しますが、バビロン軍に捕えられ、ゼデキヤの目の前で息子たちは殺され、ゼデキヤも目をつぶされ、青銅の足かせを付けられて、バビロンに連れて行かれました。

「バビロンの王ネブカドネツアルは、エレミヤについて、親衛隊の長ネブザルアダンを通して次のように命じた。『彼を連れ出し、目をかけてやれ。何も悪いことをするな。ただ彼があなたに語るとおりに、彼を扱え。』」39:11-12 その結果、エレミヤは、監視の庭から連れ出されて、以前エレミヤを助けたアヒカムの子グダルヤの家に移されました。(26:24) また神はエレミヤを通して、エレミヤを穴から引き出したエベデ・メレクのいのちを守り助け出すと約束されました。(38:1)

106. エレミヤ書(8)エジプトへの移住 40-45 章

ゲダルヤのもとでミツパに定住 40:1-12

ラマで他の捕囚の民と共に鎖につながれていたエレミヤは、バビロンの親衛隊長ネブザルアダンによって釈放されました。その後、エレミヤはバビロンの王が立てたユダ総督ゲダルヤのもとに行き、残された民と共に、新たにユダ州の都となったミツパにとどまりました。ゲダルヤは民に「カルデア人に仕えることを恐れてはならない。この地に住んで、バビロンの王に仕えなさい。そうすれば、あなたがたは幸せになる」と言って民を励ましました。(40:9)

流血と分裂 40:13-41:18

ところがユダ全土に散らばった軍の長の一人イシュマエルが、ゲダルヤと彼と共にいた人たちを殺し、さらに残りの者たちを捕らえました。それを知った別の軍の長ヨハナンが、イシュマエルと戦うために出て行きました。その結果、イシュマエルは逃げ、彼に捕らえられた人たちは解放されました。ヨハナンたちはバビロンの王を恐れて、皆を連れてエジプトに行こうとしました。「バビロンの王がこの地の総督としたアヒカムの子ゲダルヤを、ネタンヤの子イシュマエルが打ち殺したため、カルデア人を恐れたからである。」41:18

エジプトへの途中 42:1-43:7

ヨハナンたちはエレミヤのもとに来て言いました。「どうか、私たちの願いを受け入れてください。私たちのため、この残りの者すべてのために、あなたの神、主に祈ってください。…私たちはい必ず、あなたの神、主が私たちのためにあなたを遣わして告げられることばのとおり、すべて行います。それが良くても悪くても、私たちは、あなたを遣わされた私たちの神、主の御声に聞き従います。私たちの神、主の御声に聞き従って幸せを得るためです。」42:2, 5, 6 十日後、エレミヤはヨハナンたちに主のことばを告げました。「もし、あなたがたがこの地にとどまるのであれば、わたしはあなたがたを建て直して、壊すことなく、あなたがたを植えて、引き抜くことはない。…あなたがたが恐れているバビロンの王を恐れるな。…しかし、あなたがたが『私たちはこの地にとどまらない』と言って、あなたがたの神、主の御声に聞き従わず、『いや、エジプトに行こう。…』と言うのであれば、あなたがたの恐れている剣が、あのエジプトの地であなたがたを襲い、あなたがたの心配している飢饉が、あのエジプトであなたがたに追い迫り、あなたがたはそこで死ぬ。」42:10-16

それに対してヨハナンたちはエレミヤに告げました。「あなたは偽りを語っている。私たちの神、主は『エジプトに行ってそこに寄留してはならない』と言わせるために、あなたを遣わされたのではない。ネリヤの子バルクが、あなたをそそのかして私たちに逆らわせ、私たちがカルデア人の手に渡して、私たちが死なせるか、あるいは、私たちがバビロンへ引いて行かせようとしているのだ。」43:2, 3「カレアハのヨハナンと、軍のすべての高官たちと、民のすべては、『ユダの地にとどまれ』という主のことばに聞き従わなかった。」43:4 こうして、ヨハナンたちは主のことばに聞き従わず、ユダの地に住む残りの者すべてとエレミヤとバルクを連れて、エジプトに行きました。

エジプトにおけるエレミヤの使信 43:8-44:30

エジプトのタフパンヘスでエレミヤは民に、主のことばを語りました。「なぜ、あなたがたは、寄留しようとしてやって来たエジプトの地でも、ほかの神々に犠牲を供えて、自分の手のわざによってわたしの怒りを引き起こすのか。…見よ。わたしはあなたがたに顔を向け、わざわいを下し、ユダのすべての民を絶ち滅ぼす。…剣に逃れる少数の者たちだけが、エジプトの地からユダの地に帰る。こうして、エジプトの地に来て寄留しているユダの残りの民はみな、わたしのことばと彼らのことばの、どちらが成就するかを知る。」44:8, 11, 28

バルクへの約束 45 章

45 章は約 20 年前の第 1 回捕囚の後の出来事を記しています。バルクはユダに臨む神のさばきを知って、悲しみ失望しました。その時、神はバルクのいのちを守ると約束されました。「わたしはあなたが行くどこでも、あなたのいのちを戦勝品としてあなたに与える。」45:5 そのとおり、主はバルクのいのちを守り、エルサレムの滅亡後もバルクはエレミヤと共にいました。

107. エレミヤ書(9)諸国や町々に対する預言 46-49 章

エジプト 46 章

46-51 章はエレミヤが語った諸国に対する預言です。まず 46 章はエジプトについての預言です。エジプトとアッシリアは前 605 年にカルケミシュの戦いでバビロンと戦い、敗れました。この結果、アッシリアは滅び、新バビロニア帝国(バビロン)の支配が始まりました。「エジプトについて、すなわちユーフラテス河畔のカルケミシュにいたエジプトの王ファラオ・ネコの軍勢について。ユダの王、ヨシアの子エホヤキムの第 4 年に、バビロンの王ネブカドネツアルがこれを打ち破った。」46:2

エレミヤはさらに、バビロン軍がエジプトのナイル川を 800 キロもさかのぼって進軍し、下エジプトの首都テーベを討つと預言しました。それは神のさばきであり、さばきの後、エジプトは回復します。「見よ。わたしはテーベのアモン、ファラオとエジプト、その神々と王たち、ファラオと彼により頼む者たちを罰する。わたしは彼らを、そのいのちを狙う者たちの手に、バビロンの王ネブカドネツアルの手とその家来たちの手に渡す。その後エジプトは昔のように人が住むようになる一主のことば。」46:25-26

ペリシテ人 47 章

神はバビロン軍を用いてペリシテ人を滅ぼします。「主はこう言われる。『見よ。北から水が上って来てあふれる流れとなり、地とそこに満ちているもの、町とその住民を押し流す。…まことに主は、ペリシテ人を、カフトルの島の残りの者を破滅させる。』」47:2-4 カフトルの島はクレタ島とその周辺の島々で、ペリシテ人の出身の地です。

モアブ 48 章

モアブの先祖はロトと姉娘との子で、ヨルダン川東岸に住んでいました。主はバビロン軍を用いてモアブを滅ぼします。しかし主はやがてモアブを回復させます。「モアブは打ち破られる。その幼き者たちは叫び声をあげる。…ああ、モアブ。ケモシュの民は滅びる。おまえの息子は捕われの身となり、娘は捕虜になって連れ去られるからだ。しかし終わりの日に、わたしはモアブを回復させる。」48:4, 46, 47

アンモン人 49:1-6

アンモンの先祖はロトと妹娘との子で、ヨルダン川東岸に住んでいました。主はバビロン軍を用いてアンモン人を滅ぼします。しかし主はやがてアンモン人を回復させます。「それゆえ、見よ、その時代が来る。一主のことば—そのとき、わたしはアンモン人のラバに戦いの雄たけびを聞かせる。そこは荒れ果てた廃墟となり、その娘たちは火で焼かれる。イスラエルがその跡を継ぐ。…その後、わたしはアンモン人を回復させる。」49:2, 6

エドム 49:7-22

エドムはエサウの子孫で、ヨルダン川東岸に住んでいました。主はバビロン軍を用いてエドムを滅ぼします。「まことに、わたしは自分にかけて誓う。一主のことば—必ずボツラは恐怖のもと、そしりの的、廃墟、そしてののしりの的となる。そのすべての町は永遠の廃墟となる。」49:13

ダマスコ 49:23-27

ダマスコはシリア(アラム)の中心都市で、前 733 年にアッシリアによって滅ぼされ、その後は独立国家ではなくなります。主はバビロン軍によっても支配されると言われます。「わたしは、ダマスコの城壁に火をつける。その火はベン・ハダドの宮殿を食い尽くす。」49:27

ケダルとハツォル 49:28-33

ケダルとハツォルの先祖はイシュマエルで、アラビアの遊牧民族でした。バビロン軍はこれらの遊牧民族を滅ぼします。「ハツォルはとこしえまでも荒れ果てて、ジャッカルの住み家となる。そこに人は住まず、そこに人の子は宿らない。」42:33

エラム 49:34-39

エラムはバビロンの東側、ティグリス川の東側にありました。主はバビロン軍を用いてエラムを滅ぼしますが、後に回復させます。「見よ。わたしはエラムの力の源であるその弓を折る。…しかし、終わりの日になると、わたしはエラムを回復させる。」49:35, 39

108. エレミヤ書(10)バビロンに対する預言と結論 50-52 章

バビロンに対する預言 50-51 章

50 章と 51 章はバビロンに対する預言です。神はバビロンを用いてユダをさばき、ユダは滅びます。けれども神はバビロンをその高ぶりと偶像礼拝の罪のゆえに、ペルシアによって滅ぼされます。「主が預言者エレミヤを通して、バビロンについて、すなわちカルデア人の地について語られたことば。『国々の間に告げ、旗を掲げて知らせよ。隠さずに言え。「バビロンは攻め取られた。ベルは辱められ、メロダグは打ちのめされた。その像は辱められ、その偶像は打ちのめされた。」まことに、北から一つの国がそこに攻め上り、その地を荒れ果てさせた。そこには住むものもない。人から家畜に至るまで逃げ去った。』」50:1-3

「矢を研ぎ、小盾を取れ。主はメディア人の王たちの霊を奮い立たせられる。御思いは、バビロンを滅ぼすこと。それは主の復讐。ご自分の神殿の復讐だからである。」51:11 メディア人はバビロン東北部に強大な国家を築いていました。彼らもバビロンを攻撃しました。メディア人とペルシア人の両方の血を引くペルシアの王キュロスはバビロンを滅ぼし、メディアを併合しました。そしてアケメネス朝ペルシアを築きました。アケメネス朝ペルシアはメド・ペルシアと呼ばれます。

一方、バビロン滅亡はユダヤ人の解放を意味します。「その日、その時—主のことば—イスラエルの民もユダの民も、ともにやって来る。彼らは泣きながら歩みつつ、その神、主を尋ね求める。彼らはシオンを求め、その道に顔を向けて言う。『さあ、私たちは主に連なろう。忘れられることのない永遠の契約によって』と。」50:4-5「見よ。私はアッシリアの王を罰したようにバビロンの王とその地を罰する。わたしはイスラエルをその牧場に帰らせる。…その日、その時—主のことば—イスラエルの咎を探しても、それはない。ユダの罪も見つからない。わたしが残す者を、わたしが赦すからだ。」50:18-20

エレミヤはバビロンの滅びの預言のことばを一つの書物に記しました。そして、これをバビロンで読み、読み終えたらそれに石を結び付けてユーフラテス川に投げ入れるようにとセレヤに命じました。セレヤはエレミヤに命じられた通り、バビロンの滅びの預言のことばを読み、書物をユーフラテス川に投げ入れました。そしてエレミヤに命じられたとおりに言いました。「このように、バビロンは沈み、浮かび上がれない。わたしがもたらすわざわいを前にして。彼らは力尽きる。」51:63 エレミヤのことばはこれで終わります。

結論 52 章

ゼデキヤの治世、エルサレム陥落、捕囚の要約が、エレミヤ書の結論となっています。エレミヤは、40 年間の預言活動の中で忠実に語ってきた主のことばが成就したことを目撃しました。ゼデキヤと彼の家の者は主に対する不従順のゆえにバビロン軍に捕えられ、息子たちはゼデキヤの目の前で殺されます。そしてゼデキヤは目をつぶされ、青銅の足かせでつながれて、バビロンに連れて行かれ、死ぬ日まで獄屋に入れられました。

神殿とその庭の備品や什器は、神殿が破壊される前に、バビロンに運び去られました。これもエレミヤ 27:22 の預言どおりになりました。そしてエルサレムはバビロン軍によって陥落しました。「バビロン王の家来、親衛隊の長ネブザルアダンがエルサレムに来て、主の宮と王宮とエルサレムのすべての家を焼き、そのおもだった建物をことごとく火で焼いた。親衛隊の長と一緒にいたカルデアの全軍勢は、エルサレムを取り巻く城壁すべてを打ち壊した。」52:12-14 そして貧しい民の一部をエルサレムに残し、あとの生き残った者をバビロンに連れて行きました。一方、バビロンに降伏してバビロンに連れて行かれたエホヤキン、エビル・メロダグがバビロン王になると、獄屋から解放され、高い位につき、王の前で食事をするようになりました。